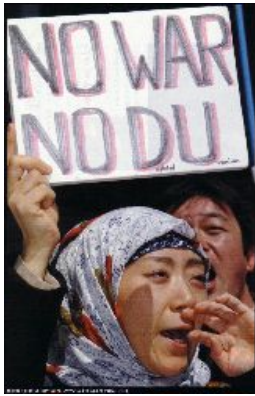
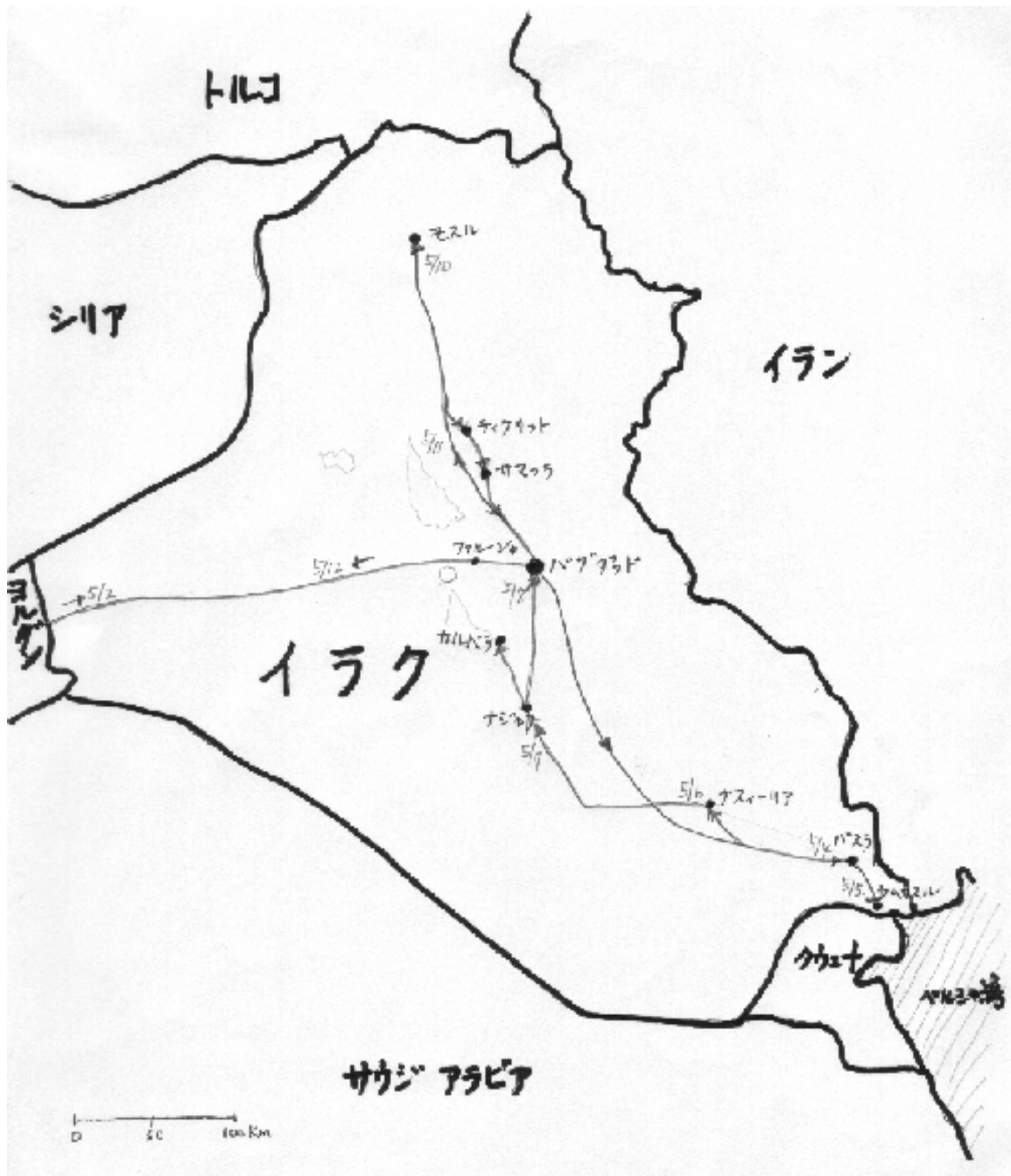


イラクレポート ー占領下のイラクを行くー

ヤスミン 植月千春







著者略歴

京都市立芸術大学卒業

ザルツブルグ留学後、帰国してラウンジピアノの演奏活動始める。

京都、サンフランシスコ、ベルギー、シンガポール、東京と活動の場を移す。

アラブの民族楽器カーヌーンに惹かれ、トルコにてターヒル・アイドードユ、チュニジアにてジャメル・アビドに師事し、カーヌーン奏法およびマカーム理論を学ぶ。

2001年、イスラム教徒になる。

2003年5月、軍事占領下の実態を体験すべくイラクに入る。

現在、反戦のためのコンサートに力を入れている。

※ ホームページ <http://www.yasemin.info>

目次

【イラク攻撃に反対します！】

(イラク攻撃開始の日(2003.3.20)からの訴え)

【イラク攻撃に反対します！】 3

(1) どうぞもう一度考えてみてください 3

(2) アッサラーム アライクム ブッシュ大統領へ 3

(3) ブッシュ大統領へーイラクの人々に「衝撃と恐怖」を与える権利があなたがたにあるのですか 3

(4) ジハードとは努力するという意味です 4

(5) こんなことには耐えられません 4

(6) イラクの家族 5

(7) あなたがたのペット以下なのですか 5

(8) 湾岸戦争とは、何だったのか 6

(9) 再びイラク攻撃へ 6

(10) 天に唾するアメリカ 7

(11) なぜ米英は、こうまでやみくもなのか 8

(12) 「関心がない」こと 8

(13) アメリカという「友人」 9

(14) 自爆攻撃が卑怯？ 10

(15) アメリカ大使館前の人間模様 11

(16) ことばの意味 11

(17) 戦争にこじつける理由 12

(18) アフガニスタンのこと 12

(19) 計画的な戦争 13

(20) 過去が嘘なら、未来だって嘘 14

(21) ことばの羅列 15

(22) バグダード陥落？ 16

(23) 物言わぬことは「非暴力」？ 17

(24) 気が狂いそうになるほどの悲しみに 18

(25) こどもの墓地 18

(26) 安心して眠れますか？ 19

(27) 選り好みなどしてられない 20

(28) いいがかりの連続 21

(29) 略奪の真相は？ 22

(30) イラクへ 24

【占領下のイラクに行く！】 26

イラクの現状 26

ロシアからドバイへ 26

ドバイからアンマンへ 27

アンマンからベイルートへ 28

ベイルート 4月29日(火) 29

レバノンからシリアをぬけてふたたびアンマンへ 29

アンマンからバグダードへ 31

バグダードにて 5月2日(金) 33

バグダードにて 2 34

バスラへ 36

バスラにて 38

ナスィーリア・ナジャフへ 41

ナジャフ・クーファ・カルバラー 43

バグダードへ 45

バグダードにて 46

モースルへ 48

ティクリット・サーマッラーへ 50

イラク出国 52

ダマスクスにて 5月13日(火)～15(木) 54

東京にて 6月12日(木) 56

劣化ウラン弾とは何？ (Depleted Uranium Tipped Shells) 57

【イラク攻撃に反対します！】

(1) どうぞもう一度考えてみてください

どうぞもう一度考えてみてください。
イラクがアメリカやイギリスに何をしたのですか？
将来何かするかもしれないと言って、その国の政権を潰したり、その国の人々を虐殺するのが許されることですか。
持っているかどうかはわからない大量破壊兵器を廃棄しろと言って大量破壊兵器でその国の人達を虐殺するのが許されることですか。
例えば、この子は大人になったら自分の敵になるかもしれないと言って、大人が子供を殺すのが許されることですか。

この戦争はそういうことです。
この戦争を認めることは、これから先ずっと私たちが疑心暗鬼の中で生きていかねばならないということです。

この戦争を認めることは、私たちが理性を持つ人間であることを放棄することです。
愛情と信頼のある人間関係を放棄することです。

お願いです。
この戦争を止めて下さい。

私はイスラム教徒です。
イスラムは全てのテロを禁止しています。
この戦争を受け入れることは、私自身の問題としてイスラムを否定することになります。
私は、一人のイスラムとして、非暴力で、この侵略戦争に対してジハードします。

2003.03.20 ヤスミン植月千春

(2) アッサラーム アライクム ブッシュ大統領へ

Mr. President Bush

Assalam Alaykum
This is a greeting in Arabic, which means "Peace on you."
We, muslims, bless each other with this words.
Assalam Alaykum. Peace on you.

Mr. Bush, who call yourself as a pious Christian, and all Christians who support this war, please read your Bible once more.
Do you find any words in the book to justify to

kill people?

Do you find any words in it to justify invading other nations?

Your war, which you call justice, takes away the dignity, trust and love from people.

Although you say you are fighting against terrorists, as a matter of fact, you force peaceful people to become terrorists.

From now on, you have to live scared in serious doubt against human beings.

You have taken a choice of a hell in this world.

I believe that Jesus Christ was crucified by the people like you, hypocrites, whom you call Christians.

21, Mar. 2003 Yasemin Uetsuki Chiharu

アッサラーム アライクム

あなたの方の上に平安あれ、という意味のアラビア語です。

私たちイスラム教徒は、このことばでお互いを祝福しあいます。

アッサラーム アライクム。あなたの上に平安あれ。

自分は敬虔なクリスチャンであるというブッシュ大統領。

そして戦争を支持しているクリスチャンの皆さん。
どうぞもう一度あなたがたの聖書を読み直してください。

聖書の中に、人が人を殺すことを正当化できる言葉があるのですか。

他国への侵略を正当化する解釈ができるのですか。
あなたがたのやっている正義という名の戦争は、人間の尊厳を奪い取り、人と人との間の信頼と愛情を根底から崩してしまうものです。

テロリスト撲滅といいながら人々を追い詰めて、平和に暮らしている人々をテロリストに変えてしまう行為です。

あなたがたは一生疑心暗鬼で人を信じることができず、テロにおびえながら暮らしていくのです。
それはあなたがた自身が選び取ったこの世界での地獄です。

キリストはクリスチャンと名乗るあなたがたのような人達の為に十字架につかれたのだと私は思います。

2003. 03. 21 ヤスミン植月千春

(3) ブッシュ大統領へーイラクの人々に「衝撃と恐怖」を与える権利があなたがたにあるのですか

あなたがたの心は、あなたがたの祖先の頃から全く進歩していません。
進歩したのはテクノロジーだけ。

あなたがたは、一体、いま、何をしているのかわかっているのですか？

あなたがたの祖先が、稚拙な武器しか持たない先住民から取り上げた土地で、そこに住む人々を自分達に歯向かう者として次々と虐殺していった。

そのような恥ずべき過去を、今またイラクでそのまま繰り返しているではありませんか。
そのときは金のため、今は石油の為に。
そのときは大陸支配、今は世界制覇の野望のために。

あなたがたには人間の心が無いのですか。

あなたがたのやっていることはイラク人民の解放ではない。
中東の持つ石油を自分達に解放しようとしているだけです。
昔自分達が欲しいと思った土地を先住民から力づくで奪ったように。
あなたがたの興味は昔も今もそこにある宝物だけであり、そこに住む人々の命には興味はないのです。

イラクの人々に「衝撃と恐怖」を与える権利があなたがたにあるのですか。
あなたがたの、嘘と欺瞞、非道と暴力はもうたくさんです。

2003. 03. 22 ヤスミン植月千春

(4) ジハードとは努力するという意味です

アッサラム アライクム あなた方の上に平安あれ。
私たちイスラム教徒は、このことばでお互いを祝福しあいます。
もし私がイスラムをしらなかったら、クルアーンを読むことができなかったら、このような大国の横暴の前に怒りと悲しみで耐えることができなかったかもしれません。
クルアーンは侵略者に対して戦え、しかし侵略者であってはならない、どのような酷い状況の中でも、希望を失わず、忍耐しなさいと言っています。

人間は必ずいつか死を迎えます。
アメリカやイギリスに対して何の危害も加えていないイラクの人達は、例えこの爆撃で犠牲になっても天国へ迎え入れられます。
この戦争を支持している人たちは、死を迎えるとき、自分が何をしたのか、はっきり知ることになるでしょう。

私はイスラム教徒になつての2年間、一所懸命クルアーンの勉強をしてきました。

爆撃の下で、兄弟、姉妹が、どんな気持ちで祈っているかを考えるとたまらなくなります。
爆撃を知るたびに、私はクルアーンを読み、祈りのことばを唱えることで耐えています。
イスラームは、ひとりひとりがジハードしなければなりません。

ジハードとは、聖戦という訳が使われていますが、努力するという意味です。

イスラームはすべてのテロを禁じています。
今、私が、この戦争という名の大きなテロに、何の抵抗もしないことは、自分の宗教を否定することになります。

この怒りと悲しみに耐えて、侵略者に対してすぐに侵略をやめるよう訴えるためにできることをやっています。

2003. 03. 23 ヤスミン植月千春

(5) こんなことには耐えられません

お願いです。
誰かこの人間として最も愚かな行為をやめさせてください。

ブッシュ大統領。あなただつてベトナム戦争の時、戦いが怖くてお父さんの力で兵役を逃れたと聞いています。

小泉首相そして議員の方たち。アメリカの行為を支持するのなら、どうぞあなたがた自らイラクに入って戦ってください。人の命で戦争をしないでください。

私たちを共犯にしないでください。

どんな理由を以ってしても、大量殺戮である戦争は正当化されません。

学校の先生たち。あなたがたは子供達にあの戦争は悪いけどこの戦争は良いんだよと教えるのですか。
人殺しをしてはいけないと教えているのではないのですか。
こんなことばかり見ていたら、子供たちは自分が正しいと信じ込むことによって、自分の正義を否定する人は、殺しても構わないと思うようになってしまいます。
こんなにテレビで毎日、映画かゲームみたいに人を殺すところをみていたら、強い者はその力を使ってみたくなり、人殺しはゲームになってしまいます。

お願いです。
もう一度人間としての心を、取り戻してください。

こんなことには耐えられません。

2003. 03. 24 ヤスミン植月千春

(6) イラクの家族

毎日、爆撃の夢を見て、寝汗でグッショリになって目がさめます。目がさめて、ああ、よかった、夢だった、と思います。それから、ハッとして、何が良かった.. だ、イラクでは夢からさめたって悪夢は現実のものとしてそこにあるんじゃないか、私みたいに夢からさめて逃げられないんじゃないか、と気づくのです。

イラクに住む人達には一時だって安心していられる時はないんです。

バスラの病院を報道した VTR に、空爆で足を切断しなければならなかった 17 歳の少女へのインタビューがありました。

彼女はアメリカに対するうらみを言うのでも、自分の運命を呪うのでもなく、退院したら将来先生になりたいの、と言っていました。

苦しめられても苦しめられても、希望を失うことなく将来の夢を語る彼女の伏目がちな瞳は純粋で誇り高いものでした。

バスラで大規模な空爆があったと報道されていました。

彼女が今、無事かどうか確かめる術はありません。この戦争は、そんなささやかな夢すらも奪ってしまうのです。

日本からイラクに人間の盾として入った人たちは、イラクの人たちと接したことのある人たちで、イラクの人たちに友人として迎えられた人たちなんです。

イスラームにとって友人とは家族です。

考えてみてください。自分を家族としてあたたかくもてなしてくれた人たちを守りたいと思うのは自然なことではありませんか？

彼らは、友人であり、家族であるイラクの人たちを裏切ることができないという思いで、命がけでイラクにもどっていったのです。

私にも、「あなたは、私の姉妹だからね」ともてなしてくれたイラクの人たちがいます。

今、安全な場所で「爆撃をやめて！」と言っている自分はずかしく思います。

でも、私に残されている方法はこれしかないのです。だから、おねがいします。爆撃を今すぐ、今すぐやめてください。

私の兄弟・姉妹・友人たちを殺さないで！

2003. 03. 25 ヤスミン植月千春

(7) あなたがたのペット以下なのですか

ブッシュ大統領、ブレア首相、あなたがたのやっている戦争は人々の良心を麻痺させ、人間同士の憎しみを煽りたてる、恐ろしい神への冒瀆です。

イラクに侵攻している兵士の人たちにも良心があるはずですよ。

人を殺すことに命を賭けるくらいなら、人を殺さないことに命をかけてください。

アメリカ大使館で働いている皆さん、あなたがただって人を助けることを目的の一つに仕事をしているのではないのですか。

人というのはアメリカ人だけをさすのですか。

アメリカ人もイラク人もみんな同じ人間ではないのですか。

アメリカ人の命は大切だけど、イラク人の命はどうでもいいのですか。

戦争という名の人殺しを傍観することは、人間の宝物である良心を墮落させることです。

イスラエルではイラクからの報復に備えて、ペット用防護シートが開発され、飛ぶように売られているということです。

パレスチナの人達は、自分を守る何の装備も持っていないのです。

イラクの人達も同じです。

パレスチナ人やイラク人の命は、あなたがたのペット以下なのですか。

これが人間が人間に対してできる仕打ちなのですか。

今すぐこの侵略戦争をやめてください。

これ以上憎しみの連鎖を増幅しないでください。

ミサイルではなく優しい言葉を。

弾丸ではなく、水と薬を。

憎しみではなく愛を、注いでください。

あなたがたは利権や覇権目的だけで動いているようですが、あなたにとって不必要な人間を粛清していけば、いずれあなたがた同士でころしあうことになるでしょう。

あなたがたのとっている行動は、人間を絶滅させる行為です。

こんな愚かなことはどうぞ今すぐやめてください。

2003. 03. 26 ヤスミン植月千春

(8) 湾岸戦争とは、何だったのか

3月18日から眠れない日がつづき、20日の爆撃が始まってからは、ショックと恐怖と悔しさでメソメソ泣いてばかりいました。

本当にアメリカがこの戦争につけた名前通りの効果を、日本に居ながらにして私は演出させられていたことに気づき、恥ずかしさで自己嫌悪に陥ってしまいました。

バグダードの爆撃の下にいる友人達は、「爆弾は私の上には落ちない。」と言いきってたたかっています。

アッラーのご計画を信じて、今出来ることをやらなければ…、とメソメソ状態を一週間かけてやっと抜け出すことができました。

今まで考えてきたことを、少しまとめてみようと思います。

【湾岸戦争とは、何だったのか。】

イラクは、湾岸戦争以降この12年間ひたすら国連の経済制裁にじっと耐えてきました。推定15～25万人ほどのイラク人が湾岸戦争で殺されただけでなく、アメリカの使用した300トンもの劣化ウラン弾の放射線の影響により死産や奇形児の出産や、ガンで死亡する人も年を追って増えつづけ、劣化ウラン弾の多用された南部のバスラでは5倍10倍の発生率になっています。経済制裁により、薬も、水を浄化する装置の部品もまかなえぬままに子供や女性を中心に現在までに、栄養失調やちょっとした病気で死に至った人は150万人ともそれ以上ともいわれています。

それに、イラクに、毎年のように行われていた米英の爆撃のことや、民間人が死んでいることなどは余りニュースになっていませんでした。

もちろん劣化ウラン弾の影響はイラクだけにではなく、使った側のアメリカ兵などにも甚大な影響を与えました。一般に湾岸戦争症候群として知られているものですが、兵隊の国籍を問わず、イラク南部の劣化ウラン弾の使用された地域に足を踏み入れた人達に同様の症状が起きています。イラクの被害が甚大なのは言うまでもありませんが、当時のアメリカ兵たちの中でも、すでにこれにより9000人死亡したということです。米国国防省は、劣化ウラン弾との因果関係を認めませんが、厳然とした事実です。戦車の装甲を貫き焼き尽くすスーパー兵器が核の廃物利用ででき、今後もどんどん使う予定があるので、これをやめるわけにはいかないでしょう。

こうした放射線障害は戦場だけでなく、製造過程でも、核関連の兵器製造工場や試射場の周りで起こっていることです。製造し、実験している段階で、数十万人の被曝者を生み出しています。

過去にアメリカが自国兵隊をも核兵器の人体実験に使ったのも良く知られていることです。兵隊や民間人も使い捨て、全て軍需産業の利益優先です。

ところで、このスーパー兵器ショーであった湾岸戦争も、クウェートの石油盗掘などに端を発した、アメリカがイラクに起こさせた戦争でした。クウェート侵攻前にフセイン大統領はイラク駐在米大使に打診しましたが、大使は「我国は貴国とクウェートとの国境問題に意見を言う立場にない」と事実上黙認する旨の発言をしました。そうして、イラクがクウェートを併合すると、手のひらを返して世界にアピールし、連合軍を組織してイラクを叩いたのです。有名な真っ赤な嘘であった「水鳥報道」と「イラク軍兵士による病院での乳児虐殺事件」を始め、ありったけのメディアを総動員して宣伝を繰り広げ、正義を謳って戦争を煽りました。

日本もこれに130億ドルを供出しました。

アメリカはピンポイント爆撃を宣伝しながら、その実、陰惨な大量爆撃を行いました。砂漠ではイラク軍の退路をふさいで、死のハイウェイと呼ばれたようにウラン弾で全ての戦車隊を破壊し焼き尽くしたり、生き埋めにして虐殺したのです。何も知らされずここに立ち入った兵隊達は敵であれ味方であれ、いずれひどい放射線障害を起こすことになりました。戦争後すぐに、ラムゼイ・クラーク元米国司法長官は、米大統領らを戦争犯罪で告発しました。アメリカはこうして、膨大な石油権益を手に入れ、サウジに軍をおおびらに駐留させることにも成功したのです。

2003. 03. 27 ヤスミン植月千春

(9) 再びイラク攻撃へ

テレビのニュースをみていると、自由であるとか、平和、民主主義などというのが、絵空事に過ぎず、世界が本当に気が狂ってきていることを感じます。スポーツやゲームを解説している感覚の評論家たち。天気予報でもしているような口調のアナウンサーたち。一体、人間同士の思いやりはどこへいつてしまったのでしょうか。私自身も気が狂いそうです。

【再びイラク攻撃へ】

そもそも、イラクはアメリカに対して何の危害を加えたこともなく、そんな力もないわけです。査察しても何も見つけられなかったところに、何の脅威があるのでしょうか。

この12年の間の査察によりこれら兵器は破壊された、と7年間査察官を勤めたスコット・リッター氏が証言しています。また、イラクからカナダに亡命した物理学者でさえ、原爆開発が完全に頓挫したこ

とを認めています。

そもそも大量破壊兵器など問題ではないのです。そんなことなどアメリカは百も承知ですが、アメリカの言うことをきかない国は、力づくで叩き潰すのがこの国がこれまでやってきた方法です。しかも、迅速に徹底的に打ち負かすことを国家政策としています(米国国家安全保障委員会政策文書(1989年))。

ブッシュ大統領が唱える「テロとの闘い」ですが、あまりの仕打ちにたまらなく起こされる自爆テロの原因は、誰でも知っているように全てアメリカやイスラエルなどの理不尽な国家テロにその根源があります。これらの国々のやりかたは、直接あるいは軍事独裁政権を支援したりして軍隊で民主勢力を叩くという方法をとっていますが、とりわけパレスチナ等の場合は、日常的な拷問や殺戮などで煽って自爆テロを起こさせておいて、軍隊の力で叩きのめすというのが陰惨なパターンとして定着しています。

アメリカは、アメリカや同盟国に対して行われる攻撃をテロと呼んでいるのであって、アメリカが自国利益追及や資源確保のために、南米やアフリカで行っている破壊活動や民衆の虐殺、あるいはイスラエルがパレスチナの人々に対して行う拷問や攻撃、虐殺はテロとは呼ばないのです。

アメリカの言うテロは自然発生的に生まれるものがあるわけではなく、アメリカ自身の行動がそれを起こしているのです。しかしアメリカは自らを糾すことができないので、輪をかけて抑圧にかかる構図が生まれます。

12年間耐え、そんな中でも、アメリカのさまざまな言いがかりに対して全てを受け入れてきたイラクを今、アメリカは、徹底的に潰そうとしているのです。世界で一番裕福な国が、苦しみ続けてきた国の首都を、広島原爆と同等の効果を期待してミサイルなどで破壊し尽くそうというのです。対戦車砲、バンカーバスターや貫通型の巡航ミサイルなどには劣化ウランが使用されます。すでに先の湾岸戦争で使用した量を超えているかもしれません。また、バンカーバスターに戦術核を搭載して攻撃することも計画されているようです。今日、民間施設である通信設備を攻撃したバンカーバスターは今までにない破壊力をもっていたとの報道がありました。が、上記のものでないことを祈ります。

イラクはアメリカを攻撃したこともないし、その意図もないのに、米英豪は「イラクが大量破壊兵器を保有している恐れがあり、アメリカを攻撃する恐れがあるから専制攻撃」したのです。探してもでてこない武器を恐れてその国を攻撃したり、国をのっとって良い理由になりますか。たとえ戦争がどのようにに終結しても、間違いなくバグダードは放射能で苦

しむ街になります。

2003.3.28 ヤスミン

(10) 天に唾するアメリカ

あまりに理不尽なことが毎日毎日あたりまえのように、そして他人事のように報道されています。昨日国連で、イラク大使が、「アメリカは女性や子供を相手に闘っているのだ」と非難したところ、アメリカ大使は「我慢して聞いていたが、もうたくさんだ」と途中退席。

女性や子供を虐殺している事実を指摘されることから逃げたいのかもしれませんが、人の話を最後まで聞く忍耐すら持ち合わせていないようです。

イラクで毎日爆撃にさらされている人々は、逃げだすことも「もうたくさんだ」と言うことすら許されていないのに。

アメリカ代表である大使は、非難の言葉の弾丸すらまともに受けることもできず、逃げてしまうのです。一方、私たち日本の首相は、侵略戦争のまっただ中にむりやり放り込まれて死と向かい合わせの毎日を送っているイラクの人々を今救うことには全く興味を示さず、戦後の復興には率先して力を貸したい...と。

アメリカは10万人規模の兵力をあらたにイラクに送ることに...どこまで殺戮に殺戮を重ねれば気が済むのでしょうか。

【アメリカの主張を聞くと恥ずかしくなります】

これまで、米政権がイラクに対して非難してきたことを、そのままアメリカに言い換えてみると、その理不尽さがよくわかります。むしろ、イラクには当てはまりませんが、イラクをアメリカと言いかえるとびったりであることに気づきます。天に唾するように、まさしくアメリカには、以下がよく当てはまるのです。

- ・大量破壊兵器を大量に保持していること(イラクでは探してもみつからない。)

- ・他国に対してこれを使用する可能性がある。(それどころか、常用している。原爆、劣化ウラン弾、デイジーカッター、クラスター爆弾、化学兵器等々)

- ・先制攻撃する意思があり、まさに行っている(抑止力であったはずの核も先制使用を宣言している。いわゆる開戦前から、ずっと攻撃し続けており査察のそばから連日のように爆撃を行い、多くの民間人も殺害してきている。)

- ・これまで数知れず国連決議を守ってきていないイスラエルに対しては最大限の支援をしている。

それだけでとどまらず、

- ・アメリカは国際司法裁判所でテロ国家として唯一断罪されているのにこれを無視している(ニカラ

グアに対する行為が国際法に反しているのです、これの停止と賠償命令)

・ 人権擁護や環境保護、人種差別への決議に自己利益中心的にひとり反対している
といったおつりまで来るのです。

ところがアメリカは、本当に恥ずかしいことに、他の国々を誹謗中傷する言葉としてこれらの言葉を使用し、自らは「正義、平和、自由、民主主義」を語り、偽善で恥の上塗りをしています。まったく、こんな論理がまかり通るならば、世界中のどの国でも、アメリカをいつ何時でも自由に攻撃して良いことになります。ブッシュ大統領に亡命を促し、政権を替えるよう要求する権利があります。いうことを聞かなければ、ワシントンやニューヨークにミサイルを3000発打ちこんで、広島原爆の効果を期待し、完膚なきまで叩き潰す権利があるということになります。これが道理ですか?... アメリカに言わせれば、世界が力を合わせてやらねばならないことになります。もちろん、どこの国々もそんなばかげた考えも、力も持っていないです。

2003. 03. 29 ヤスミン植月千春

(11) なぜ米英は、こうまでやみくもののか

友人に楽しくないことはやめようよ、と言われました。私のこの戦争への抗議活動のことを指していたのだと思います。
私だって楽しくないことはやりたくありません。
私は人と言い争うのが大嫌いです。

今までの人生もずっと音楽で周りの人と一緒に幸せな気持ちになることを目的に生きてきました。
この人はどんな曲が好きなのかな? この曲はきくとこの人にとって思いで深い曲だろうな、などと思いつつ、ピアノを弾き、聴いてくれる人たちが、幸せになってくれるのを、自分の幸せとして生きてきました。

今毎日私は極度の緊張感を持って家を出て、周りを歩くおしゃれした戦争などには無関心な人たちの渦を抜けて、アメリカ大使館に向かいます。
楽しいことはありません。
大使館前では、アメリカの行為を非難する言葉で、自分も傷つきます。
何故なら、日本も同罪なのだから。

私は政治に興味は無いのです。私はただイスラームでありたいだけなのです。
でも今回の侵略戦争は、私が一人のイスラームとして生きていくのに、政治と無関係で生きていくことはできないのだと痛感させるところまで私を追い詰めています。
楽しくないことをしなくて良い権利が、私にあると

はもう思えないのです。

さて、もう少し新聞などから得られる情報を整理してみたいと思います。

【なぜ米英が、湧きあがる世論の非難や反対を押し切ってまで、こんな破廉恥な行動にでたのか。】

これは、石油の利権や、軍需産業や戦後復興の利権を獲得することが目的であることはメジャーな新聞でさえ認めていることです。
破壊したあとの復旧工事の入札も約1000億円分が早々に行われ、油井の消化作業を落札したのは米国のハリバートン社です。これはチェイニーが副大統領就任直前まで最高経営責任者を勤めていた会社です。なんともあきれ果てた話ではありませんか。
ブッシュ大統領が先日議会に提出した約9兆円の追加補正予算の8割はロッキードを始めとする軍需産業やエネルギー関連産業に注ぎ込まれます。現米政権の中枢を担うひとびとの関連会社です。
そして、彼らに支払うのは米国民や支援国民です。積極的に手をあげている日本は膨大な額の支援金を税金で支払うことになるのです。人殺しと破壊の代金とインフラなどの復興のためにです。死んだ人は帰しません。

これだけ支離滅裂な論理で世論を蹴飛ばし、やみくもに「我慢できない。時間がない。Let's Go!」と攻撃に突入したのは、今回は特に周到に準備を進めてきた仕上げの行動として予定していたからに他ならないと考えます。
湾岸戦争、9.11の同時多発テロと呼ばれた米政府の関与を疑わざるを得ない不可解な事件からアフガニスタン、イラクへと連続する行動は、まさしくブッシュ大統領をとりまくタカ派の新保守主義者(ネオコン)が目指している新社会秩序、世界支配に向けて予定した「長い戦争」の重要なステップになっているからのように見うけられます。

2003. 03.30 ヤスミン植月千春

(12) 「関心がない」こと

イラクの民間人に犠牲が出ていることに、日本政府は「これは戦争ですから。」と言って、仕方がないという顔をしています。
サッダーム・フセインが悪いのだと決めつけて、連日イラクの無辜の人たちを虐殺していくことを、仕方がないという一言で自分を納得させることができる人たちが、イラクの人たちを自分たちと同じ人間だと思っているとは私にはどうしても思えません。
仮に、自分の家族の一人がイラクに滞在している場合は、答えが違うのではないのでしょうか。

「ミサイル 3000 発で一日にして原爆の効果が期待される。バグダードに安全な場所はどこにもない。」というようなニュースが平然と流されること自体、感性や理性が麻痺し、良心がなくなってきたのだということを私達は自覚しなければなりません。

昨日触れたように、こういった戦争で莫大な利益を得るのは、アメリカの政権を操る一握りの軍需産業や石油産業などの一部の資本家達だけです。また、一旦戦争が始まれば、建て前すらかなぐりすてて分け前にあずかろうとする国々もあります。

そして、他の人達はみんな将棋の駒として犠牲になります。

1991年湾岸戦争の後、何人の兵士と民間人の命が奪われたかを尋ねられたコリン・パウエル將軍は、「死亡者の数は我々の関心事ではない。」と言い放ちました。

アフガニスタンやイラクなどのそこに住む人々の命は邪魔なものであったり不必要なものであったり、どうでもいいものとして、スーパー兵器ショーの格好の標的として奪われていきます。劣化ウラン弾などで、国土も放射性物質で汚染されて、長い年月にわたって人々が苦しみ、死に、産まれくる乳幼児もガンで死に、人の住めない土地になることなどは、アメリカの興味のないことか、それ自体、もしかしたら折込済みの恐ろしい計画のひとつなのかもしれないとさえ思えます。

勝者にとって気になるのは自軍の損害ですが、ちなみに、湾岸戦争で戦闘で死んだ米兵は150人弱、1991年の秋にアメリカへ帰還したとき、米兵の死傷者合計は760名でした。死者294名、負傷と病気が400名あまりです。

ところが、戦後、22万1000人の将兵が障害補償を受けました(2002年9月の復員軍人援護局報告)。これらは湾岸戦争症候群といわれ、放射線障害や重金属による疾病で、劣化ウラン弾使用がその原因です。その中、約9000人がガンなどですでに死亡したことは3月27日付けの文章でも書きました。しかし、これら都合の悪いことは米務省の関心事ではないのです。

一方、正確な数字は出ようもないのですが、イラク側は、およそ20万人ほどのイラク兵士が退路を断たれてスーパー兵器で虐殺され、その後の劣化ウラン弾の影響や、経済制裁の影響でこれまでにおよそ150万人ほどの方が亡くなりました。このことなど、同罪である日本政府にも「関心がない」ことなのでしょう。

あまり離れていて実感がないかもしれませんが。20万人というのは、山手線の周りに並べて10周

ですよ。150万人というのは、東京ー大阪を2往復以上ですよ。これらの人々を事前に想定していたかどうかは知りませんが、アメリカ支援とか国際協調とかいう言葉で殺したのですよ。

そのいいかたは酷いという人がいるとすれば、日本政府が供出した約2兆円弱の応分に分けても東京ー大阪の片道分の責任があるのです。

本当は数字の問題ではありません。でも、あまりに理不尽ではないですか。

大量破壊兵器をもっているかもしれない、いや、持っているに違いない。

と言って... 今度は何人ころすのですか。何人まで殺してよいのですか。

それも関心事ではありませんか。

2003. 03.31 ヤスミン植月千春

(13) アメリカという「友人」

とうとう四月になってしまいました。

三月二十日にアメリカがイラクに先制攻撃を始めて十三日経ちました。

開戦の前は、何としても戦争にならないように...と、開戦後は、今日こそは戦争を止めたい...と、祈りながらの毎日です。

もう一度振り返ってみたいのですが、小泉首相が二十日の緊急記者会見で言ったことはこうです。

「イラクは国連決議を無視、軽視、愚弄し、十分誠意ある対応をしてこなかった。大量破壊兵器を危険な独裁者に渡すとどれほど大きな危険に直面するか、日本もひとつとではない。

米国は日本への攻撃を米国への攻撃と見なすと言っている唯一の国だ。これが大きな抑止力になっている。」

3日前の29日に書いたように、前半部分はイラクをアメリカに置き換えるほうがよほど適切だと思われまます。どれほど国連を軽視し、愚弄したのはどちらかかは、まともな判断力のあるひとであれば明白です。

今日は、後半部分に焦点をあてたいと思います。このような危険なアメリカの外交政策によって、どこの国も安泰ではいられなくなり、いつアメリカに先制攻撃され、迅速に徹底的に核使用も辞さず叩き潰されるかわからないという可能性があるわけです。攻撃の理由は、アメリカの意に添わず利権を譲らないことであつたり、あるいは、常に戦争状態を作って軍需産業を潤すために恒常的に対立図式を作るためだったりするわけです。

当然、悪の枢軸よばわりされている北朝鮮も戦々恐々としているわけで、防衛のための努力をするのは当然のなりゆきです。

日本は、何を考えているのか、このところ反朝感情をやたらに国民に掻き立て北朝鮮は危険だ危険だと言い出しています。そこにもってきて、アメリカが護ってくれるから、いや、護ってもらわねばならないからと、アメリカを信じきって一心同体になり率先してイラク攻撃を支持したわけです。これは極めて危険なことです。

冗談ではなく、アメリカは何をするかわからない。論理や主義主張があるのではなく、軍事帝国として何をするかわからないということが、今回の行動でひろく世界に広まったわけです。日本政府はそうは考えていないかもしれませんが、これは今回世界の常識となったわけです。百歩譲っても、間違いなく北朝鮮はそう考えています。

アメリカに護ってもらうどころか、アメリカは、いつ北朝鮮に攻撃をしかけるかわからない。少なくとも挑発したり、脅威を与えたりしているわけです。こんな状態では、北朝鮮としては米軍基地のある日本や韓国を直接攻撃することもやむない事態がでてくる恐れがあります。

日本の年度末の道路工事のように、あたかも公共事業のようにアメリカは毎年必ず世界のどこかで軍隊を動かし、どこかを攻撃しています。それもそのはずです。アメリカ国民の税金は、おどろくことに半分以上が軍事関係費に使われています。このため、教育や、福祉などは省みられてもいません。世界の軍事費総額に対してみれば、米国一国で実に 40%近くを占めています。アメリカはこの巨額の予算で軍需産業を支え、戦争をいわば公共事業のようなものとして行なわざるを得ない状況にいます。

日本はこんなアメリカの不沈空母であつたり基地であるのですから、使い捨ての友人であることは間違いのないところです。

本当にひとごとではなく、間違いなく私たちは戦争に巻きこまれます。友人ではなく敵を作ること狂奔しはじめた小泉首相は、大変な決断をしたのです。

日本政府は大きな間違いを起こしています。イラクにしても、北朝鮮にしても、何としても平和を目指すためにはお互いの理解と尊重が必要なものであって、解決の方法として武力に頼っては絶対にいけないのです。

2003. 04.01 ヤスミン植月千春

(14) 自爆攻撃が卑怯？

アメリカのイラク攻撃理由は、大量破壊兵器がテロリストの手に渡るのを防ぐというのですが、実際に行っていることは、平和に暮らしている人々を追いつめて「テロリスト」に変えてしまう行為です。

人間は偽善からではなく、心から出てくる優しさには、優しさで応える美德を持っていますが、自分が酷い状態に居るとき、もっと酷いことをされれば、そこには憎しみと疑いしか生まれません。

アメリカは自分たちを、解放軍としてイラクの人たちが迎え入れるだろうなどともないことを考えていたようですが、大間違いです。イスラームの人たちは、侵略者に対しては断固闘います。偽善者を迎え入れることなどできるはずがありません。

アジズ副大統領の「我々はイラクで生まれ イラクで死ぬ。」ということばどおり、兵隊であろうが、民兵であろうが、民衆であろうが、みんなが自分たちが生まれ育った土地を守るために命がけで侵略者と戦おうとしているのです。まわりのイスラームの国からも義勇兵が続々とイラク入りしていますが、当然のことと考えます。イスラームは一つの身体であり、身体の一部が損傷を受ければ全体が苦しむのですから。

アメリカは、圧倒的な優位を誇っているからこそ攻撃に踏み切った卑怯な国ですが、テレビの解説者たちは、自爆攻撃は卑怯だと言います。何と言うばかげたことでしょう。すべてを奪われたひとたちの最後の抵抗手段としてなにかがあるのでしょうか。

外側から、この戦争を宗教の問題と考えるのも、宗教の問題ではないと考えるのも自由ですが、自国の利益のために他国を蹂躪するというのは人間として最低の行為であることはあきらかですし、現実として大量のイスラームの人々が一方的に攻撃されているのです。

アメリカでも日本でも、テロの危険性をあおっていますが、本当は戦争を正当化するための宣伝にすぎず、本当に脅えている状態ではありません。街を歩く人々は爆弾がそばで本当に爆発するなどとは考えずに歩いています。しかし、こんなことを許していれば、早晩、本当に恐怖を味わうことになると思います。

やめるのは今です。今こそアメリカに「勇気ある撤退」を進言するよう日本政府に要求します。

2003. 04.02 ヤスミン植月千春

(15) アメリカ大使館前の人間模様

アメリカ大使館前に抗議に行くと、いろんな人に逢います。

開戦前から戦争をおこさせないために毎日抗議をしていたひとたちは、開戦となってしまった今、なんとかして戦争を止めようと以前にもまして声をあげています。

泊まりこみで抗議アピールをしている人たちもいます。

アメリカが開戦した最初の日曜日に抗議の替え歌を歌い、「楽しくやろうよ」と言った若者に私は「楽しくなんかやれない!」と言ったのですが、そのうち、彼らが泊まりこんでいることを知りました。彼らは雨の日もそこにいて、カップラーメンなどを食べて道で寝ていました。

私は彼らに対してとった攻撃的な態度を詫言しました。

彼らは空爆の下にこそいないけれどずっとアメリカ大使館前でたたかっているのです。

私は少なくともベッドで眠り、家の中で食事しているのです。

どちらが楽しい生活をしているかは明白でしたから。

ビキニ姿で抗議にきた女性たちもいます。

最初はピチピチと元気だった彼女たちも、日が経つにつれ、だんだん消耗してきているようにみえました。

それでも、もうすでにかすれてしまった声で、「戦争反対」の抗議の声を精一杯あげていました。

最初はビキニ姿に抵抗があった私も彼女たちが身を削ってアピールしていることが痛いほどわかってきました。

それぞれがそれぞれの方法で精一杯抗議の声をあげています。

抗議している私たちに「うるさい」とか「情けない」とすら言い捨てていく日本人もいます。

「我々には何の関係も無い」と言って、冷笑を浴びせていくアメリカ人もいます。

かと思えば、警備している警察の中にも、穏やかな目で私たちを見て、「気持ちはわかる」と言う人もいます。

殺戮が長期化する中で、いろいろな人間模様を見ながら、今戦争を止めるために何ができるんだろう、五年後、十年後じゃなくて、今!・・・と焦る気持ちと闘う毎日です。

こうしている間にも、毎日毎日人が殺されているのです。

攻撃される側にとっては、とんでもないことは言うまでもないことですが、一方、正義感に燃えて攻撃に加わって、命を落としていくのは誰でしょうか。政府のプロパガンダにのせられて、「正義の戦争」に志願する人も中にはいるでしょう。

でも結局、前線に送られるのは、資本家の息子たちではなく、お金のない人々であり、有色人種、ヒスパニックなどを主体とした、軍需産業にとっては「使い捨て」の人々です。

劣化ウラン弾の影響など知らされもしません。

グリーンカード（米国永住権）と引き換えに、前線に行っている人もいるという話も聞いています。

戦争反対の立場からアメリカも徴兵制を復活させるべきだと言う議員も出てきています。

日本も徴兵制が復活するとしたら、今のようにアメリカに完全服従するのでしょうか。

2003. 04.03 ヤスミン植月千春

(16) ことばの意味

ブッシュ大統領は「イラクが自由になるまでは（戦いを）やめない」と言っています。新聞には括弧がひとつ補記してありますが、もう一つ括弧が必要でしょう。

「イラクが（アメリカの）自由になるまでは・・・」と。

このひとに自由や正義を語ってほしくありません。あまりにも言葉の意味がなくなってしまう。アメリカ政府に平和や民主主義を語ってほしくありません。この100年の間に毎年、100回以上の他国への軍事介入を続けてきた国ですから。

「一般市民を犠牲にしているフセインを戦犯として裁く」とも言っていますが、イラクの一般市民を犠牲にしているのはアメリカ自身ではありませんか。

アルジャジーラの報道した、頭が半分吹き飛んだ子供の写真を見た人も多いでしょう。

爆撃で傷ついた子供が痛みに顔をゆがめながら母親に「泣かないで」といっていたということです。

こういう状況をつくったのはブッシュ大統領そのひとではありませんか。

あまりにも自分勝手に傲慢な言葉に頭が錯乱しそうになります。

これが人の心を持った人間の言うことか、やること

か、と言葉もありません。

小泉首相や川口外相は、本当に彼の言葉を理解できているのでしょうか？

できているのだとすれば彼らも悪魔です。できていないとすれば、あまりに軽薄で無責任です。

ここにきて人の心を持たない人間の集団が本当に存在するのだ、ということをぞっとするような思いで受け入れざるを得ない心境になってきています。彼らは良心というものを捨てたのだ、と。彼らにはあたたかい血の流れる人間としての言葉は届かないのだ、と。

今の私に出来ることは、抗議をし続けることと、祈ることしかありません。

私は神の存在を信じています。

今起こっていることは、神の意志だと受け入れてもいます。

でも、今起こっていることについての判断は私たちの責任においてなされなければならないと考えます。運命を受け入れるということは、何もしなくても良いということだとは思っていません。

2003. 04.04 ヤスミン植月千春

(17) 戦争にこじつける理由

このところニュースでは、爆撃で何人の人が犠牲になったかというような報道よりは、戦後の事に比重が移っているようです。

戦後復興では日本が世界に存在感を示すチャンスだ、と言っている大学教授がいました。

アメリカ国民の税金の半分以上を軍事関係に費やしているのに加え、わざわざ9兆円の補正予算まで組んで、めっちゃめっちゃにした国の復興をチャンスと言っているこの感覚に背筋がぞっとしたのです。

「イラクには石油も水もあるのです。これを利用しない手はありません。」と他国の財産をまるで自分のもののようなものの言い方をしています。米政権も、イラク戦後復興に関して、人道支援は国連にまかせて、軍事作戦に参加した米英が主導すると言っています。

この戦争をアメリカはどうやって始めたか覚えているのでしょうか。

「イラクは9.11のテロを支援していたのでフセイン政権を倒さねばならない。」

次に、テロとの関係づけの説明ができなくなってくると、

「イラクは核兵器を開発中で、化学兵器も持ってい

る。大量破壊兵器を隠し持っているフセインが悪い。フセインを倒す。」

と理由を変えました。

今はどうでしょう。

もう米英軍は、「間もなくイラク全土を完全に掌握する」ので「フセイン大統領の存在は関係がない。」というのです。

最初からイラクを経済制裁や毎年の空爆などで疲弊させておく政策だったようでしたが、ついに、占領すべきという意見が強くなり、9.11事件を期にその時期を今に決めたというのが真相でしょう。理由などどうでもよかったのです。

なぜならば、前にも触れましたが、イスラエルにはたくさんあっても、イラクに大量破壊兵器がないことくらいはアメリカが一番良く知っているからです。

1998年までの査察で殆ど破壊し廃棄されて、調べ尽くされていたのです。

1991年から98年まで7年間、イラクの査察現場でもっとも有能な米国人主任査察官として活躍したスコット・リッター氏は、「ブッシュ政権は大量破壊兵器の査察よりも、フセイン政権の転覆を目的としている」と述べ、イラク側とトラブルをわざと起こし、軍事介入の口実にするような指示を米政府から受けていたと明らかにしました。

リッター氏は、米国のあまりのやり方に抗議して査察官を辞任したわけですが、米英はというと、イラクが悪いとして98年に大規模バグダード爆撃を行っていますし、経済封鎖も空爆もずっと行い続けてきていたわけです。

イラクから亡命したフセイン大統領の義理の息子であるフセイン・カメル中將が、1995年にすでに大量破壊兵器が破棄されていた、と証言していることについて、アメリカ政府は自分の都合の良い証言だけ利用して、こういった部分を故意に無視したことを、あの体制よりのワシントン・ポストでさえも伝えています。

正義のための戦争なんてあるはずがないのです。力づくで自分のやりたい放題やろうとしている人たちがいるだけです。

正義といえる戦争があるとすれば、自衛する側にあります。

2003. 04.05 ヤスミン植月千春

(18) アフガニスタンのこと

昨日はイラクに戦争をしかけていった理由について

て書きました。
今日はアフガニスタンに侵略していったときのことを思い出してみませんか。

あの時も、証拠もないのに、ブッシュ大統領は、ターリバーン政権に、

「オサマ・ビン・ラディン氏を出せ。出さなければ攻撃する。」と無理な要求を突きつけ、そして西部劇を気取って

「Wanted ! Dead or Alive ! (お尋ね者、生死不問)」

として始めた攻撃でした。

それが、オサマ・ビン・ラディンの居所がわからなくなると、フランクス米中央軍司令官は、

「我々は、オサマ・ビン・ラディンがこの努力の目標だと言ったことはない。」

と変わり、報道関係者をびっくりさせました。もちろん、私もびっくりしました。

私は、とりわけ、ラムズフェルド国防長官が空軍兵士を「激励」して言った以下の言葉を許すことはできません。

「君たちは自由に狩猟をする権利を与えられている。」

アフガニスタンの人々を、全く人間扱いしていないのです。

パレスチナで虐殺や虐待の非難が高まり、世論を気にした軍がパレスチナ人をもう少し優しく扱うようにというコメントを出したときに、メディアにインタビューされたイスラエルの女性将校が、「パレスチナ人を人間として認めろっていうことね」といった言葉も思い出します。

「一般人民が死ぬのはターリバーンが悪いからだ」といういいかたも、今回フセインのせいと言っているのと同じです。

そして、アフガニスタンではいくつも村が殲滅され、バンカーバスターやデジカッターなどが使用されたのは皆さんもご存知のことですが、劣化ウラン弾が実に湾岸戦争の2倍以上(650トン)も使用されたという数字があります。

昨年9月の放射能や重金属汚染の調査では、最初に予測されたよりもずっと広い地域と多くの人口が汚染されている可能性が明らかになったそうです。聞き取り調査された家族の多く(30%)は湾岸戦争疾患に類似した症状を示し、乳幼児の25%以上が不可解な病気にかかっていると報告されています。

劣化ウランによる影響が今後この土地を半永久的に汚染しつづけ、人々を殺し、苦しめるのです。こ

の影響はイラクと同じようにどんどん大きくなります。

長い戦争に次ぐ戦争で、とにもかくにもターリバンによる安定が得られた矢先に、めちゃめちゃにされ、たアフガニスタンは、今はまた、治安も悪く、救援物資も届かなくなり、ひどい状況だと伝えられています。しかし、目的は果たされたので、もう忘れ去られかけているようです。

アメリカの民主主義は、どこまで、悲惨な状況の上塗りをしていくのでしょうか。

2003. 04.06 ヤスミン植月千春

(19) 計画的な戦争

昨日のアフガニスタンののはなしから続けたいと思います。

多くの資料が出ていながら、わたしが知ったのはそれほど前のことではないことのひとつですが、アフガニスタンへの攻撃は、前々から計画されていたという事実です。

アメリカは、中央アジアから北部アフガニスタン、そしてパキスタンを経由してアラビア海に搬出するパイプライン計画を進めていました。しかし、話し合いにおいてはターリバーンの協力を得られなかったために、アメリカは、ターリバーンを攻撃することを決めました。これは、あの不可解な 9.11 の「同時多発テロ」の1ヶ月前のことです。

なんとも都合よく、そこへ9.11のあの同時多発テロと呼ばれた事件が起こりました。この日は、戦闘機が緊急発進するのに30分もかかったり、直近の空港からではなく遠くの基地から発進したりして時間がかかるなど、なぜかこの日に限って防空体制が極端に弱体化したということです。国防総省には大きなボーイングが突っ込んだはずなのにその機体のかけらも示されず、大きな翼が当たったはずの柱も無傷で残っています。他にも不思議なことが盛りだくさんですが、政府はさっさとこの事件に関する調査を打ちきって、戦争に向かいました。

そして、1ヶ月も経たないうちに、準備万端ととのえて、オサマ・ビン・ラディンを賞金首とし、テロへの闘いを口実にした一方的なアフガニスタンへの攻撃を始めました。そして、ターリバーンを壊滅させたあとに、大統領に据えたのはカルザイ氏です。この人は、なんと、1995年からこのパイプライン計画を推進していたアメリカ石油メジャーのユノカル石油の最高顧問であった人です。まったく開いた口がふさがりません。

首尾良く、アメリカは、予定通りパイプラインの構想を動かし始め、莫大な利益を得ることになります。民衆などは何人死のうが、湾岸戦争と同じく、アメリカの関心事ではありません。人道支援は国連などに任せるとのことです。アメリカの行った人道支援は、戦争中に爆弾と同じように食料を人民の上に降らせたことでしたが、これで押しつぶされて死んだ人さえいると報道されていました。

今後アメリカは、アフガニスタンでも、傀儡政権が倒されないように、適度に爆撃や軍事支援を継続して行くでしょう。アメリカは世界30カ国に軍隊を置いています、同じようなことを行っています。

結局終わってみれば、アフガニスタンに、言うことを良く聞く政権にすぐ替えることがアメリカの目的だったことが良くわかります。

無理な言いがかりをつけ、「正義」を口にしながら、一方的に攻撃を開始する。普段は農民であるような兵隊を皆殺しにし、多数の市民を犠牲にする。放射性物質や重金属汚染で人や土地を破壊しようだいです。

戦後の人道支援は国連などに任せ、莫大な経費は米国民や支援国民に負わせます。

そして、これによってもうけているのは、ブッシュ政権を担ぎ上げているエネルギー産業や軍需産業です。

今アメリカがイラクで行っていることも、まさしく同じではないですか。何と理由付けようと、目的は最初から明らかです。

バグダードを包囲した今、ニュースでアメリカの政府高官たちは、攻撃に踏みきる最後の根拠であった大量破壊兵器が見つからないことや、フセイン大統領の生死などの、「大義」はあとまわしでよい、勝利すればどっちでも良いというような本音を「堂々と」述べています。

今は、戦後の分け前にあずかろうと攻撃支持にまわる国が出て来たり、分け方などでもめはじめています。醜いことです。もちろん、仲良くわければよいといっているわけではありません。

次はどこが攻撃の順番になっているのでしょうか。「長い戦争」のシナリオは、すでに決まっているのでしょうか。

こんな計画的な戦争をゆるせますか？

こんな非道な、人殺し、破壊をゆるせますか？

こんな戦争を見過ごすだけでなく支援するような日本政府に、日本人の一人として抗議せずにはいられません。

人間のひとりとして、アメリカ政府・イギリス政府に抗議せずにはいられません。

2003.04.07 ヤスミン植月千春

(20) 過去が嘘なら、未来だって嘘

土嚢を積んだ中に、そのあたりの市場からそのまま来たようなおじさんたちが機関銃をもって進軍に抵抗しようとしている映像をテレビで見るたびに、あらたな怒りが込み上げてきます。Tシャツを着て何の装備も無いイラク兵が、投降したと報道されるたびに怒りがこみあげてきます。彼らはイラクで生まれ、ずっとイラクで生活してきたのです。

フセイン政権がどうであれ、何とかそこで暮らし、日々の生活を営むしかなかった人たちです。自分の贅沢のために、他の国のものを略奪することなど夢にも考えつかないような人たちです。

そういう人たちが、連日、超軍事大国の最新鋭の兵器によって無慈悲に殺されているのです。査察によって兵器を破棄させられ、軍備で自国を守ることの出来なくなった人たちを、新兵器を自慢しながら、フセインが悪いというひとことで虐殺しているのです。

市街地が瓦礫の山になり、妻と娘を探しておろおろと泣いている男性の映像が流されていました。ひどい、かわいそうに、とは誰もが思うことでしょう。でもこれが、東京やニューヨークで起こったことだとしたら、ひどい、かわいそうで済むのでしょうか。あまりの不公平さに言葉ありません。イラクで大量破壊兵器が見つからなくても、もうこの国もアメリカを非難したりはしないのでしょうか。

こうなってしまったのだから仕方がない、と・・・。

アメリカ政府はイラクに戦争をしかける数箇月前から、戦後統治の人選などを決めていました。数箇月前といえば、イラクが戦争をさけようと、必死で査察を受け入れていたころです。アメリカにとって、イラクが査察を受け入れようが、受け入れまいが、そんなことはどうでもよく、彼らの描いた青写真がそのまま実行されるスケジュールをただただ実行したのです。

アメリカが暫定政府統治者に据えようとしているジェイ・ガーナー退役少将とは、親イスラエル色の強い人として有名で、アメリカの「国家安全保障問題ユダヤ研究所」と関連が深い人物だそうです。そんな人をイラクの人々がうけいれるとは思えません。アメリカはイラクをどのように利用しようとしているのでしょうか。

小泉首相は「はやく終わってほしいですね。」と、インタビューに答えていました。工事ではないのです。これは虐殺以外のなにものでもないのです。早く終わって欲しい・・・というのはどういう意味なのでしょう。

いやなことは早く終わってもらって、戦後に力を発揮しよう、ということなのでしょうが、なぜ今行われていることに、目をとじることができるのでしょうか？

南京大虐殺のように、すんでしまえばなかったことにして、未来をめざそうというのでしょうか？過去のつみかさねがなければ、未来なんてないのです。過去を嘘でぬりかためれば、未来だって嘘でつくりあげられていくのです。暫定政府をつくりあげてから、ゆっくり大量兵器を探す、と報道されていますが、そうなるとどういうでっちあげでも可能でしょう。

小泉首相は「大量破壊兵器はいずれみつかるでしょう」と言っていました。大量破壊兵器の存在の根拠を何ももたない首相が、なぜ、そんなことを無責任に言えるのでしょうか？全てを虚偽で塗り固め、世界を納得させることは可能なかもしれません。

でも私は信仰する者として、彼らは神の名を語って神を冒瀆した恐ろしい罪から決して逃れることはできないと信じています。世界にはまだ人間の心をちゃんと持っている人たちがたくさんいるのです。

2003.04.08 ヤスミン植月千春

(21) ことばの羅列

一日遅れになりますが、昨日の夜のニュースから。

アメリカは、1トン爆弾4個を、市街地の人口密集地帯に投下しました。

がれきの山と化した建物の下には何人の人々が埋まっているかわかりません。

会合が行われていたという情報があったということです。これがアメリカの正義です。

一転してブッシュ大統領とブレア首相の会談後の発表

「我々は素晴らしい成果をあげています。バスラの人々の喜びの表情を見ましたか？我々は大量破壊兵器を武装解除するという約束を成し遂げます。そして、イラクの人々をフセイン政権から解放します。我々はイラクの人々の命を助ける、という大業をやっているのです。」

これはブレア首相の演説です。このあと彼はブッシュ大統領と感極まったというように顔を見合わせ、我々はなんという良い人間なのだろう、という表情には幸せが満ち溢れているように見えました。

それを受けてのブッシュ大統領。

「ブレア首相は信念のひとです。これほどの協力者を私は他に考えることができません。我々は手を取り合って人権を推進し、人間の尊厳を世界中に示し、国際社会の要望を広めていきます。アフガニスタンでやったように、正義の政府を作り出すのです。大きな勇気と人間の力をもって戦います。そのために我々は犠牲も強いられました。命を落とした同胞のために、祈りを捧げます。イラクの残忍な性質があきらかになりました。イラクの罪のない人々を守り、今からイラクは自由になるのです。本当の自由とはなにかがバスラの解放によって、人々はわかり始めています。これからのイラクはイラクの人々がつくるのです。イラクにはそのような人材がたくさんいます。イラクはこれから民主主義にむかってあるきだすのです！」

言葉が意味を喪失し、コミュニケーション自体が成り立っていかなくなる。そういう時代に向かっているのでしょうか。とても自分の口から本当のことを言えない、でも現実これで良いと認めてしまっている確信犯ばかりなのでしょう。

民主主義や平和主義や良心というのは掲げるものであって、守るものではないのですか。

子供に説明することはもう不可能に思えます。

私自身も言葉を羅列するのがとても無意味に思えてきています。

2003. 04.09 ヤスミン植月千春

(22) バグダード陥落？

テレビのニュースで、フセイン大統領といわれる像がアメリカ兵とバグダット市民によって引き倒され、民衆が歓喜している映像が流されていました。それを見ながら私は涙がとまらず、心の中に虚無感がおしよせてくるのを感じていました。この戦争はなんだったのか・・・どうやって始まったのか・・・どれほどのイラクの人たちが犠牲になり、またこれから犠牲になり続けていくのか・・・そういった思いが一晩中悪夢のモザイクとなって、襲ってきました。

見せかけの一方的な映像を「バグダード陥落」の象徴とし、人々の目に歴史的な出来事としてやきつけることをひとつの区切りとして、スケジュールどおりの「戦後」を作っていく。まるでこれまでずっと続いてきたイラクの人々の「死」は、この映像の裏にぬりこめられていくようです。今までのことはなかったこととして、新しい未来にむかってすすもうではありませんか！・・・と。

劣化ウランによる放射能被害で苦しみつづけてきたひとたち、経済制裁による水や薬の不足ですでに未来をうばわれているひとたちがたくさんいます。一体だれのための未来なのでしょう。生き残った、これからアメリカのいう民主主義に従順に従えるひとたち・・・にたいしてでしょうか。私はアメリカの政策のなかに、イラクのひとたちの人権を守ることなど盛り込まれてはいない、と考えます。

ブッシュ大統領は先日の会見で、パレスチナ和平についてふれていました。今まで一度もパレスチナの側に立ってものを考えたことのない彼のいう「和平」は、イスラエルにのみ都合の良いものであることはまちがいないところです。

先日もしましたが、イスラエルのロビー団体と非常に深い関係にあるガーナーという人がイラク統治責任者に就任ということになれば、アメリカは本当にイラクを不安定な状態のままおいておき、中東をますます不穏な地域にさせ、あちこちにテロを広めていきたいのだとしか考えられません。

中東を力でおさえつけ、どんどんテロを助長させる政策をとることで、「テロ撲滅」という大義名分を

十二分に活用し、アメリカに批判的な国々をどんどん潰していく。アメリカの戦争対象リストは世界 22 カ国にもものぼっているといわれています。いままでもそうしてきたのですが、毎年毎年、でも、このイラク戦争を機にもっと堂々と、公共事業のように、今年はこの国、来年はあの国・・・というふうにアメリカにとって不都合な国をつぶしていくスケジュールなのでしょう。

それはいつまで続くのでしょうか。

私がこの世界での生を終えるまでずっと続くことを考えるとぞっとします。どうすればこのような横暴をとめることができるのでしょうか。今、わたしたちにできることはなんなのでしょう。今、今、今の積み重ねなのですから・・・。

またひとつ、あつてはならないことが起こってしまったのです。この戦争は終わった、と考える人もいるでしょうが、私にはこれから延々と続く、アメリカが必要としている対イスラームの戦争の始まりにすぎないとは思えません。

私は平穏に音楽をやっていたいのです。自分の感性を音で表現することで、自分も幸せで、まわりの人々にもすこしでも幸せな気分になってもらえれば、それがわたしにとって最高の日常であるのです。前にも書いたように、政治について考えたり、関わっていくことは私にとってはストレス以外のなにものでもありません。

でも私が政治と関わりのない世界をこの世界で見つけることが不可能な以上、関わっていくしかないのです。私は修道院で暮らしているわけではないし、イスラームはそのような生き方を否定しています。なにも考えないで、天職であると信じている音楽だけをやり、クルアーンを読み、お祈りする生活ができればどんなにいいでしょう。

こんなことは、爆撃のしたにいないから言えることなのだとわかっています。私はアメリカ型の民主主義のなかで、守られてものをいっているにすぎないこともわかっています。

それでも言いつづけるしかわたしには抵抗する手段がありません。

私は今までに、これほど自分自身の心と戦わなければならないと思ったことはありません。これから今までの秩序が崩壊していくなかで、しっ

かり今おこっている出来事から目をそらさない勇氣と、判断することを放棄しないでいられるだけの知識を神様が与えてくださいますように、と祈らずにはられません。

神を信じ、お祈りをし、クルアーンを読むすべてのイスラームのうえに平安がありますように。

2003. 04.10 ヤスミン植月千春

(23) 物言わぬことは「非暴力」？

連日「イラクの解放」について報道されていますが、現実にはアメリカはイラク北部で今まで以上に激しい爆撃を続けています。

あたりまえのことですが、イラクの人たちが心からアメリカによる力での解放を喜んでいるはずはありませんし、無政府状態の略奪が日常茶飯事になっている今、これからの不安は報道されているような歓喜の表情とは程遠いものでしょう。

アメリカが解放の象徴とした、フセイン大統領の像をひき倒している映像も、アメリカインディペンデンス紙によれば、周りを戦車でかこみ、戦車のそとで抗議している女性たちをアメリカ兵が追い払っている状況があるにもかかわらず、そのような場面は報道されていない、とのこと。

この戦争の大義名分を「テロリストの撲滅」から「大量破壊兵器の武装解除」・「圧政からのイラク民衆解放」とコロコロ変えてきているアメリカですが、だいたいアメリカに「圧政からの解放」を語る資格などあるとは思えません。

今まで、そして今でも、アジア・アフリカ・南米などでアメリカに都合の良い独裁政権とその圧政を支えてきているのは、アメリカそのものではありませんか。

我々はなんと良い人間なんだろう、と信じて疑わない顔のブッシュ大統領の顔を思い出す度、同じ？人間として顔をあげられないほどの恥ずかしさを感じるのは私だけではないと思います。

本当の被害がわかってくるのはこれからですし、被害はこれからも増加します。そうでなくても湾岸戦争からずっと続いている劣化ウランの放射能・経済封鎖による物資不足で苦しみつづけてきた人たちのうえに、さらにこの戦争によるたくさんの被害者がでるのです。

ティクリットでは今まで以上の爆撃や砲撃が予想されているといいます。湾岸戦争のときのように、退路をふさいで皆殺しにするつもりなのでしょう。

どのくらいの劣化ウラン弾を使うつもりでいるのでしょうか。

フセイン政権が機能しなくなった今、なぜこれ以上の犠牲をださなければならないのでしょうか。

敗戦が決定的となった日本に原爆を落としたように、イラクでもバンカーバスターやデイジーカッター、劣化ウラン弾などの大量破壊兵器を大量に投入するのでしょうか。

戦後の人道援助といいますが、取り返しのつかない所業を重ねて、いったい国連も日本政府もどのような援助ができるというのでしょうか。

一番の人道援助は、今すぐ戦争をやめさせることしかないことぐらい、わかりすぎるほどわかっているはずなのです。

すき放題に殺戮させておいて、思う存分悪魔の兵器を使わせておいて、その後で、なにが「人道援助」なのでしょう。

今回の戦争で劣化ウラン弾を使用したのか、という質問に対してブルックマン准将はこう答えています。

「使用はしたが、数々の実験により、安全だと確認して使っている。」

もとより「安全」な兵器など存在するわけがないのですが、5倍10倍と白血病等が多発しているイラクの子供たちの調査などには目をつぶっての発言でしょう。

小児病棟にはいつているこどもたちが、経済制裁による、物資や薬の不足で治療をうけることができず、ただ死ぬのを待っている状態であるということ、あれだけの情報量をもつアメリカが知らない、とでもいうのでしょうか。

「数々の実験」には日本も協力しています。

1995年から1996年にかけて、沖縄の鳥島で劣化ウラン弾を誤射した、というアメリカの事後報告にたいして、日本政府はきちんとした調査すらしていません。

日本は唯一の被爆国なのです。いいえ、もはや唯一ではなくなっています。

しかし、原爆を落とされた唯一の国として放射能被害の恐ろしさを世界に伝えることは、日本人だからこそのことではありませんか。

「力」に追随してなにも物言わぬことは「非暴力」ではありません。

「力」に追随し、迫害されている人たちを見てみぬふりをするのは、立派な「暴力」だと考えます。

2003. 04.11 ヤスミン植月千春

(24) 気が狂いそうになるほどの悲しみに

今のイラクの状況について、「戦争は確かに悲惨だと思うけど、イラクの人々がフセイン政権がたおれたことをあんなに喜んでるんだから、結局はよかったんじゃない？」・・・というひとがたくさんいるのに、おどろかされるとともに力が抜けていくような思いです。

国境なき医師団の報告によれば、今のイラクは「かつて見たことがないような惨状」だということです。今日現在の **Stop the War Coalition** HPの写真には、血だらけで、足がつぶれてとれてしまってぼろきれのようになった少女をトラックからおろしている市民の姿があります。

これがイラクに住んで、生きているひとが、いやおうなく見ている日常茶飯事です。アメリカが、そして日本が支持してやっていることです。

インディペンデンス紙にも、「手をのばして戦車を追いかけている黒い服をきた女性。7人の家族全員を殺されて。」

そばに立っていたというだけで殺された女性。「申し訳ない。ただあの女は邪魔だてしていたんだ。」とアメリカ兵は言う。

このような記事を見るたび、読むたびに、私は気が狂いそうになるほどの悲しみになんとか耐えようと、無意識にクルアーンを唱えています。

武器を持たないものに対する殺戮が日常になっているイラクを、メディアでしつこくながされる「解放されて喜ぶイラクにひとたち」の映像をみてホッとすることで、頭のすみにおいやってしまわないでください。

本当のイラクは今、阿鼻叫喚のなかにあるのだということを、私たちは戦争をとめられなかった責任とともに、逃げないで考えつづけなければなりません。

フセイン大統領たちの行方をさがすため、アメリカ軍がかれの顔写真をトランプにして兵士たちに配っていました。

この戦争はゲームなのですか？

最後通知をつきつけたときも、ブッシュ大統領は「ゲームは終わりだ。」と言っていました。

数々の大量破壊兵器をもち、一方的な殺戮が可能なアメリカにとっては、自分たちの政策を押し進めていくためのゲームにすぎないのかもしれませんが。アメリカは人の命でゲームをしているのです。

アメリカは今まで世界中で数々の戦争をおこしてきましたし、その姿勢は今もかわっていません。戦略を考える側にとって民衆のひとりひとは、あたたかい血がながれ、愛する家族がいる、じぶんたち

と同じ人間であるとは、思われていません。単に効果的かどうかの材料でしかありません。

いままでの数え切れないほどの戦争の歴史の積み重ねは、これからの抑止力になるためのものでなければならぬはずなのです。

でも、抑止力になりうるのは論理ではないことは、これまでの「言葉の羅列」が証明しています。自分を大切にし、隣人を思いやるころが大切なのだと考えます。

ヤー・スィーン章45節でクルアーンはいつています。

「あなたがたの前にあるもの、また後ろにあるものを畏れなさい」と。

過去と将来の間に浮かんでいる現在は一瞬一瞬過ぎ去っていきます。

人間には過去という、将来へのはっきりとした指針があり、きちんと過去の過ちを悔悟しさえすれば、進む方向を正すことができる、という神から与えられた恩恵についてもっと深く考えてみたいと思います。

2003. 4. 12 ヤスミン植月千春

(25) こどもの墓地

先日テレビで、湾岸戦争以降何度もイラクを訪れて、劣化ウランの放射能被害の実態を調べている、伊藤政子さんというかたが撮った写真を紹介していました。

昨日紹介したような惨たらしいものではなく、笑っている天使のようなこどもたちの写真です。

この子たちはみんな白血病に冒されています、と伊藤さんはおっしゃっていました。

とても病気とは思えないような、大きな輝く瞳をきらきらさせた、本当にかわいらしいこどもたちでした。

ある2歳の女の子の手の甲にちいさな傷があるのをみて、アナウンサーが「この傷はなんですか？」とたずねました。「点滴の跡です。この傷が化膿してこの子はこの写真を撮った2日後に亡くなりました。」と伊藤さんは答えたのです。

わたしは、一瞬呆然とし、心のなかで、「そんなこと！嘘でしょう？」と叫んでいました。

呆然としているあいだにも、伊藤さんは続けたのです。

「私はイラクで何百人というこどもたちに会いました。そのなかで今生きているのは3人です。」と。

「それでも、私が会ったのは、たった何百人かにすぎません。会っていないこどもたちも、毎日どんどん死んでいます。」

言葉をなくした私の脳裏にうかんできたのは、バグダードのもとにはこどもたちの遊び場であった空き地に作られた「子どもたち専用の墓地」の映像でした。

だいたい子ども用にたくさんのお墓が必要とされる、ということ自体が気狂いじみしています。

イラクでは、風邪をこじらせただけでも、経済制裁による医薬品などの不足から、治る病気も治すことができず、子供たちが毎日死んでいくのを医師たちはなすすべもなく見ているだけなのだ、とイラクから来た医師が言っていました。

これは、湾岸戦争が残したもので、今回の戦争が始まる前のことです。

今回の攻撃でも劣化ウランが大量に撃ちこまれられたはずです。

今、破壊されたイラクの町々には、医薬品も麻酔もない、と報道されています。

歯の治療にすら、麻酔がないと耐えられない私です。爆弾の破片で、傷だらけになったこどもたちが、痛みで泣き叫んでいるそばで、親はどうすることもできないのです。

頭に包帯を巻いた男の子に母親が、「私がかかわってあげたい」と泣いているのを、痛みで顔をゆがめながら、「ママ、泣かないで。」とその子が慰めているのをイラク・ピースチームのメンバーが目撃しています。

アメリカの政権を握っているひとたちにも、こどもはいるでしょう。

小泉首相や川口外相にもこどもがいるでしょう。

アメリカの兵士たちにも、こどもがいるでしょう。なぜ？ どうして、こんなに簡単なことがわからないのでしょうか？

戦争は、汚れない、無垢なこどもたちを、こんなにも無惨に殺すのです。

政治というものが、政を治めるものであるなら、真っ先に守られなければならないのは、こどもたちではありませんか。

伊藤さんの撮ったこどもたちは、神様のそばで楽しく笑っていることを私は信じています。

それでも、私は言わずにはいられません。

この世界で、もうこれ以上こどもたちを、醜い大人たちの欲望の犠牲にしないで！

こどもたちをこれ以上殺さないで！

2003. 04.13 ヤスミン植月千春

(26) 安心して眠れますか？

「イラクの現状を、イラクにいないあなたにわかるはずがないし、メディアが流している情報がアメリカに都合のよいものばかり、と現地にいないあなたがなぜ言えるのか。」という疑問をなげかけられました。

おっしゃるとおりです。その意味では、全世界の人間がイラクの戦火の下に行って確認する必要があります。イラクに行くことを断念していた私としては、今のところイラクの現状を知る術はメディアや個人的なつながりをとおしてかありませなし、アメリカの政策についても、私が信頼できると判断して得た知識のなかから推察するしかないわけです。間違っていることもあると思います。絶対正しいなどという考えは危険なことですし、間違いがあるかもしれないという危惧をもちながら考え行動することこそが大事だと私は考えています。

そもそも、私は政治について詳しく述べたいわけではありません。

イラクの現状についても、できることなら「解放されたイラク」の面だけ見て、少しでも安眠したいと思います。

それができないから、なぜ、こういったことが起きているのかを調べ、考え、訴えつづけているのです。それに、たとえ、すべての情報源を絶ったとしても、すでに今戦争がある、という事実を知っている限りこの心の激しい痛みからのがれることはできません。

私にとって、どちらが正しいか、など言ってみればどうでもいいことなのです。

絶対的な正義というものがありますか？

宗教的にはありますが、考え方や立場によって解釈も違えば、価値観も違うのです。アメリカ政府が特定の人々の利益のために何万人もの老若男女を殺すことが正義だと考えるか、この世の中で暮らしているひとびとの命がひとつひとつかけがえも無いものであるとするという立場をとるかは、考え方や良心のおきかたの違いです。

私たちが置かれた状況で、どのように考えるかが私たちの義務であり、どのように振舞うかが私たちの責任なのです。少なくともこの惨状は、私にとって、攻撃を支持した日本政府について、日本人のひとりとして、わからないし関係ありませんなどといって済まされる問題ではありません。

正しさとか正義という言葉は、すでに泥にまみれてしまいました。

アメリカが攻撃に踏み切った時、話し合いではなく武力を手段として自分の目的を達成することを意識的に選んだわけです。実際、数々の情報から、今アメリカがやっていることが、虐殺以外のなにものでもないことは、あきらかですし、今までのやりかたを見ても、心をもった人間のやれることとはとても思えない、というのが正直なところですよ。

わたしが大切にしたいのは、アメリカ人もイラク人も日本人もみんな人間だということなのです。このあたりまえのことが、あたりまえとして考えられていない、ということをもう一度心に刻んで欲しいのです。

戦争はひとを殺すだけでなく、神からあたえられた恩恵である大地をも破壊します。物体としての人間や大地だけでなく、ひととひとの精神的な繋がりをも破壊します。アメリカの戦争推進派のひとたちが、「我々が安心して眠れるのは、今イラクで戦っている兵士たちのおかげだ。」とっていました。彼らはなんとおびえているように見えたことでしょう。そのはずですよ。アメリカが今やっている殺戮のおかげで、これからどんどん追い詰められたひとたちが「テロリスト」になっていくかもしれない、という恐怖がいつも彼らを脅かしているだろうことは、容易に想像がつかますから。

彼らが安心して眠れるのは、自分たちがいじめぬいてきたひとたちが、同じ人間としての誇りと意思を放棄するか、さもなくば、そのひとたちを殲滅するときです。今のイラクになんとかその兆候を認めて、彼らは少しだけ安心していているのでしょうか。でもなんと大きな思い違いを彼らはしていることなのでしょう。

すべての人間が神によって創られたという点において、平等であると思います。人間が人間を力で思い通りにすることは、不可能なのだということを、彼らには知ってもらいたいと思います。これはわたしの強い願いです。

自分の都合の悪いことに目をつぶっていたら人間のこの世界での未来はないのだ、ということに気がつかなければ、彼らにとっては「安心して眠る」という人間としてあたりまえのことが、いつまでも願望に過ぎないものになるでしょう。

2003. 04.14 ヤスミン植月千春

(27) 選り好みなどしてられない

アメリカはフセイン政権の崩壊を宣言しました。

ということは、今イラクは政権をもつ国家として認められていない、ということです。今までは「戦争」でしたが、これからのイラクのひとたちのアメリカに対する抵抗は、「テロ」とみなされるわけです。

鎌倉の内田さんという方からメールで大変興味深い論文をいただきました。アメリカ軍は、フセイン大統領などの行方を追う、という名目で、執拗にイラクの人々の家々を乱暴に家宅搜索しているそうです。そうやって、イラクでふつうに暮らしていたひとたちをわざわざ挑発している、と書いていらっしやいます。この状況は私にイスラエルがパレスチナのひとたちにやっていることを思い出させます。いきなりやってきて理由もいわず家人をつれさり、拷問のすえに捨てる、ということが、日常茶飯事におこなわれているパレスチナ。

イラク戦争のかげにかくれて、おおきな報道もされませんでしたでしたが、ヒューマン・シールドとして、ブルドーザーで家を破壊しにきたイスラエル兵の前にたちはだかった、23歳のアメリカ人女性レイチェルさんは、ブルドーザーに故意に轢き殺されました。「現場には命を危険にさらす無責任なやり方で抗議していた一団がいた」とは、そのときのイスラエル軍の報道官の言葉です。国家を破壊し後ろ盾をなくした人民を抑圧して、テロリストにしたてあげ、ますます不安定な状態をつくりあげる・・そういう構想を中東全体に広げていくつもりなののでしょうか。

「あなたはミュージシャンなのだから、政治に関わるのはよしなさい。」との忠告をたくさんもらいます。

私のことを考えてくださっての発言だと思います。

でも私は音楽を奏でる者として、言いたいのです。音楽とは人間の喜びや悲しみや苦しみを表現する手段であるはずですよ。この世界で不当に虐げられているひとたちの苦しみや悲しみに心をむけないで、今自分が享受している安易な生活のことだけ考えて奏でる音が心のこもった音になるとは、私にはとても思えないのです。私は音楽を通じて、訴えたいのです。

今私が弾いているアラビアの琴、カーヌーンの音はアラビアの情景を運んでくれます。憂いをふくんだその旋律は、イスラームの偉大な過去を思い起こさせ、また今現在のアラブの人たちの苦しみを伝えているようです。ミュージシャンであるからこそ、今の苦しんでいるアラブを訴えていきたいのです。

もし世界の情勢に目を閉じたまま音を奏するのであれば、私には音楽をやっていく資格はない、と考えます。

「この戦争は政治であって宗教とはなんの関係もないんだから、関わるのはよしなさい。」との忠告ももらいます。これも、私のことを考えてくださっての発言だと思います。

でも私は、この戦争が宗教と関係ないとは思っていません。

人間ひとりひとは、神に創られ、平等です。それゆえ、この世界にある不平等は、大きな宗教的な課題であり、訴えつづけていかなければならないことでしょう。

わたしたち人間はこの世界で、神から一定の生を生きなさいという課題をあたえられています。私たちには、この世界の喜びを享受するとともに、まわりに起こる出来事を洞察し判断し対処していくことが求められていると思います。

祈っていれば良いのだという人もいます。しかし、来世をよりよいものにするためには、現世での行動の積み重ねがなによりも大切だと思います。祈りは勿論一番大切なものですが、それだけでは不十分だと思っています。自分に責任があることについては、「知らされる」のを待つのではなく、みずから「知る」ということが必要です。

宗教は生活そのものであり、政治や経済やあそびなどは生活の一部です。選り好みなどしてられないのです。私にとって、今自分が属している世界の政治を判断することも、いやだと言っていられないのです。

2003. 04.15 ヤスミン植月千春

(28) いいがかりの連続

時期をまてばイラクの状況もよくなるだろうから焦らないほうがいい、というひとがいます。この一瞬一瞬はすでに過去になっていて、その過去をとりもどすことは不可能だということを私たちは知っています。こうなる前にやっておけばよかったな、と思うときにはすでに遅いのです。このままじっと待っていてイラクの状況がよくなるだろう、と思えるほうが不思議です。イラクどころか周りの国の状況ももっと悪くなるのを待つ、というふうにしかわたしには思えません。

思い出してみてください。9. 11 事件をバネにし

て、「長い戦争になる」とブッシュ大統領が言ったことを。「オサマ・ビン・ラディンをだせ。ださなければ、攻撃する。」とアメリカが言った時、アメリカを信じている楽天的なひとたちは、「まさかアメリカがそんなにひどいことはしないだろう」とおもったことでしょう。実際攻撃が始まると、「ターリバーン政権が悪いのだから、まあ仕方がない。」と人殺しが悪いとわかっていながら無理やり自分を納得させたのではなかったですか？

今回のイラクにしても、イラクが査察を受け入れひたすら忍耐していたとき、世論の反対も多いし国連も認めないほどの悪いことをまさかアメリカはしないだろう。今度はアメリカは断念するだろう、と思ったひとは多かったのではないのでしょうか？でも、「大量破壊兵器を持っているから、攻撃するのだ。」と。結果は今わたしたちの目の前にある通りです。そして、始めてしまったのだからしかたがない... と。

「アフガニスタンのこどもたちを殺さないで！」とついこのあいだ叫んでいた私は、今は「イラクのこどもたちを殺さないで！」と叫んでいます。

大量破壊兵器が見つからないので、今度は、「シリアがイラク政府の要人をかくまっている。大量破壊兵器も運びこまれたのだ。生化学兵器も持っている。」と難癖をつけはじめています。

そして、その次は... 叫ぶ国名はどんどんかわっていきます。理由は滅茶苦茶です。

過去のアメリカの武力行使をすべてをあげていけば、それだけでも書くスペースはなくなります。

3月26日付けのメッセージで、私は「イラクのひとたちは、あなたがたのペット以下なのですか？」と書きました。確かにアメリカにとって、意思をもつ人間はペットより都合の悪い存在なのでしょう。日本のように資源など無い国は、おとなしく従順に言うことをきいていけば、つぶされはしないかもしれません。でも、わかりません。

大きく腕力のある乱暴な子が、腕力のない子にめっちゃめっちゃな暴力をふるっていたら、そばで「すごい、かっこいい」と言って強い子を褒め称えましょう、というような教育をわたしたちは子どもたちにしているのですね。「いじめをなくしましょう。ひとに親切にしましょう。」といいながら「これはたてまえというものです。もっとずるがしこくなりましょう」とこどもたちに大声で言っているようなものです。

いや、やりたい放題するためには、腕っぷしを強くすれば良いのだということをアメリカは示し、日本政府はそれを称えているのです。

政治のことは、私たちの生活のレベルでの話ではないから・・・なんて言われていますか？
私は母親として、自分の娘にそのような教育を絶対にしたくありません。

2003. 04.16 ヤスミン植月千春

(29) 略奪の真相は？

バグダードでの略奪にアメリカも手をやいている。略奪を米軍が阻止できなかった事実は重い。大方のメディアはこんな論調です。

びっくりするでしょうが、真相は以下に添付したグローバル・ピース・キャンペーンからの転送記事の中にあると思います。
少し長いですが、最後まで読んでください。

アメリカはなんでもやるだろうとは思っていましたが、これほどまでにイラクの人々の身も心もずたずたにしているのです。

そして日本ではメディアの報道を鵜呑みにしている人たちが、このごろ「イラクのニュースが少なくなったわね。だいたい落ちついてきたのかしら、良かったね。」などと言っているのを聞いて身体が震えてくるのを感じます。

ことばに尽くせないほどにひどい目に合わせた人たちを、さらに、メディアの嘘で何重にも辱める。それが、石油省の建物だけはがっちり守っている「民主主義国家アメリカ」のやりかたです。

「ブッシュ米大統領は16日、イラクに対して国連が科している経済制裁について、「イラクが解放された今、国連は経済制裁を解除すべきだ」と述べた。」ということです。
当然解除すべきですが、これまで12年間制裁で民衆をとことん痛めつけてきて、自分の統治下になったら歓迎してもらうために解除しろというのです。そもそも、アメリカが国連にさせた制裁です。さも自分のせいでないような言い方は、傲岸不遜としか言えません。

アメリカのことを楽天的に信じている人たち、目をさましてください！
本当のことを知らないでいるうちに、いつのまにか加害者にされてしまっているのですか？

2003. 04.17 ヤスミン植月千春

■バグダード略奪は米軍が引き起こした■
TUP速報から(※TUP＝平和のための緊急翻訳チーム Translators United for Peace)からの引用

オリー・ローゼンボーク
4月11日、ダゲン・ニエター紙(スウェーデン)

カリード・バヨミは、アメリカ軍指揮官が、「我々にはバグダードの略奪を阻止する手だてがなくて困っている」とテレビで不平をもらすのを見てびっくりした。

「私は、米軍部隊がイラク人たちに略奪に走るよう仕向けている現場に、たまたま居合わせたのです」

カリード・バヨミは「人間の盾」になるため、ヨーロッパからバグダードに向かい、現地に到着したその日に戦争が始まった。彼は戦争体験だけでも多くの証言ができるが、最も興味深いのは、略奪勃発現場での目撃体験についてだろう。

「私は、チグリス川西岸ハイファ大通りのちょっと向こうの貧民街近くにある友人に会いに行っていました。それは4月8日のことで、戦闘があまりにも激しくなり、川向こうに戻れなくなりました。

午後になると戦闘が止んでまったく静かになり、そこへ4台のアメリカ軍戦車が貧民街の境に移動しました。米兵はハイファ大通りの向こう側にある自治体行政府ビルの門前に立っていたスーダン人警備員二人を撃ち殺し、行政府ビルの扉を粉々に破壊しました。その後、戦車の中から貧民街に隠れている人々に向かって、アラビア語で、近くまで来るように熱心に誘う声が聞こえてきたのです。

午前中いっぱい、大通りを横切ろうとする者は誰でもみな撃ち殺されていたのに、米軍の通訳は、今度は近くに寄るように誘うのです。銃撃戦も終わりで、何とも言いようのない静けさがしばらく続きましたが、家々に隠れている人々はその誘いに、徐々に好奇心を持ち始めたのでしょう。

45分後には、最初のバグダード市民が思いきって家から出てきました。すると、戦車に乗っているアラビア語通訳は、近くに寄ってきた市民たちに、行政府ビルの中に入っていって、何でも好きな物を手当たり次第に持ち出してもいいぞと奨励したのです。

この指図はあっというまに広まり、ビルの中のすべての物が奪い去られました。警備員が米兵に撃ち殺されたとき、私はその300メートル側に立っていたので、状況をはっきりと目撃できました。その後、米戦車は近くにある法務省ビルの入口を破壊し、そ

こでもまた略奪が引き続きおこなわれたのです。

私は大勢の見物人たちの中に立ち、この略奪劇と一緒に見ました。見物していた群衆は、略奪には参加しなかったけれど、それを止めようとしませんでした。

多くの人々の目には、恥の涙があふれていました。

翌朝、略奪の波は、400メートル向こうにある現代美術館にまで広がっていきました。そこでもまた2種類の群衆がいました。略奪にせいをだす人々と、それをむかつきながら見物する人々です」

「バヨミさん、ではあなたは、アメリカ軍部隊が略奪の口火を切ったと言うのですね？」

「まったくそのとおりです。喜びにあふれたバグダード市民が路上でお祝いする場面が見つからないものだから、米軍にとっては別な形で、市民がサッダーを憎んでいたという証拠の映像を流す必要があったのです」

「でもバヨミさん、バグダード市民は、サッダーの大きな銅像を引き倒したじゃあないですか？」

「あれを、本当にバグダード市民が自発的にやったと思っているんですか？銅像を引き倒したのはアメリカ軍の戦車です。それも、報道陣が宿泊しているホテルのすぐ側です。

あの銅像引き倒しがあったのは、4月9日なのですが、それまで私は誰一人としてサッダーの肖像を壊しているのを見たことがありません。もし人々がサッダーの銅像を引き倒したいのなら、米軍戦車の助けなんか借りないで簡単に倒せる小さなやつから始めるわけじゃあないですか。

もしバグダード市民が政治的な暴動を起こしたかったのなら、まずは銅像を引き倒して、その後に略奪が始まったはずですよ」

「でもまあ、サッダーがいなくなって、よかったじゃあないですか？」

「サッダーは消えてはいませんよ。彼は自分の軍隊を、ごく小さな部隊に小分けしたのです。だから、大きな戦闘が起こらなかったわけです。公式発表では、サッダーは1992年にすでに大部隊を解散させています。彼はそれに並行して、イラクでは圧倒的な決定権を有する部族機構を再編しました。

アメリカがこの侵略戦争を始めたとき、サッダーは国家組織を完全に放棄しました。そして今は、部族機構に頼っているのです。だから、彼は戦わずして大都市を捨てたわけです。

イラクを統治する政治組織が壊滅した今となつては、アメリカはすべてを自分たちでやらざるをえなくなっています。国外から送られてきたイラク人の二人は、あつというまに殺されました。

(二人とは、デンマークから帰国したナザル・アル・カズラジ将軍と、シテ回教徒指導者のアブドル・マジド・アルコエイ師を意味する)

彼らはアメリカの傀儡として送り込まれたとみなされ、激怒したナジャフの群衆によりナイフと刀でずたずたに切り裂かれてしまいました。

オランダの新聞、BT紙によると、アル・カズラジ将軍はCIAによりデンマークからイラクに送られたそうです。

イラクでは今、いつまで居座るか分からない占領軍が駐留しています。米軍は民主選挙の期日も、市政統治計画もまだ発表してはいません。こんな状態では、想像できないくらいの混乱が起こる恐れがあるのです」

(翻訳・パンタ笛吹)

このインタビューは、ストックホルムに本拠を置くスウェーデン最大の新聞、ダゲン・ニエター紙4月11日版に掲載されたものである。この記事はオリ・ローゼンボグにより書かれ、ジョー・バラセックにより英訳された。

カリド・バヨミは、ランド大学で10年間、中近東問題について研究し教鞭をとった。彼はこのインタビューを広範に広めることを許可している。

<http://www.dn.se/>

*上記はダゲン・ニエターのURL (スウェーデン語)

■バグダードの目撃者■パレスチナ・フォーラムMLから

米国のCIAと海兵隊はバグダード中央刑務所を解放し、収容されている刑事犯や窃盗犯に略奪や暴動をそそのかす。

弾幕のごとくイラクから日々伝えられるニュースがパレスチナや他のアラブの国々で観察している人に伝えられるにつれて、イラクの国の象徴や大学さらに歴史というものが汚され略奪されているのを見ることに多くの人々は深い悲しみと苦痛を感じている。現在、アラブ世界ではアメリカ占領軍が意図的にイラクの多くの都市において、この無法状態、無秩序状態をそそのかしているというのは常識的になっている。

イラクで現在進行していることに関するアラブのメディアからのニュースを観察するとそれは他の

国際的な情報筋特にアメリカのメディアからのものと異なる。

略奪が行われているときに撮影されたアルジャジーラTVでは一人のバグダード住民がインタビューで、アメリカ海兵隊とCIAの諜報員がバグダード中央刑務所の扉を開け、全ての囚人、多くは刑事犯や窃盗犯の類が解放されたと証言した。その住民は「海兵隊が約300人の囚人を引き連れ、この政府の合同庁舎に放ち、中の全てを破壊させるのを私はこの目で見ました」とも述べた。

さらに彼は怒り、確固たる調子で次のように付け加えた。

「私たちはイラク人であることを誇りに思っています。私たちの価値観ではこのようなことは許せません。それはアメリカ兵が意図的にさせているものなのです。イラク人はこの様な悲惨な戦争を私たちにもたらしたことで、これらの兵士達を放逐し、殺すでしょう。」

英国王立国防学研究所の所員でイラク系英国人で、最近のイラク戦争に関するゲストとして、しばしば多くのアラブ系メディアに登場しているムスタファ・アルーアンニ博士は次のように述べている。

「私たちが今見ている略奪や強奪はアメリカによって計算された政策の一つである、それは国家としてイラクに何を残すかという破壊そのものであり、イラクの人民に絶望とあきらめをもたらそうとする意図的な行動である。」

その結果、イラクの人々はアメリカによって数週間後に強制される政治体制がどんな形態であろうと容易にそれを受け入れるであろう。

彼はさらに付け加えて言う。

「私は確信しています。CIAと海兵隊はこの混沌とした状態、無政府状態に積極的に関わっていることを。アメリカ人達はバグダード中央刑務所に押し入りあらゆる種類の犯罪者を解放したのです。」

アルーアンニ博士は話を続けた。

「アメリカ人は少なくともバグダードや他の諸都市を征服した後の数日は戒厳令を引くべきでした。なぜ彼らは警察力を導入しなかったのか？彼ら（アメリカ人）が一般の人々にある程度の治安を確保する妨害に対する戦いを計画することが出来るのであれば、占領軍として国際法の下で現在占領下にある人々に基本的に必要なものや安全をもたらすのは彼らの責任ではないだろうか。」

このゲストは略奪者たちが内務省に入った場面を見て次のようにもコメントした。

「ここはとても重要な省です。ここにある記録（＊が失われること）はイラクにとって大きな損失になることは確実です。今、例えばアメリカ人はどんな部外者でも連れてきて非合法的にその人をイラク市民とすることができるのです。ご覧ください。記録は破壊されつつあります。アメリカ兵は見ているだけです。また病院や大学も破壊されつつあります。それは将来アメリカの企業にその施設を好きなように再建築する契約が与えられるということなのです。それはイラクに対する広大な戦略なのです。」

2003年4月12日

B. サーメド

Reported by B. Samed
April, 12th., 2003

(30) イラクへ

香川県歴史博物館にて 週末、私は香川県の歴史博物館で催されている「大トルコ展」のオープニングでカーヌーン演奏をさせていただいてきました。

歴博の方々の温かい心に支えられて、本当に良い雰囲気なかで演奏することができました。

栗林公園の新緑 雨にぬれた栗林公園の新緑の木々や瀬戸内海からの風、それになにより演奏をサポートしてくださった方々、私の演奏を聴いてくださった方々の「とてもやすらぎました」という言葉、慌ただしいなかでわざわざ交流の機会をもうけてくださったムスリムの方々とすごしたひととき、など本当に私に力を与えてくださることばかりでした。明日イラクにむかう私に神様はなんとという素晴らしいプレゼントをくださったのかと、感謝の気持ちでいっぱいです。

常に神さまの方をむいて生活する中に偶然というものは存在しない、と私は信じて生きてきました。世の中がこのように、世界規模での戦争の方向になだれをうちはじめる直前に、私はイスラームを知り、入信しました。

それまでの人生で私が考えてきたことの当然の帰着点でした。この世の中にある不平等に接するたびに、堪らなく悲しい思いをしてきたわたしにとって、はじめてそこに平安を見いだすことができたのです。

それからクルアーンの勉強をはじめ、いままで読み漁ってきたどんな哲学書よりも説得力のあること

を実感しました。
そのはずです。クルアーンは人間の言葉ではなく、
預言者ムハンマド（彼に平安あれ）をとおして語ら
れた神の言葉であるからです。
それまで、どんなに尊敬する哲学者の著作や宗教書
を読んでもどうしても納得できなかったこの世界
での疑問が納得できたのです。

それは疑問がなくなった、ということではありません
し、世の中にある矛盾にたいする答えがわかった、
というようなものではないのですが、このことにつ
いては、私の宗教観に関することですのでここでは
書きません。
ただ人間の目でみることができるこの世界の事象
だけで物事を判断することはできない、ということ
は明確に感じています。

とにかく、クルアーンの勉強を始めたことも、アラ
ビアの琴であるカーヌーンを弾くようになったこ
とも、実際にイスラームの生活をしている人たちの
国に行き、イスラームのひとりとして彼らの中で話
をしたことも、イスラームを身体で感じるのに大き
な影響を与えました。

それまで、私が、私が、とひとりで頑張ることば
かり考えていたのですが、無理しないでできること
をしていれば道は開けるし、兄弟姉妹たちも支えて
くれる・・・に変わっていききました。
人間がいかに弱いものであるか、でも弱い故に神
さまの愛にすがることができる、という恩恵を与
えられているのだと知ることができました。

ブッシュ大統領のように自分を強いと信じている
ひとたちの信仰は、神さまの愛にすがるとい
うものではなく、自分が神に選ばれているのだ、
というような奢ったもののようには思います。
それは絶対者である神にたいしての冒涇であり、
信仰ではないと思うのです。

優しく聡明な友人たちが、イスラームに対する戦
争のことになると、自分の内なる良心よりも西洋
的な論理を必要とし始めることに驚きと失望を
禁じ得ません。

すべて自分の良心と対話しようとする人は、イス
ラームに最も近いところにいるのですが、そこに
自然な優しさのかわりに西洋的解析論をもつてく
ることによって、すぐ近くにあるはずのイスラ
ームが遠ざかってしまうのではないで
しょうか。
理解できる範囲の知識で自分自身をなんとか説
得できればいい、というものではないと思うの
です。

そういう私は、もうイラクの人たちの気持ちと
離れたところでこんなことを書いている苦しさ
の限界を感じています。書くことが何か力になっ
ているの

だろうかというむなしさにもとらわれています。
今、イラクでは、医薬品、麻酔が極端に不足して
いる状態だということです。しかも、治安が悪く
届けることが非常に難しい状態にあるそうです。

いつもいつも私を支えつづけてくれる私の家
族と私が家族だと思っている人たちを心配させる
のは本当に心苦しいのですが、明日私はイラクに
むかいます。イラクの人々に会いにいきたいの
です。イスラームであることで私でも何か役に
立てることがあるかもしれないからです。そし
て、今の本当のイラクの人々の状況を自分自身
で確かめたいのです。信仰を通じて親交を深
くさせていただいてきたジャミーラ高橋さん
と中東行きをご一緒できることになりました。

アメリカがこの滅茶苦茶なイラク攻撃をはじ
めてからずっと私のメッセージを読んでもら
うことで、わたしを支えてきてくださったみな
さんに、帰ってから、私の目で見えたイラク
をお伝えできることを願っています。
帰国日程は今のところわかりません。衛星電
話を手にいれることができなかったのですが、
もしなにか手段があれば中東からもメッセ
ージを送りたいと思います。

2003. 04.20 ヤスミン植月千春

【占領下のイラクに行く！】

イラクの現状

帰国当日（2003年5月17日）の報告会で今のイラクの現状をすこしお話をさせていただきました。すくなくとも私の見たイラクは、ブッシュ大統領が誇らかに「イラクの人々は一步一步解放に近づいている」と語った言葉とは程遠いところにいます。今彼らが食べている食料は戦前にサッダー・フセインが配給した6ヶ月分の小麦粉・砂糖・粉ミルクなどです。

電気はアメリカ軍にコントロールされていて、地区によってはましですが、ある地区では一日に一時間しか供給されていません。

そのため、野菜・肉類の保管は、暑い国でもあり、とても難しい状態にあります。

サッダーが配給した食糧も他の生活必需品を買うために売られたり、略奪されたり、というケースも多く、いつまでもつかわかりません。

今あるストックがなくなったら、ほとんどの人たちが失業状態のイラクに於いて一体どういうことになるのでしょうか。

考えただけでも体の力が抜けるような気持ちになります。

水はもともときちんとした浄化システムがないところに、供給量もコントロールされ、チョロチョロとしかでないところ、川の水を汲み、それを使っているところ、湧き水を使っているところなどさまざまですが、重金属で放射性物質である劣化ウランの汚染された水であることは、いずれの地区でも同様だと思われます。

無政府状態で行政が機能していないため、ゴミは町中にそのまま放置されています。

すでに蚊・蝇などは増えていますし、赤痢・コレラなどの伝染病がはやっています。

ゴミの量はどんどん増えていくわけですし、これからはもっと暑くなるイラクでの非衛生化は必至です。

産油国であるイラクの人々は今、自分の車のガソリンを買うために、炎天下で2日も3日もすでにガソリンのなくなった車を押しながら、辛抱強くガソリンスタンドでの25リットルと制限されたガソリンを買う順番を待つのです。

そばでアメリカ軍の戦車が彼らを見張っています。

憤りと無力感とでいっぱいになりながら、いくつガソリンスタンドを情けない思いで通りすぎたことでしょう。

タクシーの運転手に法外な運賃を請求されても文句が言えないような思いでした。

この混乱のなかで、要領の良いひとたちだけが、町で略奪などの手段で得た品物を泥棒市で売り、儲けています。

略奪を取り締まるべき警察はいないからです。

そして泥棒市はなんと米英軍によって守られているのです。

今イラクの人たちは、略奪したり、不当にひとを殺したりする自由を米英軍の手助けによって得たわけです。

そして米英軍は子供たちにボルノ雑誌をばらまき、性の解放という自由を教えようとしています。

これがアメリカのいう民主主義であり、自由を満喫する、ということのようです。

イラクの状況をもっと詳しく書きたいと思うのですが、これから、すこしずつメモを見ながら、日付順に思い出してみようと思います。

2003. 05. 18 ヤスミン植月千春

ロシアからドバイへ

4月21日(月)

朝アエロフロートで成田を発つ。もしかしたらもう帰ってこられないかもしれない・・・という思いが頭をよぎる。家族の顔が浮かんできてやるせない。もう引き返したいような気持ちの自分を感じながら、ひたすらクルアーンを唱える。私はあれほど心配している家族やイスラームの兄弟・姉妹たちを説得して、なかば振りきったようなかたちでこのイラク行きを決めたのだ。もう引き返すことはできない。

モスクワではトランジットのため1泊しなければならない。18時にモスクワにつき、トランジットオフィスでホテルをとりたいたいと言うと、手続きは21時から、という。仕方なく時間をつぶして21時にもう一度オフィスに行くと「トランジットホテルはすでにいっぱいホテルの予約はできない」と信じられない返事。これからハードな旅になるのに、始めから空港で夜を明かすのはどうしても嫌だった。

「なんとかしてください。他にホテルはないのですか」とすがるようにきく私と傍で疲れた顔で頬杖えをついているママジャミーラ（旅行中私はジャミーラさんをそう呼んでいた）に、対応した若い女性は「搭乗便は明日なのだからそれまでここで待てばいいでしょ。なぜ私があなたたちのためになんとかしなくてはならないの？」と石のように冷たい表情で言う。この人と話していてもどうにもならない、とあきらめて空港事務所までいって交渉する。結局これしかないといわれた一泊130ドルのホテルに泊まることになった。

ホテルがあるのならどうして最初からそう教えてくれないのか、と不親切さに腹がたつ。
でも、とにかく空港で夜を明かさなくてすんでよかった、よかった・・・というところ。

4月22日(火)

ドバイに着き、空港の免税店に **Thuraya** の衛星携帯電話を見に行く。扱い方を質問したが、売ってる側も使い方をよく知らないらしく、ここでは設定ができないので、他の国に行ってから設定することになる・・・と訳のわからないことを言う。

Thuraya 携帯電話のドバイ免税店での値段は本体が820ドル。本体しか扱っていないくて、付属品やプリペイドカードは町の **Thuraya** を扱っているお店を探して買わなければならない。
本体の値段も他のところで買うよりお買い得・・・らしいがやっぱり高いものは高い。
通話料金も1分間390Yen と高いのだが、イラクに入ったらこれしか日本への通信手段はないので選択の余地はない。
万一の場合も考え、結局ふたりとも **Thuraya** を買う。
使い方はまあ説明書を読めばわかるだろう・・・と思っていたのだけれど、機械に弱い私たちにはこれがなかなかむずかしい。
結局アンマンの **Thuraya** のスタッフに説明してもらうまで宝のもちぐされ・・・。

4月23日(水)

クウェートからイラク入りしたい、というママジャミーラの思いもあり、ヴィザをとりドバイのクウェート大使館へ行く。が、ドバイでの保証人とクウェートでの受け入れ人の両方がいなければヴィザはだせない、と門前払いされてしまい、クウェートからのイラク入り・・・という私たちの夢はあっけなく崩れてしまった。

ママジャミーラが、以前ドバイに来たときたしかドバイからイラクのウム・カスルまでの船便があった、と言うのでポート・アル・ラシッドに行く。たしかに船便はあるという。ウム・カスルまで2日間の船旅だ。

ところが、戦争の前までは誰でも乗れたけれど今はイラク人しか乗れない、という。
それにあそこには戦争があるのにどうしてイラクなんかに行きたいのか?・・・とさく。イラクの状況を知りたいから、と答えると、こわくないのか、と。そりゃこわいけどね・・・でも行きたいから・・・という私たちに、イラクのヴィザをもっていれば大丈夫かもしれない。イラク大使館へ行って、とにかくヴィザをとってから様子をみれば、そのうちイラク人以外ものれるようになるかもしれないよ・・・など

と気の長いことを言う。

今日は水曜日なのだけれど、ドバイでは官公庁は木曜日・金曜日がお休みだという。2日待って土曜日に大使館に行くとしてもヴィザがその日にでるとは限らない。

そのうえヴィザがとれて、運良く船にのれて2日かけてウム・カスルまで行けたとしても、アメリカの上陸許可が下りなければ、またドバイまで2日かけて戻ってこなくてはならない。

なにしろ今イラクはアメリカの占領下にあるのだ。時期的にも気分的にもあまり楽しいペルシャ湾クルーズとはいえない。

いろいろ考えた末、イラクへの船旅はやはりあきらめることにする。

ドバイからアンマンへ

4月24日(木)

もしかしたら開いているかもしれない・・・とイラク大使館にいつてみるが、やはりお休み。

仕方がないので、ドバイ博物館へ行く。

ここには年代順にドバイの歴史を展示しているコーナーがあって、わかりやすい。

波止場での貿易の様子などが詳しく説明されていた。

屋内にいとひんやりして気持ちいいのだけれど、外にでると目をあけていられないくらい紫外線が強い。

そのあとゴールド・スークで目の保養。

紫外線と同じ位(?) こちらもまぶしい。

以前大塚モスクにいらした **Omar** さんがアラブ料理をごちそうくださった。

最初に、食べきれないほどの野菜がとても美しく飾られてでてきたのには驚いた。

キュウリもトマトもピーマンもレモンもそのまままるごと飾られているのだ。

Omar さんが頼んでくださったドライバーが夕方6時までは時間がある、というので、ドバイの郊外ベッドタウンである **Sharjah** という町につれていってもらおう。

緑のおおい美しい町で、ドバイよりずっと安全でもある、という。

噴水がある入り江の近くの公園で、芝生に寝転がってアイスクリームを食べる。

これからイラクへ入る道をさぐる私たちにとって、嵐の前の静けさ・・・といったかんじの平和な時間。インターネットカフェをみつけたので、日本にメールすることができた。

4月25日（金）

昨日 Omar さんが近くの電話を扱っているお店で Thuraya のセッティングをしてくれる、という情報をくださったので行ってみたが、あいにく金曜日でどこもお休み。

結局ドバイで Thuraya を使うことはできなかった。14時のエミレイツ航空でアンマンへ。

アンマンは7つの丘の町とよばれている。坂道と丘でできた町だ。

ここの住民の60パーセントがパレスチナ人だという。

空港からバスで40分くらいで、アブダリ・セルビス&バスターミナルに着く。

そこからタクシーに乗り換えてアンマンパレスというホテルにおちつく。

アンマンからベイルートへ

4月26日（土）

アンマンは寒いくらいで、暑いドバイでひいた風邪が悪化しているみたい。なんだかゾクゾクする。

ドバイでは官公庁は木曜日・金曜日がお休みだったので、開いてるかな、と思いイラク大使館に行くが、ここアンマンでは金曜日・土曜日がお休みなのだそうです。仕方がないので、またまた博物館へ。

ここには、丘の上にアンマン城と考古学博物館があり、青銅器時代のエリコで発掘された頭骸骨や副葬品などが数多く展示されている。丘の上の強い風にいっせいになびいている野草がとてもきれいで、しばらくうっとりともとれてしまった。

美しい紫色の野あざみや黄色の菜の花たちに埋もれるようにしてママジミーラに写真をとってもらった。

野の花たちは私たちが優しく包んでエネルギーをくれた。

何軒も電話やさんを訪ねてやっと Thuraya 衛星電話の扱い方をきちんと説明してくれる人に出会えた。

これで日本に電話できる！・・・ドキドキしながら電話をかけた。しばらくジーッという音がした後、呼び出し音が鳴る。つながった！！なつかしい家族の声。（まだ5日しかたっていないのに）電話は使えないかなー、なんて思っていただけに、嬉しさはひとしお。ひいてた風邪がどこかへいったような気がする。

4月27日（日）

アンマンの日本大使館へ行く。

戦争が終わり、人間の盾でイラク入りした日本人から被害者がでなかった、ということにひたすらほっとしている様子。

アル・ラシッド・ホテルの一角を借りて活動しているORHAの日本人職員はアメリカの装甲車に守ってもらって外出している、という。バグダードの街中は一日中銃声がしているので、こわくてでられる状態ではないということだそう。

食料品も不足しているし、ミネラルウォーターは6本20ドルになっている、という情報だった。

それに、バグダードにはいる道には盗賊がでるそう、先日もイギリス人2人がタクシーでイラク入りする道中で、身ぐるみ剥がれた、という。防弾チョッキまでとられたそうですよ・・・と大使館の方はおっしゃっていたけれど、私は心の中で、へえ～、防弾チョッキまで着ていくのか・・・となんだかそちらの方にあきれていた。

ともあれ、今のイラクがあまり安全なところでないことは確かなようだ。

4月28日（月）

今日こそは・・・とイラク大使館へ行く。

イラクに入ろうとする何人かの日本人の方たちと会う。

ヴィザをだしてもらおう為には、何の目的でイラクへ行くのか、

という理由と、所属団体の証明書がいるのだという。彼らはちゃんとお手製の証明書を用意していた。

（所属団体の印をよく見ると、十円玉の裏で押してあったのには笑ってしまった。みんな知恵をしぼってるんだなあ、とつくづく感心する）

親切に私たちの分の偽造証明書もくださったのだけれど、パスポートナンバーがプリントされていない、とはねられてしまった。

どうも私たちは、イラクのヴィザに縁がないらしい。まあいいか、今日ベイルートに向かうのだから、ベイルートでヴィザとりましょう、ということで、結局アンマンでヴィザをとるのは時間切れ、とあきらめる。

以前日本にいらした Darras さんというご夫妻のお宅におじゃまし、おいしいモロヘイヤスープをごちそうになる。

モロヘイヤは今では日本でも人気のあるエジプト原産の野菜で、その昔クレオパトラも美と健康を保つため好んで食した、とか。

かるーいアラビア米の上にトロツとした山芋のようなスープをかけていただいたのだけれど、とてもおいしくて元気がでる。

ちょうど赤ちゃんが産まれて間もないところで、特別なお祝い事があるときだけ食べるお米のプディングのお菓子もつくってくださった。

おなかいっぱいになって、夜21時15分発のロイヤルヨルダン航空でベイルートにむかう。

夜中にもかかわらず、今回イラクに医薬品を運ぶという話をしてきたグループの Nahhas さんご夫妻が空港までむかえにきてくださっていた。

奥さまの **Diana** は性格も体格もダイナミックな方で、真っ黒なアバーヤに身を包んでいても存在感がある。引越したばかりのアパルトマンをステキにコーディネートしていた。
このひとたちが医薬品をイラクに運ぶプランをもっているのかしら？と胸がときめく。

ベイルート 4月29日（火）

「中東の真珠」と呼ばれるだけあって、ベイルートはとても美しい町だ。
登りきった坂道から見下ろす見渡す限り真っ青な地中海はリゾート地の名に恥じない。
町並みはどこかパリに似ている。
フランスの植民地だったせいなのかもしれない。
1975 年からの内戦状態の爪あとがまだ町のここに残っていて、むきだしのコンクリートのまま放置されている建物も数多くある。
今でもキリスト教徒とイスラム教徒は別々の街に住んでいて、あまり友好的な関係を結んでいるとはいえない。
ここでも列強の統治のツケを払わされているのを感じる。

レバノンのムスリムグループがイラクへ医薬品を運ぶ、というプランがある、ときいていたのだけれど、それはどうやら戦争が始まる前のことだったらしく、戦争が終わったばかりの混乱したイラクに医薬品を運び込むのは危険過ぎる、という話になっていた。
私たちがイラクのヴィザをレバノンでとるつもりだ、というのに答えて今レバノンでイラクのヴィザをとれる状態にはない、という。
うーん、やっぱりアンマンでとっておくべきだったのか・・・。
それどころか、今のイラクはジャハンナム（地獄）だから、行くのは見合わせた方がいい、と言う。
彼らは医薬品など救済物資を運ぶのは 6 ヶ月位様子を見てから・・・ということにしたのだそうだ。
なんだか急に力が抜ける・・・せっかくここまできたのに・・・。

医薬品を運ぶといっても、戦前はイラク側の受け入れ先があったのだけれど、政府がなくなった今となっては、どこから手をつければよいのか・・・という状態であるらしい。
私たちががっかりしているのも、**Diana** はイラクに入ろうとしている他のグループがあるらしいから、そちらを紹介しましょう、とさっそく連絡をとってくれた。
そのひとたちと話をしたのだけれど、どうもはっきりしないし、信用していいものかどうか分からない。

シリアとイラクとの間の国境はまだ開いていない、ということだし、どうもイラクに入るとすれば、アンマンから私たち 2 人で行くしかなさそうだ。

ベイルートで活動しているムスリマの団体、**Social Redemption Society** の **Rana** という女性が彼女の車で市内を案内してくれた。
マクドナルドは武装警官にまもられていた。
マクドナルドを狙った爆破事件が続いているのだという。
ハンバーガー食べるのにも厳重なチェックをうけなければならないような時代をつくりだしているのは、ほかならぬアメリカではないか。テロを煽って世界中を危険地帯に陥れる覇権主義に改めて怒りを覚える。

Rana が彼女のグループの事務所につれていってくれた。
建物の中に女性と子ども専用の広いフロアがある。
子どもたちは別室で遊んでいて、女性たちがゆっくり話ができるようになっている。
グループのメンバーとかわるがわる話をし、彼らの発行している月刊誌のインタビューをうける。
パソコンがあったので、メールも出させてもらった。

彼女たちが近くのレバノンレストランでお昼をごちそうしてくれた。
帰り道は車で送ってくれたのだけれど、おもわぬハプニングがあった。
走っている車がいきなり激しくガタガタと揺れはじめ、びっくりした **Rana** は道の端に停車した。
外にでてみると、右前のタイヤがパンクして、はずれかけている。
あまりに見事なパンクなので、みんな一瞬呆然とし吹き出してしまった。
ママジャミーラがひとこと、「私が食べ過ぎたからかしら？」

警官や通りがかりの男性の協力で、電話で呼んだ修理工の出る幕はなかった。
換えたタイヤで無事 **Diana** の家へ帰ってくつろぐ。
私は運転するけれど、いまだタイヤがパンクした経験がない。
ベイルートでは生まれてはじめてタイヤ交換の様子をみることができた。

レバノンからシリアをぬけてふたたびアンマンへ

4月30日（水）

レバノンのグループがうごかない、となればレバノ

ンにいる理由はない。

私たちは朝はやく、乗合いタクシーでシリアのダマスカスにむかった。

ダマスカスでまたタクシーを乗り換えて、ヨルダンのイルビットという町へ。

今日はイルビットに泊まるか・・・なんて話していたのだけれど、イルビット郊外で安い乗合いマイクロバスの便があったので、それに乗ってアンマンへ・・・というややこしい経路をたどる。

それというの、ダマスカスで2台タクシーが止まっていて、1台はアンマン行き、もう1台はイルビット行きだったのだけれど、アンマン行きは30ドル、イルビット行きは20ドルだったので、アンマン行きも20ドルにして・・・と交渉したのだけれど、ダメだという。じゃあいいよ、安いほうで・・・ということで、イルビット行きにのったのだった。

イルビットからアンマンまでの乗合いマイクロバスは1JD（ヨルダンディナール＝150Yen 位）だったので、やっぱりお得・・・だった、とはいえる。

ともあれまたアンマンに帰ってきた私たちは、今回は少しいいホテルに泊まって休息してからイラクに入ろうね、ということで、Best Western Arwad Hotel に泊まる。

前泊まったアンマンパレスは、誰も泊まっていなくて、ゴーストタウンみたいだったので。

いよいよ単独でイラクに入る覚悟を決めなければならない。

ドバイでも、アンマンでも、レバノンでも、みんなに口を揃えて「危険だからやめなさい、あそこは地獄だ。」といわれてきたのだ。

ママジャミーラは「今イラクに行くのは気狂い沙汰だし、死にに行くようなものだ。どこから弾がとんでくるかわからないような状態なんだから。」と言いはじめた。

そして「ヤスミンさんは日本でコンサートしたり、やれることが他にたくさんあるし、娘さんも成人していないし、レバノンのグループがうごかない今となつては、医薬品も運べないし、ここまですてイラクには行かないほうがいいと思うの。」といいだす。

「戦争前は受け入れ先があったけど、今は政府がないんだから、受け手もないし何が起るかわからない・・・」と心底心配そう。

確かに今のイラクは治安の悪さ・伝染病・電気や水の不便さなど、なにをとっても行かないほうがいいに決まっている。

でも私は、そんなことは承知した上で、イラクの人たちと会って、たとえすこしでも一緒に生活して、話をしたい、と思ってここまできたのだ。今更まわりの国の人たちに危ない、と言われたからって、イラクに入らないまま帰るたくはない。

ママジャミーラが、心配して私の帰りを待っている

だろう家族のことなどを、深く考えてくださっているのはとてもありがたかったけれど、今帰国することなど考えられなかった。

「私に危険なものは、ママジャミーラにとっても危険なんだから」・・・などと私は話を濁した。

5月1日（木）

イラク大使館にいくが、祝日でまたまたお休み。

一体この大使館はいつ仕事をしているのか、と思う。

もっとも政府がないのだからお給料もでないのだろうし、労働意欲なんてでるわけないだろうな、とは思ったけれど。

今日は木曜日で、アンマンでは金曜日・土曜日がお休みなのだから、ヴィザをとろうと思えば、日曜日まで3日も待たなければならない。

「どうしよう、パレスチナにでもいってこようか」・・・などと話しながら歩いていて、そういえば、ムスリムのジャーナリストのシャーミル常岡さんがメールをくださっていて、確かインターコンチネンタルホテルに泊まっていらっしゃる、と家族からメールがはいっていたことを思い出す。ご連絡ください、というメッセージをいただいていたのだけれど、あんまりゴチャゴチャ動いていたので、すっかり忘れていた。（常岡さんごめんなさい）

インターコンチネンタルホテルはこのすぐ近くだ。じゃあ行ってみましょう、ということでインターコンチネンタルホテルに行ってみる。

残念ながら、常岡さんたちは一足ちがいで昨日チェックアウトしていた。

豪華なホテルで居心地がいいので、ロビーのソファでのんびりしていると、人間の盾でイラク入りしていた神崎さんが通りかかった。

戦争中の爆撃と一緒に経験したママジャミーラと神崎さんは、なつかしように話に花を咲かせていたが、私たちがこれからイラク入りしたいのだけれど、イラク大使館がお休みでヴィザがとれない、という話をすると、プレスカードがあれば、ヴィザなしでも大丈夫みたいです、と教えてくださった。

プレスカードというのは、要するにジャーナリストである証明書のようなもので、在住地でジャーナリストであることが証明できれば、どこの国でもそのカードを見せれば取材 OK という便利なものであるらしい。

神崎さんは日本の運転免許証をみせて「私はジャーナリストです。」と言ってカード発行の申し込みをしたのだそうだ。

「昨日申し込みをしたので今日発行される予定なんですけど・・・。」とご本人も半信半疑のご様子。あたりまえだ。運転免許証を見せて私はジャーナリストです、という話が通るのなら、運転免許をもっているひとはみんなジャーナリストになれるってことになるのだから。

ところが・・・これが問題なく発行されたのだ。

「嘘みたいですねえ・・・こんなに簡単にプレスカードが手にはいるなんて。」とにわかジャーナリストに変身した神崎さんは、嬉しそうにちゃんと水色のプレスカードを手にして発行カウンターから戻ってきた。

これにはあきれてしまったけれども、私たちにとっては救いの主が現われたようなものだった。

即座に「チーフ、私たちを助手にしてください。」という話がまとまり、3人でイラク入りすることに・・・。

アンマン郊外でイラクに入るタクシーを探して、夜中の12時に出発するということになった。それというのも、夜のあいだはイラクとの国境はアメリカ軍によって閉鎖されるので、夜国境に着いても次の日の朝まで車の中で待たなければならないのだそうだ。それにイラクに入ってからバグダードまでの道には、日本大使館での情報どおり盗賊がでる、ということで、夜走るのは大変危険なのだそうです。

とにかく結局ヴィザはとれなかったけれど、イラクに入る準備は整った。

あとは国境で追い返されないことを祈るだけだ。ダウNTOWNに戻って、インターネットカフェへ行く。

イラクに入れば、もうインターネットはできない。家にメールしながら、これが最後のメールになるかもしれない・・・と思ってしまう。

「私の思うようにさせてくれて本当にありがとう。自分の目でイラクを見てきます。なにが起こっても、私は世界一幸せです。」と家族に書きながら涙がとまらないのが恥ずかしかった。万が一帰れないとしても・・・とは、家族がどんな思いでいるかを考えるとどうしても書けなかった。

戦争中爆撃の下にいるひとたちのことを考えて眠れない日が続いた私だったけれど、今戦後の無政府状態で、なにが起こるかわからないイラクにはいることは、あのときの私の状態に家族を追いやることになるのだとわかっていた。

もっとひどいかもかもしれない・・・家族なのだから。それでも私はイラクに行きたいのだった。自分がとてもエゴイストな人間に思えて、心から家族に申し訳ないと思った。

アメリカがこの理不尽な戦争をはじめてから私はずっと苦しんで、いろんなことを考えてここまで来た。

でも神さまのお導きがなかったら、今私はここにいないはずだ、ということ疑ってはいなかった。どんなに悲惨なことでも、ちゃんとこの目で見なく

ては・・・そして、創られた画像からではない、本当のイラクのひとたちの声をきいて、伝えたい。

私にできることは、ほかにはないのだから・・・私の家族は私のこの思いを深く理解してくれたからこそ、私が「イラクに行きたい。」と切り出したとき、「行かないで欲しい。」という懇願するような顔はしたけれど、言葉にはしなかったのだ。

涙を瞼の裏で乾かして、無理やり笑顔をつくって送りだしてくれた家族の「これからイラクにむかいます。」というメールを読む時の身を切るようなつらさを考えたとき、「感傷にひたってる場合じゃない。私がしっかり見てこなかったら家族の忍耐も無駄にしまうことになる。」と真剣に思った。家族も私もすべて包んでくださる神さまの慈悲深さを強く感じて、クルアーンを唱えていた。

アンマンからバグダードへ

5月2日

メールの送信がうまくいかず、出発が遅れ、むかえにきたタクシーのドライバーを怒らせてしまったり、イラクに入るドライバーが最初に請合ったヨルダン人はでなくてイラク人にかわっていたり、手数料のことでめめたり・・・といういろいろ問題はあったけれど、とにかく夜中12時半にはアンマンを出発。車も昼間見たのとちがって、なんだか古くてガタガタ。

ん？ 大丈夫かなあ・・・と思ったけれど、もう出発した後なのでどうしようもない。

口の中で小さくクルアーンを唱える。

これ以上スピードがでないのか、ずいぶんゆっくり走る。

何度もイラク入りしているママジャミーラも、こんなひどい車ははじめて・・・という。

なんだか心配になってくる。

このスピードでは、一体何時間かかるかわからない・・・と半分あきらめたような気持ちで寝入ってしまった。

目がさめると、暗闇のなか車は止まっている。なにがおこったのか・・・と思ったけれど、単にドライバーが休憩しているだけだったらしい。

800キロの長い道のりをすこしでもはやく行きたい私たちは、はやく車をだしてくれるよう頼む。するとドライバーは車の前のボンネットを開けようとする。

ところがボンネットが開かないらしく、バンバンたたきはじめた。

やっとボンネットがあいたのだけれど、車に対する

私たちの不信感は最高潮に達していた。
そんなことにはおかまいなしに、ドライバーはくわえタバコでラジエーターの点検。
あーっ、長距離を走ったガタガタに古い車のラジエーターをくわえタバコで点検するなんて！
・・・爆発したらどうするの！

アンマンでコンボイと一緒に組みましょう、という毎日新聞の記者がいたのだけれど、彼のチャーターした GM は 800 ドルもした。4人で割ってもひとり 200 ドルモースル。私たちのタクシーは3人で 100 ドルだった。多少の危険はしかたがないかもしれない、などと変に納得する。
もう嫌、我慢できない！ 国境に着いたらタクシー替えようね・・・と話していた私たちだったけれど、途中ペットボトルの水をたくさんストックしてなんとか無事国境についた頃には、ボロボロ車にも慣れてしまい、車を替えることなどすっかり忘れてしまったのだった。

明け方 5 時ごろ、ヨルダン側の国境に着く。
ヨルダン出国がうるさい、と聞いていたので、ここで追い返されては・・・と身構える。
職業は？・・・ときかれるのに、ジャーナリストです、と答える。
証明書は？・・・というのに、神崎さんが堂々とプレスカードをさし出す。
さしたる問題もなく出国できて、ほっとする。
プレスカードなしだったかもめたのかどうかは、今となってはわからない。
とにかく神崎さんのプレスカードはありがたかった。

たくさんの難民キャンプを見ながらヨルダン国境を越えるといよいよイラクの国境にはいる。

顔のないサッダーム・フセインの写真を掲げた塔が見えてくる。(写真)
ものすごい数のイラクに入ろうとするジャーナリストたちのチャーターした車でごったがえしている。

一体イラクに入るのに、どのくらい時間がかかるのかしら・・・とイライラしながら、延々と並んだ車の列にはいる。割り込んでくる車もいて、どの列に並んでいるのかもよくわからない。

待ちくたびれて退屈していたので、隣りの車から顔をだしていた人に「どこから来たの？」と声をかける。「自分はベルギー人だけど、**Human Right Watch** から派遣されてる。オフィスはニューヨークだ。あなたは？ ジャーナリスト？」ときいてくる。しかたがないので、そうだ、と答える。
「イラクへはなぜ入りたいのか」という彼の質問に、「本当のイラクの状況を日本のひとたちに知らせ

たいから」と答えると、「私も同じだ。お互い出来るだけのことをやろう。」と、さわやかな笑顔。
彼は私たちがダマスクスでテレビを見ていたとき、**BBC** のニュースでバグダード南方のヒッラでの虐殺について許せない行為、とコメントしていた人だ。

イラク国境で待っているうちに、夜が明けた。
一面砂漠のちょうどイラク方面の地平線に太陽が昇っていく。
美しかった。ここでもこの宇宙の摂理をつかさどっている神さまの偉大さにひれ伏したいような感動をおぼえた。
人間がどんなに醜い争いでお互いを傷つけあおうと、放射能で自然を汚染し破壊しようとも、絶対者の手にある宇宙の摂理が変わることはない。
おおきな希望を感じて胸が暖くなる。

そしてアメリカ軍の兵士たちがチェックしているイラク国境は、パスポートをちらりと見るだけで、なんなく通過することができた。

やった！ これで念願のイラクにはいれた！
何日もイラクのまわりでウロウロした苦労が今報われたと思うと、感無量だった。

イラクに入るとすぐ給油し、途中ラマディーというところでドライバーが車を止め、屋台をひとつぼつんとだしているところに知り合いでもいるのか、行ってみる。
私はお手洗いにきたかったので、ドライバーが危ないからここで待てるように、というようなことを言っていたような気がしたのだけれど、爆撃でめっちゃめちゃになったドライブインのはしっこにあるトイレに行く。
なにともなかったけれど、イラクを出るときのドライバーが、ラマディーあたりに盗賊がでる、と言っていたから、やっぱり危ないところだったのかもしれない。
イラク人のドライバーはヨルダンにいたときはなんだかおどおどしていたけれど、イラクに入ると急に元気になったように私の目には見えた。

途中一度ドライブインに食事のため立ち寄ったけれど、あとはどこまで続くともわからない荒地の中を地平線に蜃気楼を見ながら、ただただガタガタと走り続けること 7 時間。

破壊された高架橋 ところどころに壊れた戦車が放置されたままになっている。
羊の群れを追っている少年の姿や、ナツメヤシのある小さな村などがあらわれはじめる。
高架橋の道路が無惨に破壊されている。

ユーフラテス河

そして、とうとうユーフラテスを渡った。

もうすぐバグダードだ。

バグダードにて 5月2日（金）

午後3時、バグダードの町の中心部に着く。
夜中12時半にアンマンをでて、14時間以上経過している。
バグダードの町はどこも無惨な爆撃の跡で溢れていた。

バンカーバスターなどで爆撃を受けたと思われる、中が焼けこげた多くの建物。（写真）
あちこちに真っ黒にやけただれてひっくり返ったトラックやバスがそのまま放置されている。（写真）

私たちが泊まろうとしているホテルは、ママジャミーラが戦争中滞在していたところだそうで、ありがたいことにキッチンがついている。
戦禍を免れ、自家発電装置をもっているのも電気もきている。
イラクでこんな快適なところに泊まれると思っていなかったのも、夢のよう。

（結局1泊しかなかったのも、ほとんど夢のままだったのだけれど）
2人で泊まると80ドル・3人で泊まると100ドルと安くはないのだけれど、とにかくチェックインすることにする。
ベランダが南に面していて外は広い空き地なので、電波の状態がよさそう。
ここなら Thuraya 衛星携帯電話が問題なく使えるかもしれない。
祈るような気持ちで、東京に電話してみる。
すこし時間がかかったけれど、ちゃんとつながった。

「無事着いた？よかった。」というほっとした家族の声をきいて、私も心がなごむ。
毎日新聞の五味記者がイラクから持ち出したものがアンマンの空港で爆発した、というニュースを家族から聞く。
イラクには不発弾や、爆弾の破片がどこにでもちらばっている、ということは私もきいていた。
これから私もそのような爆発物を目にする機会がたくさんあるのだろう。

家族が受け取っていたメールからの情報で、常岡さんがマジヤリス・アル・バグダリアというホテルにいるということを伝え、神崎さんは、会いに行ってみます、とでかけていった。
私たちは、ママジャミーラの知り合いの家族の無事をたしかめにでかけることにする。

タクシーをひろって、町の様子を見ながらドライバーのはなしをきく。

私たちが外国人であることを意識しながらの話ではあるのだろうけれど、自分たちがいかに苦労を強いられているかを話したがっているようだった。

「戦争を始めてからずっといまでも、アメリカ軍はイラク人を殺し続けている。サッダーもいやだったけれど、アメリカはもっといやだ。」と言う。

「アメリカは人間を愛さない。愛しているのは石油だけだ。」と。

私たちが日本人であることを知ると「日本は私たちを助けようとしなければ、それはアメリカがこわいからだ」と私たちは知っている。日本人が悪いとは思っていないよ。」と続けた。

「ありがとう、そう思ってくれて。」といいながら心中複雑な思いだった。

サッダー・フセインが最後に姿を見せた、といわれるマンスールというところを通る。（写真）

ひとのよさそうなドライバーのおじさんは「給油していいかな？ちょっと時間がかかるけど。10分くらいかな。」というので、10分くらいなら、と私たちも「どうぞ」と答えて、車はガソリンスタンドへ。

ところがこれがたいへんなことなのだった。
ガソリンスタンドにはいったとたん、給油を待つ夥しい数の車のドライバーたちの順番をめぐっての怒鳴りあいの渦にまきこまれたのだ。私たちを乗せたタクシーの運転手もひとが変わったように、外にでるやいなや怒鳴り始めた。

たいへんなところにきてしまった・・・と思ったけれども後のまつり。

忍耐強く車の中で待つこと30分。

だんだん陽が傾いてくる・・・だいたい私たちがホテルをでたのが既に6時ごろだったのだから、もう7時ちかい。

バグダードはまだ明るいとはいえ、無事かどうかわからない知り合いを訪ねるのに夜になるのはいやだった。やっと車のそばに帰ってきたおじさんに、「私たちは時間がないので、もう待てない。」と告げる。

おじさんは「うん、わかった。」と、さして未練もなく、給油はあきらめて車の渦から抜け出してくれた。

電話が通じない、というのは本当に不便なことだ。

「ご無事でしたか？では今から伺ってもよろしいでしょうか？」なんてアポイントメントをとることは、ここバグダードでは不可能なのだ。会いたい人の消息を知りたいければ、その人の家に行ってみるしか手がない。

めざす住所を探し出すのがまた大変なことだった。

書いてある住所のメモを運転手に渡して行ってもらうのだけれど、どうもはっきりわからないらしいのだ。

運転手はあちこちでいろいろなひとにメモを見せて住所を聞き、めざす場所にだんだん近づいてはいるらしいのだけれど、なかなかたどりつけない。この近くらしい、と思われる家のひとにメモを見せると、「この地区内だけなら電話が通じるから、電話してみてください。どうぞ私たちの家でお待ちください。」と親切に庭におかれたブランコの椅子に案内して飲み物までだしてくださった。カラカラになった喉に冷たいジュースが本当においしい。

ナツメヤシや木々に囲まれた手入れの行き届いた庭は涼しげで、疲れきった私たちを優しくむかえてくれた。

「連絡がとれましたよ。今からむかえにきてくださるそうです。」とその家のひとが知らせてくれる。お迎えを待っているあいだ、この家の奥さまが娘さんたちを丁寧にひとりひとり紹介してくださる。イスラームでは、旅人をもてなすことはとても大切なこと、とされている。だからというわけではないと思うけれども、私たちが今回旅している間、たくさんのひとたちが「是非うちにお泊まりなさい。」といってくださったし、食事や飲み物をごちそうしてくださるかたたちもすくなくなかった。

ママジャミーラの知り合いのかたが迎えにきてくださり、私たちは待たせていただいた家のかたたちにお礼をいって外にでた。外で待っていた男性たちが見送ってくださった。

バグダード郊外にあるそのお宅は、ちかくまでアメリカ軍がせまってきた、ということだったけれどもなんとか戦禍を免れていた。家の中にはいってまず真っ暗なのに驚いた。電気は1日に1・2時間しかこないのだそう。私たちがチェックインしたホテルとはだいぶ事情がちがう。

非常用携帯蛍光灯をつけ、食事をだしてくださった。「本当にひどいことになってしまった。でもサッダム政権によって、すべての家庭に6ヶ月分の食料が配給されていたので、なんとか食べていけます。」と薄暗い光の中でその家のかたたちは語った。ムスリムの家庭はたいいそうなのだけれど、このうちも大家族で、夫婦とお母さん、それに長男のお嫁さんとこども、まだ結婚していない次男・長女・次女・三女の10人家族だった。夕食をいただいて帰ろうとする私たちに「今晚はもう帰れないから、ここに泊まっていきなさい。」という。えーっ、せっかく居心地の良いホテルに部屋をとってあるのに。あそこは電気もくるから冷房もあるし、

疲れてもいるからホテルに帰ってゆっくり休みたい・・・というのが私の本音であったのだけれど、その家のご主人は「今バグダードは大変危険な状態だ。

米軍が夜7時から朝6時までの夜間外出禁止例をだして、このあいだもファジュルの礼拝（イスラームが暁に行う一日の始めの礼拝）にモスクに行った男たちが銃撃されて殺された。夜は略奪者たちの天下だし殺されてもいいなら今から帰るというのでもいいが、私は車で送っていく勇気はない。必ず車を強奪されるだろうからね。」とおっしゃるのだ。

タクシーだって条件は同じだろうし、かといって歩いて帰れる距離ではない。

私たちに選択の余地はなかった。

その日はふたりとも次女の部屋に泊めてもらった。電気がこないで冷房もないし、扇風機も動かない。ロウソクの光がこれほどありがたいと思ったことはなかった。

消えないように気をつけてロウソクをもって、ゆっくり歩いて洗面所に行き、顔を洗って歯磨きをした。一晩中かかってバグダードにたどりついたところで、汗もかいていたのでシャワーを浴びたかったけれども、ホテルに帰れない今となってはどうしようもない。

もうなんにも考えないで寝ることにした。あの快適なホテルを見た後だから、電気もなく水もすこししかでないこの状況にがっかりしているけれど、もともとその覚悟でイラクに入ったのだ。蚊がうるさかったので、暑かったけれども頭からすっぽりシーツをかぶって眠った。これからイラクでどんな経験をするようになるのかしら、と考えながら。

バグダードにて 2

5月3日（土）

朝9時にSさん（万一ご迷惑がかかることを考えて名前をだすのは控えさせていただきます）が車で送ってくださった。

途中ひどい悪臭のする場所をとおりかかる。これは死体の臭いだろう、といわれて戦地にいることをひしひしと感じる。まだ放置されたままの死体がたくさんあるのだという。

ファルージャでアメリカ軍が、デモをしていたイラク人に発砲して死者をだした、というニュースは私もきいていた。でも、ファルージャで様子を見てきたひとの話を聞くと何ともひどいものだった。アメリカ軍が小学校を占拠してしまって、こどもたちに教育を受けさせない。それどころか、なんと、こどもたちにポルノ雑誌を配っている、という。

怒った父母たちが抗議のデモを行ったところ、発砲された。それだけでなく、デモに参加していたひとたちが民家に逃げ込んだところを、家のなかまで追いかけて行って射殺した、という。民家の壁には生々しい血の跡が多数残っている、ということだった。

きくだけで身の毛もよだつような話なのだが、今もファルージャではものものしい警備のアメリカ兵と抗議するイラク人のあいだに一触即発の空気が流れている、という。

一旦フラワーズランドホテルに帰る。
ここは冷房がきいていて気持ちがいい。
マジャリス・アル・バグダリアホテルに移ります、という神崎さんの置手紙がある。
でかけたまま帰ってこない私たちのこと、心配だったかしら？
なにしろ電話が通じないので、連絡方法がなかったのだ。(神崎さんごめんなさい)

すこし休んでからパレスチナホテルに行ってみる。
(写真)
ここもアメリカ兵がものものしく警備している。
鉄条網をはりめぐらせた一角に出入り口があり、ホテルに出入りしようと思うとそこでアメリカ兵のチェックをうけなければならない。私たちが「ホテルのロビーでひとと待ち合わせをしている」というと「ひとりずつなら入ってもいい」という。

しかたがないので、ママジャミーラに先にはいって様子をみてきてもらう。
「知ってる人はだれもいない」とママジャミーラがすぐ帰ってきた。
私もとにかく一度様子をみたかったので、交代でロビーに行く。
そのうち「入ってもいいって。」とママジャミーラもまた入ってきた。
最初からふたりともいれてくれればいいのに。

パレスチナホテルの前の広場は、日本でもサッダーム・フセインの銅像が引き倒された映像が何度もテレビで流された場所だ。(写真)
ちなみに地元のイラク人によれば、あの像はサッダーム・フセインではなく、その前の大統領だ、ということだった。

少し歩いてお昼にドネルサンドを食べる。
夥しい蠅が発生していて、払っても払っても追いつかない。
しまいには払うのをあきらめてしまう。
町のあちこちにゴミが散乱しそのままになっている。
これでは蠅だけでなく、ネズミも増えそうだし、こ

れからますます暑くなるこの町はどうなっていくんだろう、と不安になる。

今なにが欲しい？とイラクのひとたちに質問すると、答えは決まって「安全が欲しい」だった。
特に南のバスラのほうでは、ひとびとは切羽詰ったようにそう答えた。

治安の悪さは私たちゆきずりの者にとっては、一時的なことで、たいしたことではないかもしれないけれど、そこから逃げられず、ずっとそこに住まなければならない身になって考えると大変なことだ。
特に若い女性やこどもをもつ母親の不安は計り知れないものがある。
彼らは百戦錬磨のつわものではない。
彼女たち自身が危険にさらされているし、母親たちは愛しい小さな守るものたちを持つ弱い存在だ。

15歳の高校生の女の子にきいた話。戦争が終わってすぐのこと、ふたたび登校しはじめた女生徒たちの何人かがアメリカ兵に連れていかれたまま帰ってこない、という。
その話が伝わってから、こわがって誰ひとり登校できないどころか、家をでることさえできずにいる。
このようなことは、日本で報道されているだろうか。

衛生面にしても同じことで、私たちは日程をこなせばそこから逃げ出せる。
でも彼らのほとんどは生きている間ずっとそこで暮らすのだ。
私たちがお世話になったお宅の7箇月の赤ちゃんは原因不明の発疹が身体中にあらわれて苦しんでいた。
若いおとなしそうなお母さんは本当につらそうだった。

私にも、私の娘が肺炎になったとき、私の命にかえても守りたい、と思った経験がある。
原因がわからない病気にかかったこどもをもつ母親ほどあわれなものはない。
おとなはある程度免疫があるから、どんな環境にもある程度耐えられるけれど、こどもや病人にとっての非衛生的な環境は、我慢できるかどうか、という問題ではなく、生死にかかわることなのだ。

マジャリス・アル・バグダリアホテルに行ってみる。
常岡さんや神崎さん、ほかにも何人かの日本人のかたがたがいてなんだかなつかしい。
私たちのところにはキッチンがあるので、今夜はおにぎりやラーメンパーティーをしましょう、ということになり、ママジャミーラと私は用意のため一足さきにホテルをでる。

ところが・・・キッチンはあるのだけれど、ガスがきていなかったのだ。

地下のシェルターに運び込んであった食料を部屋に運びあげているうちにみんなが来てしまった。

ホテルのレストランのキッチンを使わせてもらうことができ、おにぎりはつくれなかったけれど、ラーメンとヨルダンからもってきたハムをみんなで食べることができた。

私はレストランにおいてあった古いピアノを弾いた。
トルコでもチュニジアでもピアノ弾いたけれど、まさかイラクでピアノを弾くチャンスがあるとは思わなかった。

夜中に外で銃撃の音、時々ドン！という爆発音もきこえる。

でもシャワーを浴びてすっかり気持ち良くなった私はひさしぶりにぐっすり眠った。
思い返せば、このホテルでの一日はイラクで過ごした日々のなかで最上の時だった。
冷房があって、電気が明るくて、水がふんだんに使えて（なぜ地区によって、電気や水の供給量にこうも差があるのか、いまだに謎なのだけれど）近くに仲間がいる。

明日から南のバスラ・ナジャフ・ナスィーリア、もし可能ならクウェート国境まで行く予定。

バスラへ

5月4日（日）

朝7時半にホテルをチェックアウトする。
ホテルのマネージャーらしい若い男性が「もう行ってしまうのか？」となごりおしそうに、造花のバラの花をくださった。
後でバグダードに戻ってきたときお世話になるS家の娘たちとこの男性の話で盛り上がることになる。
戦時下だって占領下だって、結婚前の若い女性たちにとって、やはり若い男性は興味の対象であるらしい。

大きな荷物をかかえてイラクを横断するのは大変だし危険なので、私たちはSさんのお宅に荷物を預かってもらいに行った。
朝早くから大荷物をもってとびこんできた私たちが、事情を話して「これからバスラに行きたいので荷物を預かって欲しい。」と言うと、Sさんは「やめなさい。あそこは地獄だ。」という。ん？どこかで聞いたなあ、このセリフ・・・と思い返してみる。そう、ベイルートでイラクに行く、という私たちに、Diana たちが言ったのとおんなじだ。

ベイルートのひとたちから見ると、イラク全体が地獄で、バグダードのひとたちから見ると、バスラは地獄・・・ということになるらしい。

Sさんの言うことには、南に行くほど状況はひどいということらしい。

それなら余計いってみなくちゃ・・・という私たちに、Sさんは執拗に説得を繰り返す。

「だいたいあなたたちは女2人だ。守ってくれる男もなしにそんな危険なところに行くなどんでもない。私は歳もとっているし、脚が悪いので、一緒に行つてあなたたちを守ることはできない。バグダードで十分イラクの様子はわかるではないか。しばらくここにいなさい。お願いだからそんな無謀なこととはしないでくれ。」・・・と半分怒ったように言うSさんの剣幕に私たちは顔を見合わせて黙ってしまう。

しばらく飲み物をいただいたりしていたけれど、そばで心配そうに見ていた奥さまに「ありがとう。じゃあそろそろ行きます。」と言って立ちあがる。奥さまは「神さまがあなたたちをお守りくださいますように。」と言ってくださった。

Sさんはあきれたように首をふりながら、それでも私たちにバスラ行きのタクシー発着所への行き方を教えてくれた。

「必ず帰ってくるんだよ。」と悲しそうに言うSさんの姿に私たちは胸がつまった。

「荷物預けないで、黙っていけばよかったね。」道々そう話しながら、なんだか私たちは父親を悲しませる放蕩娘のような心境だった。

とにかく身軽になって南部に旅立つことができるようになった私たちは、バスラ行きのタクシーのりばをめざした。

市内はどこもひどい渋滞だ。交通信号は動いていないし、警察はいない。交通ルールもなにもあったものではない上に、ほとんどのひとが失業状態のなか、他に仕事がなく、車を持っているひとは無免許タクシーに早代わりしているの、車の台数が膨れ上がっている。おまけにガソリンスタンドで給油を待つ車の列はおそろしいほどの数になっている。まわりの道路はあふれた車に占領されてしまい、通ることができないので、迂回しなければならない。

ほとんどの車はガソリンスタンドのはるか遠くからすでにガソリンがきれていて、ひとびとは忍耐強くすこしづつ自分の車を押している。後で聞いた話では、給油できるまでに2日か3日かかるそうだ。1日中待って、夜は家へ帰って、また次の日に車のところまで通ってきて給油を待つのだという。しかもそれだけ待っても25リットルという給油制限があるのだそうだ。

産油国のイラクでなんということだろう！

劣化ウランを含んだ砂埃りと、今にも壊れそうな古い車の群れの大渋滞による排気ガスがバグダード

市内に充満している。とても息苦しい。

バスラ行きの乗合いタクシーに、やっとのれたのは、もう昼の11時ちかかった。

いままでバグダードで乗ったタクシーは、ドアがつぶれていたり、座席のソファがなかったり、埃だらけだったり・・・とさまざまで、フロントガラスに穴や、ひびのはいついていない車は稀だった。

アンマンからバグダード入りした時のタクシーのフロントガラスはひびだらけだった。

今回のタクシーは座席に埃が積もってはいたけれども、今までで一番マシだった。なによりもフロントガラスが割れていない！

これからバスラまでの長い道のりをいく私たちにとっては、少しでも快適な車で移動できることほどありがたいことはない。

それに、乗合いタクシーの運転手や一緒に乗り合わせた乗客は、時には私たちにとって頼もしいボディガードでもある。

運転席と助手席の頼もしそうな2人のイラク人男性のおかげで、バスラまでの500キロの道のりを、私たちは安心してふかぶかと後部座席でくつろいでいることができた。

バグダード市街の渋滞を1時間かけて抜ける。途中悪名高い(?) だろぼう市のそばを通る。

だろぼう市では、アメリカ軍占領下のイラクで好き放題の略奪が許され、いたるところから略奪された品物がなんでも売られている。

東京のフリーマーケットの比ではない。

それこそおおきな家具から、貴金属から、古美術品、動物にいたるまで、なんでも堂々と売られている。盗品のパスポートを買っていた人たちも何人かいた。

だろぼう市はアメリカ軍の戦車に守られ、町のどこよりも活気に満ちている。

ここでは盗んだものを自由に売りさばく権利を守ることが、アメリカの民主主義であるらしい。

地元のひとからの情報によれば、まずアメリカ兵が必要なものを略奪し、そのあと彼らがクウェートやヨルダンから連れてきたひとたちに略奪させた、ということだ。

それから、機を見た貧しいひとたちのなかにも略奪行為はひろがっていった、という。

要領の良いひとは、この混乱に乗じた公然の略奪で大儲けしているのだそうだ。

盗みをするのは悪いこと、というあたりまえの善悪の尺度を持つひとびとは、このアメリカのもたらした民主主義を見て、恥ずかしさに唇を噛んでいるという。

どこまでもまっ平な地平線が続くなか、ところどころに湧き水で小さな池ができています。

イラク南部には荒地と砂漠しかないと思っていた

ので、意外な気がした。

黒いアバーヤをすっぽりかぶった女性たちが汲んだ水を頭の上にのせて運んでいる。

旧約聖書の世界だ・・・と胸がときめく。

預言者ヤアコブ(ヤコブ)が羊に水を飲ませているラケルを見初めたのも、こういうところだったのだろうか・・・。太古のロマンに思いをめぐらせる。

ヨルダンでもイラクでも、こどもの頃に読んだ聖書の描写がいたるところで目に浮かんだ。

聖書を読むひとたちがこの地を訪れると、もっと聖書を身近に感じられるにちがいない。

チグリス・ユーフラテスを抱えるこの肥沃な大地での壮大な歴史、そのひとこまひとこまに刻み込まれる、尽きることのない絶対者の慈悲をこんなに身近に感じることでできる機会を与えられた幸運を神さまに感謝しながら、太古からの時の流れのなかに身をゆだねる。

言葉ではあらわせない幸せを感じて心が感謝の気持ちでいっぱいになる。

なぜひとにぎりの人間たちが世界を煽動して、この偉大な力にさからおうとするのだろうか？

なぜ無理やりに歴史を書きかえようとするのだろうか？

この雄大でもあり、過酷でもある自然を目にして、超越者にすべてをゆだねようという気持ちはごく自然なことに感じられるのだった。

アメリカ軍の戦車はいたるところで目にした。(写真)

ところどころに土を盛ったバリケードがあらわれ、そのなかにイラク軍の小さい戦車(アメリカ軍の戦車とイラク軍の戦車は段違いに大きさがちがう)がのりすてられている。

祖国を守ろうとするひとたちが、巨大な軍事力に踏みにじられていった痕を今私たちは遡っているのだ。

アメリカ軍の戦車

午後3時半ごろと4時半ごろ、検問所を通る。

アメリカ兵とイラク人両方でチェックしている。

5時ごろバスラ方面からバグダード方面に大量の物資を運ぶアメリカ軍の長い隊列とすれちがう。コンテナなので、なにを運びこんでいるのかはわからない。

途中一度食事のために休憩したけれど、一気にバスラまでとばしてきた。(写真)

バスラの郊外で給油する。

ここまできると、バグダードでみたように給油を待つ長い行列はない。

6時、バスラに到着する。

郊外用のタクシーはここまでなので、市内行きのタ

クシーにのりかえてホテルに連れていってくれるよう頼む。

バスラでたいていのジャーナリストたちが宿泊するシェラトンホテルはアリババ(イラクのひとたちは略奪者をそう呼んでいた)に放火され全焼したという。

ここなら大丈夫だろう、とタクシーの運転手はアル・マルバッドというホテルに連れていってくれた。TVと書かれたジャーナリストたちのチャーターした車が何台か止まっている。

7時すぎでいてすでに陽が暮れはじめていたけれど、換金したかったしおなかもすいていたので、町にでかけてみた。

スーク(市場)に行ってみたけれどほとんど閉まっている。

ここバスラは英軍に占領されていて、イギリスの戦車が通りのつきあたりに陣取っている。

換金している時、いきなり停電して真っ暗になる。通りにでると、おじさんが近づいてきて「女性だけで夜出歩くのはとても危険だ。はやく帰りなさい。」という。

ごもつともだと思い、素直に「ありがとう」と言っ

てタクシーにのった。なにか食べ物が欲しかったので、帰る途中に見つけた屋台で果物を買った。

途中イギリス兵がイラク人の車を止めて、なにか尋問している現場をとおりすぎた。

「イギリス兵たちはいい車を没収して、自分たちのものにするんだ。」と、ここでもまた運転手が信じられないようなことを言う。

イラクにきてから信じられないようなことをたくさん聞いたので、もう慣れてしまったけれど。

この日は、果物とホテルのフロントに頼んで買ってきてもらったアイスクリームで夕食をすませる。

とうとうバスラまでくることができた。

バスラにて

5月5日(月)

気になっていたのも、アリババに放火・略奪されたというシェラトンホテルを見に行く。

聞いていたとおり、中は真っ黒こげになっていて使いものにはならないようだ。(写真)

運河沿いの見晴らしの良い場所にあり、リゾートホテルとしてもすてきだっただろうに。

昨年11月にママジャミーラが日本に招いたバスラ大学付属病院の医師、アル・アリ先生に会いに行く。

病院はたくさんのひとでごったがえしていた。

アリ医師の話では、バグダードの病院が機能していないため、イラク全土からたくさんの患者さんたちがこの病院に集まってくるのだそうだ。

病院の医師たちに、今なにが一番必要ですか?とたずねると、「まず、セキュリティが必要です」との答え。

どこでも同じなのだ。みんなまず安全に生活できることを望んでいる。

そして水・医薬品・安全な食べ物・・・。

ここはガン専門病院なので、アリ医師が必要だといわれた医薬品10種類はすべてガン治療で、他の病院で不足しているものは各病院によってちがってくる。

ある病院では抗生物質などの薬がまったくなく、ある病院では点滴を固定するための棒がなくて、ダンボールをつかっている、という。

どの病院でも、電気がきちんと供給されないため、冷蔵保存されなければならないワクチンなどは、冷蔵庫のなかで溶けたり固まったりしている状態だそうだ。

アリ医師にリストアップされた、ガン専用の医薬品は非常に高価で、とても民間NGOの手におえるものではない。

本来なら、アメリカが劣化ウラン弾によるガン発生率の異常増加をきちんと認めて責任をとるべきなのだ。もっとも認めるものなら、湾岸戦争以来の、特にここバスラでのガン発生率に顕著にあらわれているのだから、今回の爆撃にだって劣化ウラン弾は使えなかった筈なのだ。軍の上層部は劣化ウラン弾のおそろしさについては、十分すぎるほど認めた上で使っているのだから、これは十分戦犯に値する。イラク国民に謝罪し、保証しなければならない筈なのだ。イラク国民だけでなく、アフガニスタンにも、ボスニアにも、コソボにも、そして自国民にも・・・。

3年前に発病して入院している、バグダードからきた工科大学の学生のイマード・マーリムさんという男性と話す。(写真)

彼は「今自分にはなんの治療もしてもらえない。インターフェロンが欲しい!」とかすれた声で訴えた。そばで彼のお父さんが懇願するような顔で私たちを見ているのがつらかった。前途洋々たる若い命を放射能汚染は容赦なく奪っていく。

この病院で事務員として働いていたというワーヒダ・フムードさんは原因不明の病気にかかって苦しんでいる。

以下はワーヒダさんの病状の所見を訳したもの、抜粋。

診療所見

フムードさんは1994年6月に、顔の腫れ、脚の腫

れ、関節痛、脊椎痛、及び、貧血の症状で来院した。検査によって、彼女は急性腎炎と尿毒症を伴ったSLEにかかっていることが判明した。

彼女は集中治療室にて治療を受けることが許され、腎臓機能が通常に戻るまで数ヶ月の多量のコルチコイドが処方され、徐々に減らして通常のステロイド服用量を保つ今に至っている。

病気の間中、フムードさんは再発性の上顎洞、副鼻腔炎や気管支・肺の炎症が進み、抗生物質で治療を受けていた。

彼女が副腎皮質ステロイドを処方されていたので、予防的にイソニコチン酸ヒドラジドを日に300mgを投与された。実際、CTスキャンによって彼女は右中肺葉の気管支拡張のために咯血に至っていることが判明した。

病気の間、フムードさんは左臀部の痛みと歩行困難でも苦しんだ。

CTスキャン検査により、左大腿骨頭壊死になっており、これにより歩行が困難になっていることが判明した。

現在、彼女はプレドニゾロンを日に10mg、利尿薬フルセミドを隔日に、抗生物質を時々投与されている。

サルキス K.ストラク博士 (F.R.C.P)

立会内科医

医学部長

サッダーン教育病院

バスラ大学

*原文は英文でかかれていたもので、医学を専門的に学んでいないため訳に間違いがあるかもしれません。

彼女は彼女の病気の原因が劣化ウランによるものだというのを証明して欲しくて、この所見を私たちに託したのだと思われる。

必要とされる高価なガンの治療薬、劣化ウランと原因不明の病気との因果関係の証明。これはアメリカが責任をとってやらなければならないことなのだ。日本政府だって復興援助を率先してやるというのなら、こういうところへも目を向けて欲しい。

午前10時半、病院を後にして、サンドイッチとジュースを調達してバスに乗る。

1時間ほどでウム・カスルに着く。

港に行ってドバイ行きの船便があるかどうか調べたんだけど、がっかりと軍隊に封鎖されていて入れない。

これではやっぱりドバイから船でこちら側に来たとしても、入れないで追い返されたのだろうな、と思う。

タクシーでクウェート国境をめざしてみる。

もしかしたら、イラク側からなら入れるかもしれない。

国境を守っていたクウェート兵は、クウェートに入りたい、という私たちに「なんとかしてあげたいが、クウェートのヴィザがなければクウェート領内に入れることはできない。ここから17キロほどはなれたアブダリという国境地点でならヴィザの発行が可能かもしれないから、いってみるといい。」という。

ここのクウェート兵が親切だったものだから、希望をもった私たちはアブダリに向かった。

ところが、アブダリではイギリス兵に剣もほろろの対応をされる。

「ここでヴィザなど発行してないし、今おまえたちが立っているところはクウェートだ。はやくイラクに帰れ」というのだ。

1メートル歩けばイラクとクウェートという違う国になる、と信じきっているこのイギリス兵がおかしくもあり、あわれでもあった。

とにかくこの言葉で「へえ、私たち今クウェートにはいってるんだ」となんとなく気を良くした私は、クウェートとイラクにまたがって立ってみたいなあ、なんて冗談半分に考えていた。(写真)

植民地主義者たちが無理やり作ったこの「国境」のおかげで、一体どのくらいの人間の尊厳が無視され、どのくらいの人間が難民にされ、どのくらいの人間が今も人並みの生活すら手にいれられないでいるか、このイギリス兵たちはきっと考えたことなどないのだろう。ただ上司から国境警備を命じられたから守っているにすぎない。

国境があなたにとってそんなに大切なのか、国境にどんな意味があるのか、と尋ねてみたかったけれど、彼にそんな余裕はなさそうだった。「質問があるんだけど」と話しかける私に「ここはクウェートだ、イラクに帰ってからにしろ」という。

この答えに私は我慢できなくなって吹き出してしまった。

だってそうではないか。目と鼻の先にある地続きの場所をこうもはっきりと分けて考えられるほうが不思議だ。

1メートル歩いてイラク側に帰って「やっほー、質問があるんですけどー！」なんてクウェート側のイギリス兵に叫んで自分の姿を想像しただけで、おかしくて涙がでそうになってしまった。

ママジャミーラが写真撮ってもいいかしら、とカメラを向けたら、もうかなりその場の雰囲気イライラしていたらしいそのイギリス兵は、だめだ！というなりもっているライフル銃をこちらに構えた。本気で怒っているみたいだったので、私たちもおと

なくひきさがってタクシーにもどった。
タクシーの運転手は生きたこちがしないような顔をしていた。
もしかしたらひどい目にあった経験があるのかもしれない。敢えてきかなかったけれど。

このタクシーでそのままバスラへ帰ろうか、と「バスラまでだといくら？」ときく私たちに、運転手は「100ドル」と答える。
おもわず「100ドル!？」とおうむ返しに2人で合唱してしまう。
バスラからウム・カスルまで来るときバスに乗ったのだけれど750イラクディナール（約80Yen）だったのだ。
同じ距離をいくらタクシーだからって、12000Yen・・とは。
クウェート国境で命が縮むような思いをさせちゃったからかなあ。
100ドルは冗談だったのかもしれないけれど、とにかく250ディナール札3枚でのれるバスの魅力を出した私たちは、バスでバスラに帰ることにする。

結局バスを選んでよかったのだ。
帰りのバスで親切なご夫婦と知り合い、そのご夫婦が彼らの家に招待してくださった。
「どうぞ、私たちの家でサラート（お祈り）をなさってください。」と誘ってくださったのだけれど、（イスラム教徒の私たちは日に5回お祈りをするのが義務とされている）サラートさせてくださっただけではなく、食事も振舞ってくださった。
なにしろどこも埃っぽいので、ひんやりした土でできたそのお宅の部屋でサラートできたのはありがたかった。

お祈りが終わると、ぞくぞくとその家の住人がでてきた。
これが半端ではない。
ご夫婦のお母さまに始まり、ご夫婦の子どもたち、次男の夫婦とその子どもたち、長女・次女・・と続き、一体誰が誰のこどもなのか訳がわからなくなってくる。
とにかくみんなでワイワイにぎやかに、焼いたお魚がのったアラビア米のピラフとサラダ、どこの家庭でもだされる、その家で焼いた平べったいパンをいただいた。
冷たい水をだしてくださったのだけれど、これは泥の味がした。
イラクにはちゃんとした浄化設備がない、ときいていたので、いつもミネラルウォーターを持ち歩いて飲んでいただけだけれど、せっかく冷やした水をだしてくださったのだから、とその水をいただいた。

食事のあと、ご夫婦のお母さまのお話をきいた。
彼女の一家は湾岸戦争の前、クウェートに住んでいた

たのだそうだ。
事情はよくわからなかったのだけれど、全財産をクウェートにおいたままイラクにきてそのまま帰れなくなってしまった。
ご主人をはやくに亡くして、彼女は大変な思いをしてこどもたちを女手ひとつで育てたのだそうだ。
今もクウェートに家があるはずだし親戚もいるのに、イラク人はクウェートに入れないの、と昔なされた数々の苦労が思い出されるらしく、話しながら苦労を刻み込んだお母さまの頬には涙がながれていた。
朝鮮半島の38度線にしてもそうだけれど、大国の身勝手な政策にもてあそばれているひとびとがここにもいる・・・。
ついまいしがた見てきたイラクとクウェートの国境がまざまざと目に浮かんできた。

「泊まっていきなさい」といわれたのだけれど、明日早く出発しようと思っているので、とお断りして、暗くならないうちにいとまする。
このあとスークに行ってみようね、と2人で話していたのだけれど、なんとこの家のご主人と長男が送ってくださる、という。
「私たちだけで大丈夫です」と何度も言ったのだけれど、女性だけで行かせるわけにはいかない、とばかりにさっさとタクシーをひろって一緒にのりこんでしまった。

あーあ、これでスークに行けない・・・もう陽がたむいてきているし、これから2人でスークに行くなんて言ったら、やめなさい、というに決まっている。本当にイスラームの男性たちは心配性だ。
イスラームの男性にこんなにも大切に守られている女性たちがちょっぴり羨ましくもあった。
でも考えてみると、自由きままに女だけでこんな危ないところを旅している私たちみたいな女性は守られるに値しないわけだ。
それでも一旦自分の家に招いた客人は何があっても守ろうとするイスラームの教えに従っている彼らがとてもすてきに思えた。

途中ママジャミーラが写真を撮りたい、と止めてもらったところにユーカリのような樹が生えていた。
長男がちぎって指の間でもんだその樹のはっぱを差し出して、「これは薬になるんだ。お湯にいれて嗅ぐと喉にもいいし、飲むと胃腸にもいい」と言ってくださった。
彼らは私たちをホテルまで送り届けると、タクシー代まで払ってくださって振り向きもせず帰っていった。
彼らの後姿のなんと誇り高かったことか。おもわず「かっこいい・・・」とつぶやいてしまった。

わざわざ送り届けてくださった彼らの好意を無駄にしないため、私たちはその日スークに行くのをあ

きらめた。
私たちだってムスリマのはしくれなのだ。

タ方アル・アリ医師が訪ねてきてくださった。
アリ医師の自宅は戦禍を免れたのだけれど、ほんの
500メートルはなれたご近所の一家は爆撃にあ
い、家族21人全員が亡くなったという。激しい爆
撃に家が浮いたような感じがした、とおっしゃっ
ていた。
アリ医師のこどもたちは、まだ爆撃の恐ろしさから
精神的に回復できず、眠れない日々が続いているの
だそうだ。
大きく報道されないけれども、イラクのひとたちは
多かれ少なかれこのような経験をもっている。
これがアメリカでの出来事だったら、世界は大騒ぎ
するのだろうに。
また命の重さの大きな違いに心の底から怒りが湧
いてくる。

夜走っていると車を強奪されるから、とアリ医師は
早々に帰っていった。
きのうのタクシーの運転手が言っていたことはや
っぱり本当のことらしい。

お昼をごちそうになってしまったので、朝ウム・カ
スルに行くのに調達したサンドイッチが残ってい
た。
炎天下を一日中持って歩いていたので、はさんだ野
菜が傷んでいてちょっとおかしかったけれど、まあ
大丈夫だろう、と気にも留めないで食べてしまった。
夜何度も停電になる。イラクに入ってからいつも持
ち歩いているロウソクが役に立つ。

ナスィーリア・ナジャフへ

5月6日（火）

きのうの夜食べた傷んだサンドイッチのせいかな
んとなく2人ともおなかの調子がおかしい。
でも今日はナスィーリアとナジャフに行きたかつ
たので、気にしないことにする。
小さな町ではドルが使えない、とママジャミーラが
いうので、ホテルをチェックアウトした後バスのラ
センターに行って両替する。
道端に止めたタクシーの中から、札束をもって歩く
両替屋に声をかける。
ここで私たちは100ドル両替した。
こちらが渡すのは100ドル札たった1枚なのだ
けれど、イラクディナールにするとなんと250デ
ィナール札800枚なのだ。

ごまかしていないかどうか私たちは必死で100
枚ずつ束ねている筈の札束を数えた。

これが本当にいいかげんに束ねてあるのだ。
ある札束は98枚だったり、ひどいのは80枚だっ
たり・・・。
101枚のもあったけれど。
長い時間かけて、やっと800枚数え上げてから1
00ドル札を1枚渡す。
両替屋はその100ドル札を太陽にすかしたりし
て、真剣に本物かどうか確かめていた。
そりゃそうだろうなあ、なにしろ800枚と1枚を
交換するんだもの・・・どうしても枚数にこだわっ
てしまう私。

10時半ごろ郊外行きのガレージに着き、ナスィー
リア行きのバスにのる。
800枚も札束をもっている、私たちはお札3・
4枚でのれるバスの魅力から逃れられないのだっ
た。

ナスィーリア行きのバスは、なんと冷房がきいてい
て、車内にはクルアーンの詠唱がながれている！
この2時間半の快適な旅はお札6枚(約160Yen)
だった。

米軍の戦車の隊列とすれちがう。
彼らの隊列は一番前の戦車の銃口が正面を向いて
いて、2番目からは右、左というように交互に銃口
をむけている。
最後尾の戦車の銃口は後ろ向きになっている。
どこから攻められてもいい、という態勢で移動して
いるのだろう。
占領地にいる彼らに安心なんてものはないのだろ
うから。
力づくで占領しているのだから、たとえイラク人が
友好的な顔を見せたとしても、それは表面的なも
ので、イラクのひとたちの心を占める深い悲しみと、
占領者に対する憎しみをアメリカ兵たちは本能的
に感じとっているにちがいない。

午後1時、ナスィーリアに着く。
タクシーに乗り換えて、市内をひとまわりしてみる。
地元の青年が案内役をかってでてくれた。
ここは言葉もないほどすべてが目茶目茶に壊され
ている。(写真)
警察はもとより、病院、銀行、小学校にいたるまで
破壊し尽くされている。
建物の残骸から、原型を想像することは不可能だっ
た。

瓦礫の中にあった処方箋など 病院の跡に行ってみ
る。
みる影もなく爆撃され、瓦礫の中にカルテや処方箋
がちらばっている。
震える手でちらばった処方箋などをいくつか拾っ
て、持って帰ってきた。(写真)

ここにはたくさんの病人がいたはずなのだ、と考えて背筋が寒くなる。
なぜ病院まで爆撃しなければならなかったのか……。イラクにきてあまりにもたくさんの悲惨な爆撃の跡を見た。
イラクのひとたちは否応なくこのなかで生きていかなければならないのだ。
安全もなく、十分な水もなく、薬もない、この破壊され尽くした瓦礫のなかで。

でも彼らは人間としての誇りを捨ててはいない。
少なくとも、ゆきずりの人間である私たちを暖かく受け入れるだけの心を持っている人たちに、私たちはたくさん出会った。
ここで案内役をかってでてくれた青年も、この瓦礫の山と化した町が激しい爆撃を受けた時の状況を私たちに語る時ですら、柔らかな表情を崩すことはなかった。

彼は自分の家がこの近くだから寄っていくように、と誘ってくれた。
ここナスィーリアにはホテルはないから、自分の家には是非泊まっていくように、とも言ってくれた。
青年といってもまだ10代だとおもわれる彼は、もうしっかり大人の風格だった。
今日のうちにナジャフまで行きたいから、と彼の申し出を断わると、彼は本当に残念そうだった。
タクシーを降りてその青年と別れる時、案内してくれたお礼に、といくらかの紙幣を渡そうとしたのだけれど、彼は受け取らず、ニコニコしながら手を振って行ってしまった。

破壊され尽くしたこの町で仕事などあるはずがないのに……。
何時間かを私たちのために町の案内のために費やしたのだ。
当然いくらか請求するのがあたりまえのことだった。
彼が自分の家に泊まっていくように、と申し出てくれた時、私は持ち歩いている800枚の札束のことが頭に浮かび、出会ったばかりの青年の家なんかに泊まったら、彼はともかく、家族がどんな人たちかわからないし、危ないかもしれない・・・などと考えていた。

今私は自分の狭量な心を恥じていた。
もとよりナスィーリアに泊まるつもりはなかったけれども、私は彼を信じることができなかったから、彼の家族を信じることもできなかったのではないか。
きれいな心をもった誇り高い人間を疑った自分がとても卑小に思えた。

午後2時半にナスィーリアからナジャフ行きのバスに乗る。

すでに疲れていたし朝からおなかの調子が良くなかったところに、今度のバスは冷房もなく、おまけにナスィーリア・ナジャフ間の道は破損がひどく、舗装されていない、でこぼこの道をガタガタと揺られること3時間半。
バスの中はうだるような暑さだし、かといって窓をあければひどい砂埃がはいってくる。
背中と胃がひどく痛くて、ほとんど失神状態みたいになって眠る。
でもバスの振動がよかったのか、ナジャフに着くころには背中と胃の痛みは大分マシになっていた。

ナジャフはイスラームシーア派の聖地だ。
夕方6時ごろ、イマーム・アリ・モスク(写真)の近くの巡礼宿におちつく。
巡礼宿だから大変質素で、そのかわりひとり3ドルと安い。
私はスンニ派イスラームなのだけれども、まだ聖地マッカへ行ったことがない。
シーア派の聖地にこられた、というだけでなんだかとても嬉しい。

イマーム・アリ・モスクから流れるアザーン(礼拝への呼びかけ)に胸がときめいて、背中や胃の痛みなど完全にどこかへ行ってしまう。
ママジャミーラも同じ症状でバスの中では死んだように眠っていたのだけれど、やはり聖地の空気で甦っているようだった。
イマーム・アリ・モスクでマグリブ(夕方)の礼拝とイシャー(夜)の礼拝をすることができた。
ここでは女性はアバーヤ(黒い長衣)を着なければモスクに入ることはできない。
アバーヤのない女性のためには、モスクの入り口でアバーヤを貸し出している。

金箔をふんだんに使ったモスクはものすごく立派なものだった。
モスクの中には、銀細工があちこちに施されたイマーム・アリの廟がある。(写真)
ここには、恍惚状態でイマーム・アリの廟にくちづけしているたくさんのひとたちの姿がある。
遠くから、一生に一度の巡礼をと、ここナジャフに来るシーア派イスラームのひとたちにしてみれば、今自分の目の前に偉大なるイマーム・アリが眠っている、と考えると廟の前を去りがたいものがあるのだろう。

お金のないたくさんのひとたちが、モスクの敷地内に寝泊りしていた。
私たちにとっての3ドルはなんでもないけれど、彼らにとっては、それでも大変な額なのだろう。
堅いベッドがふたつあるきりの質素な巡礼宿、などと言ってはいられない気がしてくる。
でも電気がこないで部屋のなかは暑くて、ロウソクをもって暗い洗面所にいかなければならない。

やっぱりとうてい快適、とは言えない。
同じ階に泊まっている家族が廊下の端っこで携帯
ガスバーナーを使って夕食を作っていた。

私たちは少しケバブを食べるが、あまり食欲がなく、
あっさりした日本食がなつかしい。
この日は強行軍の後でもあり、疲れていたのも、フ
ァジュル（暁の礼拝）までぐっすり眠る。

ナジャフ・クーファ・カルバラー

5月7日（水）

朝4時、ファジュルの礼拝に行く。
まだ暗いけれど、すがすがしい朝の空気の中イマ
ーム・アリ・モスクで礼拝して、モスクのまわりにい
っぱいならんだ屋台のひとつでシャイ（小さなカッ
プで飲む濃い紅茶）を飲む。
シャイ屋さんはまだ子供なのだけれど、とても上手
に美味しいシャイを入れてくれる。

今日はナジャフ近郊のシーアの聖地、クーファとカ
ルバラーに聖地めぐりも兼ねて被害状況を見に行
く。

ナジャフからタクシーで20分ほどで、イマーム・
アリが預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の愛娘フ
ァーティマと暮らしていた家のあるクーファに着
く。（写真）

質素なこじんまりした家なのだけれど、ここがイマ
ーム・アリの生活の場だったのだと思うと、実際に
この地に来て、その時代に思いを馳せる機会を得
ることができたことに、感謝の気持ちで胸がいっぱ
いになる。

昔はクーファではなく、ネイとよばれていたそう
だ。それからカイイに変わり、今のクーファになっ
た、という。

ネイの時代には、人口10万人の都市だったのだ
そうだけれど、今は人口1万人。

すぐそばにあるイマーム・アリが刺殺されたモ
スクに行く。

たくさんの信者が「ヤー・アリー！」と言ってモ
スクのドアやあらゆるところにくちづけしている。
シーア派の人たちはサジダ（頭を床につける礼）
するとき、頭を床でなく聖地カルバラーの土を固
めた小さな石につけて、お祈りしている。
お祈りの回数も1日5回でなく、3回だ。

でもこれはファジュル（暁の礼拝）、そしてズフ
ル（お昼の礼拝）とアスル（午後の礼拝）を一
緒にし、マグリブ（夕方）の礼拝）とイシャー（夜
の礼拝）を一緒にする、というふうにまとめた
だけで、3回しか礼拝しないというわけではない
のだそう。

イラクはどこも灼熱の太陽に焼かれている。
石造りのモスクのなかでも、扇風機がたくさん回
っている。

クーファのモスクの広い敷地の中に水のない池
のように囲まれた一角がある。

聞くとところによると、ここが預言者ヌーフ（ノ
ア）の箱舟の出発地点なのだそう。

このクーファの地から、40日の間波にもまれ、
そのあと150日間も水の上を漂い続けて、とう
とう今のトルコのアララット山の頂上近くに辿
りついた、という壮大な光景が頭をよぎる。

聖地の空気は、私にクルアーンや旧約聖書に記
されているいろいろな場面をまざまざと描いて
みせてくれた。

私は聖地巡り、モスク巡りをしようと思ってイ
ラクにきたわけではなかったのだけれど、ここイ
ラクはまさにクルアーンや聖書に記述された地
であったから、ここでもまた偉大な神さまの御
恵みを感じないわけにはいかなかった。

清らかな気持ちになれたところだったけれど、
爆撃の跡もきちんと見ておきたい。

ナジャフの市庁舎は跡形もないほど壊されてい
る。イラク軍の兵舎のあったあたりでは、激し
い爆撃があったというけれど、今も真っ黒こげ
のトラックがそのまま放置され、まわりには、
不発弾や手榴弾がころがっている。

集まってきた子供たちが「とっても危ないから、
近づいちゃダメだよ」と教えてくれる。

子供たちは身近に恐ろしい例を知っているから
こんな忠告ができるのかもしれない。

こんなものがイラク国内のあちらこちらでゴ
ロゴロしているのだ。

片手や片足のない人をよく見かけるけれど、
爆撃で手足をなくした人たちだけではなく、こ
こにころがっているような不発弾の犠牲者なの
かもしれない。こんなものをよその国にばら
まいて、なんの責任もとらないどころか、そ
の国の資源を盗っていくアメリカ。

イラクのひとびとの解放を声高らかに叫びな
がら、経済封鎖の時のほうがまだマシといえ
るような生活をイラク国民に強いているアメ
リカ。

テレビのニュースを見て、イラクが解放され
たと本当に信じているすべての人たちに言
いたい。

どうぞ自分の目でイラクの現状を見てから、
判断してください、と。

ナジャフ郊外には広大なシーア派イスラーム
のお墓が広がっている。

ここには神がアードの民に遣わされた預
言者フード、サムードの民に遣わされた預
言者サーリフのお

墓があった。

私はドゥンドゥルマと呼ばれるトルコのアイスクリームが大好きなのだけれど、ヨルダンやイラク、シリアのアイスクリームもとても美味しい。暑い、ということもあるのだけれど、行く先々でアイスクリームを食べるのが楽しみだった。ここナジャフでも美味しいアイスクリームを食べて、身体を涼しくしてからカルバラーに向かう。

サッダームの精鋭、とよばれたフェデーインの拠点を通る。予想通りではあるけれど、見る影もない。

カルバラーにはイマーム・フセイン・モスクがある。殉教したイマーム・フセインは今でもシーア派の信者の間では絶大な人気があるらしい。イマーム・フセインの廟の前では、涙を流しながらクルアーンを唱えているひとがたくさんいた。私にもこみあげてくるものがあって、クルアーンを唱えながら涙ぐんでいた。

イスラームでは、偶像崇拜は禁止されているのだけれど、シーア派はその禁止がゆるいのか、イマーム・アリ、イマーム・ハサン、イマーム・フセインの3人の肖像画がたくさん売られていた。つい私も一枚欲しくなったほど、3人ともイスラームのハンサムというのはかくありなん、といった風情なのだ。彫りの深い整った顔立ち、顎ひげは長くもなく短くもなく、その瞳には深い慈愛が溢れている。スンニ派イマームにお叱りを受けそうだけれど、長いことうつり見とれてしまった。偶像崇拜禁止・・・という意味が少しわかったような気がした。あれだけの美男を前にしたら、今の私のようにみとれてしまって、讃美の対象が神さまではなく現世の人間・・・というようなことは本当に起こりうるのかもしれない。それほど神々しさを3人のイマームの肖像画はもっていた。

心残りではあったけれど、買うのはやめた。

アッバース・モスクでサラート（礼拝）をする。（写真）

カルバラーでの戦闘は3日間であったという。ほかの地域と比べると、被害が少なくてすんでいるようだった。イラクではどこでも見かける荷車をひくロバがこの町では、こころなしか元気そうに見えた。ナジャフでは2週間も戦闘が続いたというから、イマーム・アリ・モスクの近辺だけはかろうじて戦禍を免れているけれども、被害は甚大なものだった。

明日はバグダードに帰る。心配しているSさんの顔が浮かぶ。「私たちが元気で帰れば、許してくれるよね。」などといいながらバスラ、ナスィーリア、ナジャフ、クーファ、カルバラー...と見てまわったのだ。無事に帰らなければ...。イラク南部は特に危ない、とは日本にいる家族も知っているだろうから、こちらもひどく心配しているのだろうな・・・とまた申し訳なくなる。毎日のサラート（礼拝）のあと、神さまにたくさんお許しを願っている私なのだった。

この日もナジャフの巡礼宿に帰ったのだけれど、なんとなく様子がおかしい。私たちが部屋に入ってから、下のフロントのほうがひどくさわがしくなった。たくさんの人が出入りしているようだ。きのうは、私たちともう一組くらいしか泊まっていなかったはずなのに。ホテルのスタッフが何度もノックして、「用はないか？」と尋ねにくる。「どうしたんだろう。きのうは何か用はないか、なんて聞きにはこなかったのに」と思ったけれど、さして気にすることもなくベッドに横になってうとうとしかけたころ、ママジャミーラがいったん着替えた部屋着から外出着に着替えている。

「ん？今からおでかけ？」と聞く私に「夜中すぎたらね、盗賊がくるから、すぐ逃げられるように着替えてこの札束はおいてドルだけ持って逃げましょう。なんとかモスクに駆け込んで、ファジュールがすんだらすぐ発てばいいから」という。いっぺんに目が醒めてしまった私は、夕方下が騒がしかったことを思い出す。「何度もここの従業員が様子見にきたでしょう？私たちはかっこうのカモだから」と言われてなるほど、と思う。

なにしろ中東やアフリカを何10カ国も旅してきたママジャミーラのこと。用心するにこしたことはない、との判断なのだろう。すぐ逃げられるよう着替えながら、でも今まで気をつけて持ち歩いてきたイラクディナールの札束を、そのままあきらめるのはもったいないなあ、と思ってしまう。

今まで習ってきた忍法の技をいろいろ思い起こしてみよう。護身術もたくさん習ったのだけれど、実戦に役立つかどうか。とにかく、相手を驚かせてその間に逃げる、というのが鉄則なので、どうやっておどかさうか、と考える。でも私たちはすでに逃げる準備ができているわけ

だから、ことはそんなにめんどろではなさそう。札束を渡すのは、どうしても逃げられない、と思った場合のことにして、とりあえずミネラルウォーターを相手に投げつけることにして、フタをすぐとれる状態にしておいた。

中に入ってきたとたんに水をかけられれば、大抵の人はびっくりするだろうから、そのスキに引き倒して踏みつけて逃げれば、札束持っても逃げられるかなあ・・・相手が複数の場合はどうしよう・・・なんて考えているうちに眠ってしまったらしい。

なんということだろう！目が醒めると外はもう明るかった。

不覚にも・・・というような類いのものではない。忍法の技を思い出しながら、私はどうやらぐっすり眠ってしまったのだった。

寝ずの番をしていたらしいママジャミーラが「良かったね。なにもなく無事朝を迎えられて」と心底安心したように言った。

なにかあったらママジャミーラを守って・・・なんて思っていた筈の私はとても恥ずかしかった。

なんのことはない。

彼女は寝ないで私を守っていてくれたのだ。

とにかく何事もなくよかった、よかった、とファジュールをすませて、昨日と同じコースでシャイを飲んでからバグダードへ向かう。

バグダードへ

5月8日（木）

ファジュールの礼拝で無事を感謝した後、バグダードへむかう。

ナジャフ市内から、市外行きの車が集まるガレージへ、昨日見たシーア派イスラームの広大なお墓の中の道を抜けていく。

あちこちにイラク軍の旧式戦車が使われないままのこっている。

バスで約2時間。また渋滞の町バグダードにもどってくる。

Saudi Arabia からの援助物資を配給しているところを通る。

たくさんの人が並んで配給を待っている。

アル・ラシッド・ホテル近辺はものものしくアメリカ軍が守っていて、タクシーも入れない。

パレスチナホテル近くの銅像が引き倒された広場にも、戦車が配置されている。（写真）

爆撃を受けた大統領宮殿は、私に広島原爆ドームを思い出させた。（写真）

最初に爆撃を受けた教育省の側を通る。

なぜ教育省やバグダード大学などが攻撃対象になるのか、はなはだ疑問だ。

アメリカはイラクの頭脳を破壊することも目的なのだろうか。

ファルージャの小学校占拠といい、イラク人から教育の機会を奪って、考えることのできない人間を作っていきたいのだろうか。

それにしても、主要なメディア・省庁などの建物はことごとく破壊されている。国会まで破壊して、どうやって戦後復興するつもりなのだろう。それにしても、あちこちにあるサッダー・フセインの顔は、よくもここまで、と思うほどどれもていねいに削り取られている。（写真）

ママジャミーラと交流があった「イラク婦人同盟」事務所に行ってみるが、そこには男性ばかり。

男性たちが「婦人同盟」は解体した、と言う。

今は「Liberal Democratic Movement」というデモクラシー推進団体の事務所になったのだときかされた。

女性たちを追い出してデモクラシー推進なんて、なんだかうさんくさい気もしたけれど、とにかく話をきいてみたかった。

リーダーのムハンマドさんは38歳。

サッダーの圧政のために家族を亡くした、という彼は「私たちには、サッダーが良い指導者であった、とはとても言えない。彼は確かに6箇月分の食料などを全イラク人に配給したが、それは戦争に備えるためだったからだ。今私たちは民主主義国家を作るチャンスを手にしている。しかし今の私たちには何もない。教育をきちんと受けたリーダーも、軍隊も、省庁も。そしてアメリカにさからう自由も。今の私たちは0以下のところにいるのだ。選ぶ権利はない。

だから、アメリカに協力せざるを得ない。しかし、私たちはイラク人としての誇りを持っている。

アメリカのシステムではない、イラク人の政党で国会を作っていくつもりだ。

アメリカは友人だがそれ以上ではない、といっておこう。今アメリカにさからえば潰されるのだからね。」と淡々と語った。

イスラーム国家を樹立するチャンスだ、とは考えられないのか、という私の質問に彼はこう答えた。

「あなたはイラクの状況をわかっていない。イラクにはひとくちにイスラームといっても、あなたがたのようなスンニ派もいれば、私たちのようなシーア派もいる。キリスト教徒もいれば、サービア教徒、拝火教徒などもいる。民族的に言っても、アラブ人もいればクルド人もいる。アルメニア人もいればト

イラクレポートー占領下のイラクに行くー

ルキスタンもいる。

そんななかでイスラーム国家なんて理想をかかげていたら、国をまとめることなどできない。私たちがめざすのは、政教分離の民主主義国家だ。ただしアメリカ型民主主義ではなく、我々の民主主義だ。そのために、全ての国からの援助が欲しい。我々は日本にはとても期待している。」

インタビューの後、彼らは親切に車で私たちをSさんの家まで送ってくださった。

バグダードにて

5月9日（金）

お世話になっているバグダードの土づくりの家で一日その家の3人の娘さんたちと話をしす。外ではしょっちゅう銃声がしているので、彼女たちは恐ろしくて外にはでられない。

15歳の末の娘さんは今高校生。彼女は自分の体験をこう語った。

「戦争が始まって、ここは危ないからって郊外の親戚の家に疎開することになったの。姉たちは先に親戚の家に行ってたのだけど、私はすこし遅れて兄と行くことになった。私たちが外にでたとき、爆撃にあったの。私のすぐ側に爆弾がおちてすごく怖かった。兄が私を押し倒して伏せさせたから助かったけど、もし一人だったら死んでた。爆撃は長い間続いて、すごく怖かった。靴がぬげてしまったから、はだしで泣きながら走って逃げ惑った。今でも毎晩夢にみるの。私の従兄弟は、略奪者に車を渡せ、といわれて断って銃殺された。アメリカは自分たちがよそから連れてきた人たちを雇って略奪させてるのよ。バグダードの人たちは、みんなそのことを知ってる。良心のない人は一緒になって略奪するようになったけど、一般のイラク人たちは略奪なんてしてない。

戦争が終わった、って聞いて、学校に様子を見に行ったクラスメートがいたの。そのひとたちをアメリカ軍が連れていったって聞いてから、みんな怖くて学校になんて行けなくなってる。彼女たち、帰ってきていないのよ。どうして私たち、こんな目に会わなくちゃならないの？

どうしてアメリカ人はこんなこと平気でさせる大統領を選んでは？

私はブッシュが、犬のように死ねばいいと思ってる。こんなことする人間は人間じゃない。悪魔だとしか

思えない。」

このような悲痛な叫びが日本で報道されているのだろうか？

彼女は涙を流しながら、叫びながら訴えていた。私も彼女の話の聞いている間中、涙がとまらなかった。私が日本で爆撃を止めて！と叫んでいる時、彼女はその爆撃の下で逃げ惑っていたのだ。

私たちは抱き合って一緒に泣いたけれど、経験したものと経験しなかったものとの溝はうめられるものではない。でもその情景は私の脳裏にまざまざと描かれた。

私が小学生のとき、始めて原爆ドームを見に行き、苦しみ悶えて死んでいった人たちの写真を見た。そのあと長い間私は不眠症になった。眠ろうとすると、閉じた瞼に地獄絵が浮かんできて、その人たちのうめき声まで聞こえてくるのだった。

私の娘と同じ年頃の多感なこの少女は、悪魔のなせるわざを身をもって体験させられたのだ。彼女たちは、私の娘が日本で享受している水や電気や便利な生活を手にすることはできない。今は教育の機会も奪われている。精神的に、どちらが幸せであるかは誰にもわからないけれど、少なくとも戦争が彼女たちの望んでいる生活を奪いとってしまったことはあきらかだ。

一瞬にして全てを焼き尽くす原爆のかわりに、今はじわじわと劣化ウラン弾を使った、巧妙でもっと長い世代にわたる、より残酷な殺戮が平然と行われている。彼女の目に憎しみの炎を見て、またここでも憎しみの増幅が繰り返される・・・と絶望的な思いがした。あたりまえだろう。なにも危害を加えたこともない相手に爆撃で殺されかけ、愛する従兄弟を殺され、友人を連れていかれ、すべてを支配され、外にでることすらかなわない生活を強いられているのだ。父親の仕事も兄の仕事も奪われ、生活の保証も、自分の未来の保証もないのだ。

彼女は医者になりたいくて、一生懸命勉強していた、という。学校がいつ再開されるかわからない今、自分の描いてきた夢は一体なんだったのか、という。

彼女は、この思いを日本人たちに伝えて欲しいと言った。私は必ず伝えると約束した。

重い気持ちをひきずりながら2階にあがると、20歳になる次女が、私がバッグにつけて持って歩いている赤い造花のバラをめざとく見つけて、「どうし

たの？それ」と聞く。
ほとんど忘れていたのだけれど、最初バグダードに入った時に泊まったホテルのマネージャーらしき男性がくれたものだった。
黒いビニールバッグに赤い花がよく映えたのでつけていたのだった。
彼女はその男性の話にひどく興味をおぼえたらしく、根掘り葉掘りききだそうとする。
私にとっては、ホテルのスタッフというだけなのだから、ちゃんとした記憶がない。
それなのに彼の背の高さはどれくらいだったか、目の色は？髪の色は？歳はいくつくらい？花をくれたとき情熱的だったか？・・・と質問せぬ。

年齢は20台前半だと思うけど、そういえば出会って2日めだったにもかかわらず、結婚したい・・・なんて言ってたなあ、と言うともう大騒ぎ。
結婚が必要なのは、私なのよ。彼の写真を見せなさい、という。
そんなものもっているわけがない。
するとホテルにもう一度行って、彼の写真を撮ってきて、などと言いつくす。
「そんなことしたら、ややこしくなるじゃない。」と私が言うとガッカリしている。

友達というと同様に決まっている彼女たちの生活パターンのなかでは男性は未知なる存在で、だからこそ会話の中だけでもこんなに楽しめるのだろうな、と日本での男も女もゴチャゴチャの友人関係を思い出しながら、なんだか彼女たちが羨ましくなった。

彼女たちにとって、結婚はとても神聖で大切なものだ。
彼女は自分の部屋に大切にしまってある新しい服や寝間着、宝石や下着にいたるまでのたくさんの結婚のための品物を次々と見せてくれた。
たくさんの衣装や下着や宝石を花嫁が持つていくと、結婚相手のお母さまが花嫁を尊敬して大切に扱ってくださるのだそう。
私たちから見るとなんだかゲンキな話で、そんなものかなあ、と思うけれど、彼女たちにしてみれば重大事らしい。
事実のほどはわからないけれど、少なくとも彼女はそう信じていた。
結婚の話から彼女はお砂糖とレモンと水だけでつくる除毛剤を見せてくれた。
イラクの女性は結婚する時、身体中をこの自家製の除毛剤でピカピカにするのだそう。
結婚してからも、もちろん旦那さまのためにいつも綺麗でいなくちゃね、とはなんと涙ぐましい女心なのだろう。

「この自家製除毛剤(ちゃんと名前があったのだけ

れど、どうしても思い出せない) でヤスミンも綺麗にしてあげる」とめんどろ見のいい彼女は除毛サロンよろしくさっそく仕事にかかったのだけれど、かつて薬品かぶれなど一度もしたことのない私の腕が、なんとかぶれて真っ赤になってしまった。
これには彼女も驚いて謝ったのだけれど、私の身体は化学薬品に慣れてしまっていて、自然のものにアレルギー反応を起こすようになってしまったのかしら、となんだかガッカリしたのだった。

この日は台所仕事を手伝っていたのだが、日本の食べ物について聞かれ、そういえば人間の盾の人たちがホテルに残していったソーメンを持ってきたことを思い出す。
さっそくこれを出してきてゆでた。3人娘に食べさせると、みんなまずそうな顔をしている。
次女にいたっては、喉をつまらせてむせていた。
昨日のナジャフでの盗賊？さわざで、寝ずの番に疲れきったママジャミーラは一日中寝ていたのだけれど、ソーメンを作ったから、と起こして食べてもらおう。
「美味しいわねえ。やっぱり日本食はいいわね」とつるつる美味しそうに食べるママジャミーラを、不思議そうに見つめる3人娘だった。

イラクで暮らす人たちは、私たちと同じ人間だ。
遠く離れた場所で暮らす宗教のちがう、理解し難い人たち、などと思わないで欲しい。
私たちが爆撃にあえば、泣きながら逃げ惑うにちがいない。
ステキな異性のことを考えれば、胸がときめくにちがいない。
同じ感情をもち、同じように喜び、悲しみ、悩み、愛し合う人間なのだ。

そのひとたちは、私たちが日本でなんの苦労もなく水を飲み、おなかいっぱい食べているときに、その水のために伝染病にかかり、食べ物のために争わなければならないのだ。

人間にとって忘れてはならないことは、相手を受け入れ、理解しようと思うことだと思う。
相手からなにかを得ようと思うことなく、神さまから創られた同じ人間として相手を見ることのみが人間同士の絆を深めることができる。

イラクの人たちを理解することは、自分自身を理解することであると思う。
彼らに人間という同朋としてなにかできれば、それは自分自身に対してすることになると思う。
ちなみに私は、なにかしたい、と思ってイラクにいったのだけれど、私のほうが彼らに励まされ、もてなされ、元気をもらったのだ。
彼らは、私たちをもてなすことで、彼ら自身を幸せ

にしているのだった。

夜は長男と長女と遅くまでイスラームについて話す。

「今アラブのムスリムたちは、眠っているような状態で努力をしようとしなさい。

イラクがこんな目にあってしまうのも一つの例だけれど、これはイスラーム自身の責任だ」と長男。

「今私たちはきびしい試練を受けている。イスラーム全体が目醒ましてひとつにならなければ」と彼は真剣に訴えていた。

イスラームだけの問題ではない。

理性をもつ人間として、みんなが目醒ます時期だと思う。

パレスチナにしても同じことが言えると思うけれど、この憎しみの連鎖をわざわざ作りだして利用している悪魔とでも言えるような力が、今の世界経済を意のままに操っていることに気づいている人はたくさんいると思う。

おかしいな、と思っている人はもっと多いだろう。人々が今力を合わせて立ちあがらなければ、この勢力が世界を完全に掌握してしまう日はそんなに遠くないだろう。

バグダードの夜はアラビアンナイトの世界だ。電気がきていないことが、よけいその神秘さを増している。

暗闇に慣れてきた目に、月明かりの下おぼろげに映るアラビアの家々。

気温がやっと下がり、ひんやりした風にそよぐナツメヤシの木。

この美しい風景に平和が戻ってきますように、と心から祈った。

モースルへ

5月10日（土）

ファジュール（暁の礼拝）のあと、おにぎりを作って北部行きのタクシー・ターミナルへ。

北部への道は破壊されている部分が少なく快適なドライブだった。

時々イスラームシーア派の緑と赤の旗をなびかせたトラックとすれちがう。

トラックにはたくさんの男たちが乗っていて、手を振っていく。

これからバグダードに入って、政権造りに参加しようと思っている人たちらしい。

高い鉄塔がたくさん立っている発電所、続いて大規模な油田をとおる。

どちらも無傷でのこっている。

バグダード以南で、電気や石油の供給量が少ないの

は何故なのだろう？

川向こうにサーマッラーのモスクのドームが銀色に光り輝いている。

帰りにはあそこに寄れるのだ、と胸がときめく。

こちらでも南部で見たのと同じ旧式の小さな戦車が、土を盛った塹壕に残されたままだ。

この戦備で、本当にハイテク兵器を駆使するアメリカと戦うつもりだったのだろうか？

子供が巨人に向かっていくようなもので、ダーウード（ダヴィデ）がジャールルート（ゴリアテ）に神さまの力で勝利したのとは訳がちがう。

湾岸戦争の時だって、無数のイラク戦車が劣化ウラン弾で破壊され焼き尽くされたのに対して、アメリカの戦車が壊さたのは同士討ちだけだったと思う。

バース党のトップは、この段違いの兵器について十分な知識があっただろうし、アメリカはイラク攻撃をするにあたってイラクに大量破壊兵器がないことなどわかっている上でその存在の確信を口実に使った。

今では、絶対に持っていて証拠までであるとアメリカが主張したイラクの大量破壊兵器について、あまり論じられていない。

サッダーム・フセインの生死や居場所について論じられることもない。

アフガニスタンを爆撃したときと全く同じように、戦争の必要ありきだけで攻撃開始の理由はどんどん変わっていき、終わった後にはその理由などあっというまに忘れ去られてしまう。

爆撃を始める理由などどうでも良かった、と誰が考えてもこれは明白ではないか。

結局戦争で苦しめられるのは、何時の場合も前線に送られ迎え撃つ兵士と爆撃をうける一般人だ。

日本では、ついこの間まで大騒ぎしていたのに、イラクのことなどもうすでに忘れかけている。

復興はとなえながら、亡くなったひとたちや傷ついたひとや病気のひとに思いを馳せているひとはほとんどいない。

また次の国に戦争をしかけられるまで、戦争についての記憶は彼方で待機しているということなのだろうか。

草原に羊の群れが現われては消えて行くのどかな風景が続く。

草原の中には、ぽつぽつとベドウィンの張る天幕。彼らはずっと昔から、こういった天幕を張って羊たちを追ひ、転々と住居を変える遊牧生活をしている。

お昼すぎにモースルのガレージにつき、市内行きのタクシーに乗りかえる。

チグリス川に架かるニネヴェ橋はものすごい渋滞だ。

向こう岸には石造りの町が広がり、ところどころにモスクのミナレット（尖塔）が見える。

北部の被害状況は比較的マシだときいていたけれど、バース党本部・テレビ局・銀行などは爆撃をうけ破壊されている。

ただ、なぜか北部は電気がきていて、ホテルはお湯もでる。

給油を待つ車の列にはどの都市もかわりはない。私たちを案内してくれたタクシーの運転手は、ガソリンを手に入れるのは不可能だから、ケラシン（灯油）を使っている、と言っていた。

帰国してからひとに聞くと灯油で車は走らない、というのだけれど、ガソリンに混ぜるくらいなら走るのだろうか。

とにかく私たちのタクシーは、おそろしくゆっくりゆっくりだけれど、ちゃんと走っていた。

この運転手は「サッダーム・フセインは偉大な指導者だった。もし彼がいれば今わたしたちがこんなに苦しむことはなかっただろう。

湾岸戦争の後でも大変ではあったけれど、サッダームがいたから、すぐ建て直しがきいたのだ。

給油に2日も3日も待ったり、電気がこなかったり、ということなどなかった。」とサッダームを称えた。

私たちが出会った人たちのサッダームに対する意見は二通りに分かれていた。

ひとつは、サッダームも嫌だったがアメリカはもっと嫌だ、という人たち。

それから、サッダームは偉大だったという人たち。どちらにしろ言えるのは、アメリカの支配を望んでいる人などいない、ということだ。

アメリカが言っているようにイラクの人々の解放のためにこの戦争をしかけたのなら、一日も早く軍隊をひきあげ、爆撃で傷ついた人々に補償し、復興の資金援助をするべきだ。

人々の解放のための戦争などあったためしはない。殺された人はかえってこないのだ。

町のあちこちにあるアメリカの戦車のまわりには、子供たちがガムやアイスクリームなどを売るために群がっている。

運転手はこどもたちの近くに車を止めると厳しい表情でなにか言った。

アラビア語だったのでよくわからなかったけれど、「米兵に媚びなど売るんじゃない。誇りをもちなさい」と叱ったように思われた。

彼の表情には、慈愛と誇りと悲しみが入り混じっていた。

ここモースルの郊外には、忘れ去られたようにかつての超大国アッシリア帝国の首都ニネヴェがある。ユーヌス（ヨナ）が神からの啓示を伝えて人々が改

悔したという、あのニネヴェだ。

崩れかけた城壁の中には、町の跡やくずれかけた城門などが広々とした草原のあちらこちらにたたずんでいる。

風になびく背の高い草ぐさや野あざみに、それらはうずもれるように何世紀もこうして歴史の忘却の中にいる。

ここがかつては人口10万とも12万ともいわれる活気溢れる都市だったなどと、誰が想像できるだろう。

石造りの荘厳なユーヌス（ヨナ）のモスクへ行く。このモスクは小高い丘の上にあり、町中が一望に見渡せる。

あまりの美しさに息を呑む。

ここも略奪にあったけれど、すぐ修復されたのだと運転手が言っていた。

今回私はイラク入国を再優先したので、カメラを持たないで家を出た。

カメラなど持っていて、入国拒否されては・・・と思ったからだ。

成田で待ち合わせていたママジャミーラがちゃんとビデオとデジタルカメラを持ってくるのを知り、とりあえず使い捨てカメラを買うことにした。そういう事情で写真はわずかしがなく、使い捨てカメラのフィルムを使いきってしまったので、ニネヴェの遺跡やユーヌスのモスクからの景色を写真に残すことはできなかった。

そのかわりせっせとスケッチして一生懸命景色を脳裏に焼き付けたのだけれど、残念ながらここで映像をご紹介することはできない。

運転手は彼の敬愛するサッダーム・フセインの宮殿に連れていってくれた。

車を走らせながら、「日本の天皇は宮殿をもっているか」と聞く。

「皇居というのが宮殿ならもっているけど」と答えると、「広いか」と聞く。

「皇居はとても広い」というと「サッダームの宮殿も広い。どこの国でも皇帝や大統領は広い屋敷をもっている。あたりまえのことではないか。なぜ、サッダーム・フセインだけがこんなに非難されなければならなかったのか。」と本当に口惜しそうに言った。

「ここはとても美しかったけれど、全部壊されてしまったよ。もっともそのおかげで、前は入れなかったのが今は入れるようになったけどね」と言いながら、運転手は宮殿のまん前に車をつけてくれた。

なんだかドキドキしながら宮殿に入る。

中はよくもここまで、と思うほどめっちゃめっちゃに壊され、なににもない瓦礫だけの空間はガランとしてい

た。
壁に使われている石まで剥ぎ取られていた。
ママジャミーラが写真を撮っているのを見て、宮殿の中にいたらしい若者たちがどこにこんなにいるの？というほどたくさん集まってきた。
イラクの人たちは子供から大人にいたるまで、みんな写真を撮って欲しがる。
ママジャミーラが撮ってあげた写真を見て、(デジタルカメラはすぐその場でみられる)みんな大喜びしていた。

そのうち宮殿の一角で、彼らの持ち込んだカセットプレイヤーから流れる音楽に合わせてみんな踊りだした。
「これはクルディッシュダンスだよ」という。
めずらしそうに眺めている私に彼らは一緒に踊ろう、と誘う。
せっかくのチャンスだからと思い、手をつないだ踊りの列に私も入れてもらおうと、みんなまたまた大喜び。
いろんなステップのダンスを続けて踊り、疲れを知らない。
なんにも考えないで、時の流れを感じながらただただ踊りのリズムに身をまかせているのは気持ちが良かった。

といっても、いつまでも踊っているわけにはいかないので、「ありがとう」と言って行こうとすると、彼らはコーラをごちそうしてくれた。
この若者たちの、爆撃で廃虚となった宮殿の中でなんと元気だったことか。
でもみんなサッダームが大好きだった、というのがあった。
略奪者たちがやったことは本当にハラーム(イスラームでやってはいけないこと)だった、と悔しそうに言いながらそれでも宮殿の瓦礫の中で楽しそうにダンスを踊る若者たち。

私は私の知識で彼らの心理分析しようとするのをやめた。
彼らには忌まわしい爆撃の日々があった。
彼らの敬愛するサッダームの宮殿は爆撃され、略奪された。
爆撃の終わった今、彼らは宮殿の瓦礫の中で楽しそうに踊っている。
彼らにはほかになにができるだろう。

この若者たちは、敗戦にうちひしがれて卑屈になったり、自分の存在の意味を問うたりしてはいなかった。
あるがままの現実を受け入れ、その中に自分の居場所をちゃんと見つけているのだった。
どんな境遇にあっても笑いをわすれない、彼らの自然な偽りのない強さは、私にとっては驚嘆に値するものだった。

爆撃の危険もなく、物に溢れ、食べたいものを選んで食べることができる日本。
おそらく何不自由ない生活をしている、原宿で思い思いのコスチュームに身を包んで踊っている若者と、物質的に豊かな生活などのぞむべくもない、でも自然体で瓦礫の中で踊っている若者。
一体どちらが幸せなのだろう。
なんだか複雑な思いがずっと心に残っている。

ティクリット・サーマッラーへ

5月11日(日)

チグリス河畔の気持ちの良いホテルで朝5時まで眠った。
ファジュルの礼拝をすませて、ウェハースの朝食を食べてでかける。
モースル郊外は一面草原地帯。
イラクは自給自足できる農業国だと聞いていたけれど、しっかりうなずける。
タクシーの運転手にバグダードに帰るのだけれど、途中ティクリットとサーマッラーに寄っていきたい、と言うとOKというので、少し高かったけれど50ドルで話がついた。
ちなみに来る時は30ドルだった。

ところが、運転手はやたら急いで一路バグダードへ向かっているように見えた。
ティクリットに寄ってね、と念の為に確かめると「ティクリットはイラク軍が守っていて、行くと銃撃されて危険だから行けない」と言う。
どうしてイラク兵が守っているのだろうか？
アメリカが制圧したと聞いていたけれどミスインフォメーションだったのだろうか？
まだティクリットにはサッダームが生きていて、共和国防衛隊が守ってるってこと？
・・・などといろいろ考えてみるが、考えれば考えるほど行ってみるほうがはやいじゃないかと思う。
それにそんな話がちがうじゃない、と私たちは気分が悪い。
「寄り道するから、50ドル払ったのだから危なくても行って。だいたいイラク軍がどうして私たちを攻撃するの」といくら言ってもだんまりを決め込む運転手。

とうとうバグダードとティクリットの分かれ道に来てしまった。
どうしよう、と焦る私。
突然ママジャミーラが前の運転手席のシートをバンバン叩きながら「ティクリット、ティクリット、ティクリット」と繰り返す。
時々ママジャミーラの底力と言おうか、押しには驚かされるのだけれど、この時も運転手がその迫力に

押されたい。停車してはくれなかったけれど、ティクリットを通っていった。

サッダー宮殿と省庁は爆撃されていたけれど、そんなに被害を蒙っているようにはみえない。他の都市ではイラク軍の軍服を着たイラク兵をみかけることはなかったけれど、ここでは軍服を着たイラク兵たちが堂々と道を歩いている。やっぱりここは陥落してなかったのかしら、と思ったのもつかの間、アメリカ軍の戦車隊とすれちがう。なんだかよくわからなくて狐につままれたような気がした。

これだけアメリカ軍の戦車が堂々と行き来しているということは、やはりティクリットは陥落しているのだろう。でも何故イラク兵も堂々と軍服を着てアメリカ兵と一緒にここにいるのだろう？よくわからないままタクシーはティクリットの町を通りすぎた。

もうひとつの目的地サーマッラーに向かう。来るとき、遠くに光り輝いていたモスクのドームが見えていた所だ。サーマッラーは全く爆撃を受けていなかった。アップース朝がこのあたりを支配していた時一時的に首都になっていたこともある活気溢れる町だ。

ママジャミーラの日本での知り合いに、サーマッラーに行ったら自分の家に是非寄ってください、といわれていた方がいる。その人の家を訪ねようとしたのだけれど、電話網はどここの都市も同じで寸断されていて通じない。ママジャミーラはその方の電話番号を知っているだけで、アドレスは知らない。その方の名前と弁護士であることを運転手に伝えて、道にたむろしている人たちにきいてもらう。そんなことでは到底見つけ出すことはできないだろうと思ったのだけれど、驚いたことに時間はかかったけれど、その方の家を見つけ出すことができた。これはイスラームの国だから可能だったのだと思う。なにしろちょっと道を尋ねると、わっとまわりの人が集まってきてああでもないこうでもない、と相談しているうちになんだか目的に辿りつく、というお国柄なのだ。

とにかくママジャミーラの知り合いの家には辿りついたが、今度は本人がいない。今本人は遠くに行っている、という話だった。でも本人がいようがいまいが、そんなことはお構いなしにもてなしてくれるのがイスラーム。彼らの家でたっぷりの朝食をごちそうになってし

まう。タクシーの運転手はモースルを脱出した時からずっとガソリンが足りないと心配していたのだけれど、ここの家族にどうすればガソリンが手に入るかと相談していた。なにしろガソリンを手に入れるには2日も3日も並ばなければならないのだから。大抵のタクシーは前もって手に入れておいたガソリンを車に積んでいるのだけれど、このタクシーにはどうやらその予備のガソリンがないままバグダード行きを引き受けてしまっていたらしいのだ。ちゃんと私たちをバグダードまで連れていってくれるかどうか不安になる。

ご家族を紹介され朝食をごちそうになってから私たちはその方の家をおいとしました。バグダードまでのガソリンが気になったが、運転手はいままでの心配そうな顔が嘘のようになんだかご機嫌になっている。どうやら今お邪魔していた家の方からなにか書きつけのようなものをもらったらしい。彼はガソリンスタンドに並んでいる列を横目を通りすぎ、なんと前から逆に入って列の一番前に車をつけたのだ。これにはびっくりしてしまったけれど、運転手がその書きつけを見せると、スタンドの人たちは最初に彼のタクシーにガソリンをいれはじめた。

さっきお邪魔した家はサーマッラーでは名士なのだとママジャミーラから聞いて謎が解けた。この運転手は、ガソリンのストックがないにもかかわらず仕事を引きうけたものだから、さっさと行けるところまで行ってしまいたかったのだ。ティクリットによるのを嫌がった理由のひとつもそれだろう。ところがサーマッラーの名士からもらった書き付けのおかげで、おもわぬことに苦勞することなくガソリンが手にはいったのだった。

私は長々と並んでガソリンを待っている人たちの一番前に堂々と入って行ってガソリンをいれてもらっていることに、ひどく恥ずかしい思いがした。タクシーの中で小さくなって、外を見ることができなかった。ところが、このタクシーの運転手はあろうことかこのチャンスを利用して、ストックのガソリンまでいくつかに分けていた。いつの時代も、この占領下のイラクですら、地元の名士というのは特権を持っているのだった。私だって長々と並んでガソリンを待つのは嫌だったけれど、こういう特権を使うのも嫌だった。

上機嫌で出発した運転手と反対に私はとても気分が重かった。

それまでガソリンのことが心配で落ちなかった運転手は、人が変わったように自身満々になって鼻歌を歌っている。気持ちに余裕ができて、なるべく早くバグダードまで急いで行こうなどとは思わなくなっていた。そしてあろうことか道端で売っている闇ガソリン売りのところにひやかしに寄って値段をきいては、自分は簡単に安いガソリンを手に入れたんだ、と自慢している。何軒めかの冷やかしのとき我慢できなくなった私たちは「いい加減にして！」と運転手を怒鳴りつけた。

どこでも同じだろうけれど、人間としての誇りを失わないでずるいことをしない人間と、要領良く立ちまわって他人をだしぬくことに優越感を覚える人間がいる。今この占領下のイラクで、こういうずるい人間だけが生き残っていくのだろうか、それではアメリカの思う壺ではないか、と思うとやりきれない思いだった。バグダードにつくまで私たちは彼と口をきかなかった。

やっとバグダードに着いて、この運転手と別れられるというほっとした気持ちが私たちを油断させていた。通りの向こうに止まって客待ちをしていた見栄えの良い車に、私たちは何も考えないで乗ってしまったのだった。今度の運転手はニコニコと私たちのまわりたいに連れていってくれたのだけれど、Sさんの家について支払いをしようと料金をきくとべらぼうな金額を言う。聞き間違えたのかと耳を疑ったのだけれど、「今ガソリンがものすごく高いのだ・・・」等いろいろとまくしたてる運転手にはさっきのニコニコした表情はなく、その顔は怒気をおびていた。私たちは今まで時々やってきたように、このくらいだろうと思われる額を渡してさっさと逃げようと思ったのだけれど、不覚にもママジャミーラのビデオを入れたキャリーバッグを助手席にのせているのをまだ出していなかった。荷物をとろうとする私を見て、彼はさっと車に鍵をかけてしまった。ビデオやパソコンの入った荷物をあきらめるわけにはいかない。

仕方なく交渉にはいったのだけれど、全く交渉にならない。バグダード市内を何箇所かまわっただけなのに、彼は30ドルを要求したのだ。30ドルといえば、私たちがバグダードからモースルに行ったのと同じ額だ。市内だけとはいえ確かに1時間余りいろいろまわ

ってもらったので、私たちは15ドル払おうと思っていたのだった。ふつうに考えると2ドル位ですむ距離だった。でも、なにを言っても運転手は「ガソリンが高い」の一転張りで話にならない。

仕方なくSさんに仲介をお願いすることにした。Sさんは困り果てながら仲介に入ってくくださったが、運転手は頑として主張を変えない。私はこれ以上もめるのもSさんにもご迷惑だし、もう払ってしまおうと思ったのだけれど、ママジャミーラがこれもまた頑として「ノー！ガリー！（高い！）」と譲らない。双方にらみ合っていたのだが、とうとうSさんが「わかった。私が払おう」・・・と言い出した。これにはママジャミーラもあわててしまい、結局言い値を払うことになってしまった。

この後私たちがたっぷりSさんからお説教されたことは言うまでもない。「だから言っただろう。特にあなたたちは女性2人だけで動いているのだから、タクシーに乗るときは最初に値段交渉をして高いと思ったら乗ってはいけない。なぜ最初に交渉しなかったのだ？今イラクではガソリンがひどく高くなっているし手にいれにくいのだからなおさらだ。彼が私に何と言ったかわかるかね？彼は私にナイフをもってこい、と言ったのだよ。」えっ、決闘でもしようというつもりだったのかしら？・・・とびっくりした私にSさんは続けた。「彼はナイフで自分を刺して、警官にあなたたちが彼を殺したと訴えるといったのだ」

料金交渉決裂で気分が悪かった私たちではあったけれど、これには笑ってしまった。もちろん運転手にとっては笑い事ではなかったのだろうけど、それにしてもナイフで自分を刺すという考えもさることながら、今イラクに警察はいないのだ。それに殺された後、どうやって訴えるというのか・・・等々あまりにもめっちゃめっちゃな運転手の言葉を理解しているように真剣に語っているSさんを見ると、その土地にはその土地の考え方があるのだろうか、と思えてきたのだった。

それにしてもママジャミーラの「ノー！ガリー！」はSさん一家の語り草になってしまったのだった。

イラク出国

5月12日（月）

バグダードのサッダームタワー Sさん一家はバグダードでもっとゆっくりしていくようにと言って

くださったのだけれど、私たちはシリアの様子も見なかったの、朝バグダードを発つことにした。

彼女の部屋を一緒に使わせてもらっていた次女とはとても仲良くなっていたので別れるのがつらかった。

この地域だけの電話は使えたので、滞在中何人かの彼女の友人たちとも電話で話をした。

今の、外出もままならないようなバグダードでの彼女たちの困難な生活を考えるとなおさらやるせなかった。

私は日本に帰国した後、イラクの友人たちのために何ができるのだろう。

電話は寸断されているので通じない。

何か送りたいくても郵便も届かない。

また彼女たちと話そうと思えばイラクまでくるしか方法はない。

今の私にできることは、日本に帰って現在のイラクの本当の状況をひとりでもたくさんの人たちに知ってもらうことしかない。

彼女たちもそれをのぞんでいた。

こんなに長く留守にされていて仕事は大丈夫か、と心配してくださるSさん。

「さあ、もう仕事はないかもしれませんね」なんて私が答えると、「あなたはイスラームの私の家族だ。もし日本で暮らせなかったら娘さんを連れてバグダードに帰っておいで。私たちがめんどろみるから」と言ってくださる。

これが、仕事を失いアメリカの占領下で不自由な暮らしを余儀なくされているイラク人の言葉なのだ。いかに困難な時にも神さまの恩恵を信じ、希望を失わないのがイスラームの生き方だ。

私は今度の旅で出会った人たちからどんなにたくさんの事を学び、どんなにたくさんの場所で霊的な気を感じたかしれない。

2年前、私にイスラームへの目を開かせてくださった神さまに心の底から感謝の念が溢れてくるのだった。

それでもやはり別れはつらくて、涙は見せたくなかったのに次女と抱き合って別れを告げた時我慢できなくなって泣いてしまった。

次女も涙を浮かべながら、それでも笑って「すぐまた会えるよね」と言った。

私は「インシャアッラー（神さまの御心のままに）」と答えた。

マジャリス・アル・バグダードホテルに滞在していた、人間の盾でイラク入りしていた村岸さんと、中島さんという男性の4人でGMをチャーターして出国する。

交渉しても200ドルにしかならなかったGMは

贅沢ではあったけれども、女性3人はかなり疲労困憊だったし中島さんは体調を崩しているときいたので、ほかに交渉すれば安くなるタクシーやバスという手もあったけれど、私はこのGMが妥当だと思った。

出発までに多少のいざごはあったけれど、11時過ぎには無事出発することができた。

入国の時と事情は同じで、道中盗賊がでるというので休憩なしで国境近くまで突っ走る。

破壊されていないところは140キロのスピードを出して走ったので、4時半にはイラク国境に着いた。

イラク出国は簡単だったけれど、ヨルダン入国チェックがことのほか時間がかかる。

結局ヨルダンに入れたのは午後6時。

国境を越えるのに1時間半もかかってしまった。

もっともイラクに入る時もそれくらいかかったのだから同じなのだけど。

ヨルダン人の運転手は自国には行ってやっとな安心したらしく、レストランで食事をとっていくと言う。私たちはモロヘイヤスープを食べたかったので、アンマンまで我慢することにしてヨーグルトだけ食べた。

ヨルダンに入ってからアンマンまで荒野のなかに沈む夕日を見ながらまたまた走り続け、アンマンに着いたのは夜の9時半。

それでもバグダードからアンマンまで10時間ほどで着いている。

行きのボロボロタクシーは14時間以上かかったけれど、途中で車が故障したりなどというのはザラらしいので、私たちは行き帰りとも幸運であったといえるだろう。

イラク入りする前に泊まったパレスホテルにチェックインする。

ホテルのスタッフたちは無事帰ってきた私たちを見て喜んでくれた。

私たちはモロヘイヤスープを食べながら、何事もなくイラクから帰れた安心感に浸っていた。

明日はシリアに向かう予定でいる。

アメリカはイラクの要人がシリアに入国していると今度はシリアを非難し始めている。

シリアの人たちがこのことをどういうふうを受けとめているのか知りたかった。

ダマスカスにて 5月13日(火)～15日(木) 5月13日(火)

体調を崩したママジャミーラはもうすこしアンマンに滞在して休みたそうだったけれど、私は早くシリアに入りたかったので無理を言って移動してもらった。

50ドルと高かったけれど、タクシーにホテルまできてもらってシリアに向かう。

相変わらず出国・入国には時間がかかる。やっとシリアに入国できたと思ったら、ママジャミーラのパスポートにイミグレーションのスタンプが押されていなくてもう一度国境事務所までひきかえさなければならなかった。なんといいかげんなイミグレーションなのだろう！

そのうえ、国境で運転手が私たちのほかにもうひとりオランダ人を乗せてしまった。そのオランダ人に事情をきくと、彼は国境を越すライセンスを持っていないタクシーに乗ってしまい、国境で降ろされてしまったのだそうだ。でもそれは彼の問題であり、私たちが借り切ったタクシーに運転手がなんの説明もなく他の人を乗せたことには納得がいかなかった。そうでなくても体調の良くないママジャミーラは、スタンプの押し忘れに続くこの状況に今までになくお冠りだ。

ダマスカスのガレージに着いて、私は運転手に値引きを要求した。私たちは2人で借り切る料金として50ドル払ったのであり、あなたがオランダ人からもらった料金は私たちに払い戻されるべきだと。すると運転手は、彼は料金を払っていないという。国境事務所にこのオランダ人をダマスカスまで乗せていくようにと命令されたのだという。これにはあきれてしまった。確かに国境を行き来しなければ生活できない運転手としては、国境事務所の命令にさからうことなど思いもよらなかったのだろうけれど、役所はなぜこうも西洋人に弱いのか。

ダマスカスで日本人がよく利用するというスルタンホテルにチェックインする。こじんまりしたふたつ星のホテルなのだけれど、今まで泊まったどのホテルよりも清潔で快適だった。

ウマイヤ朝の首都だったダマスカスにはいたるところにモスクや教会がある。ヒジャーズ駅という鉄道の駅がすぐそばにあった。ヒジャーズというのは私が弾いているアラブの琴カーヌーンでも用いるアラブ音楽の旋律の名前でもある。

私はいかにもアラビア風の物悲しいヒジャーズの音階が大好きでよく使っている。

ホテルの屋上から東京に電話する。今回旅したところはどこへ行っても風が強い。いつも家族に電話している時、風が声を届けているような気になったものだった。

無事イラクを出国できたことで、かなり家族も安心しているようだ。

私としては無理してダマスカスまで移動してもらったママジャミーラの体調が心配ではあったけれど。

もっとも本人は以前もこんなことがあったとあまり気にしていないようで、スークに買い物にでかけましようと言いだす。

大丈夫かなあと思ったけれど、ママジャミーラのスークでの値段交渉の腕前を知っている私としては一緒の方がありがたかった。

私はとにかく値段交渉が苦手なのだ。

「うちには子どもが10人いて生活が大変なんだよ。母親は病気でねえ」などと言われるとすぐ「ああ、そうですか」・・・とおれてしまう。

今回の旅では、Sさん宅でも語り草になったママジャミーラの「ノー！ガリー！」に何度助けられたかしれない。

スークの方へ歩いていくと圧倒されそうな城塞があらわれる。

この城塞は十字軍の攻撃に備えて作られたものだ。傑出した英雄サラディンの勇姿が脳裏をよぎる。

アーケードになっているスークの入り口を入るとそこは別世界のよう。

右も左も金銀細工や美しい布で織った織物、観光客の目をひきそうなお土産物、日用品、とにかくなんでもありそうな通りだった。

客引きをしている店員さんたちの声をやりすごして、突き当たりにあるウマイヤモスクへ。

世界最古のこのモスクには、アラブの英雄サラディンと預言者ヤフヤー（バプテスマのヨハネ）の廟がある。

サラート（礼拝）してからゆっくり預言者の廟のまわりをクルアーンを唱えながらまわった。

このなかにサロメが所望してやまなかった預言者の首があるのだ。（写真）

サラディンの廟の前でクルアーンを詠んでから外にでた。

新約聖書にでてくる「真っすぐな道」とウマイヤモスクの間は迷路のように小さな道がたくさんあり、スークが続いている。

いろいろなハーブや花を乾燥させたものを10種類詰め合わせてもらう。

ハーブティーとして飲むと内臓すべてに良いのだという。

家に帰ってから、このお茶をいれてテーブルの上に置いておいたら家族が飲んで「なにこれ」と吐き出しそうにしていたので、好き嫌いはあるようだ。私は爽やかで美味しいと思うのだけど。

アラブやトルコではどこもそうだけれど、スークは本当にみていて飽きない。

日本やアメリカやヨーロッパのデパートというのが私はひどく苦手で、あつというまにめまいがしてくる。

どうしてもデパートに買い物に行かなければならない時は、後で頭痛を覚悟しなければならない。同じように商品を売っているところなのに、どこが違うのだろう。

学生がよく利用するというレストランで夕食をとる。

安いし清潔だし、ダマスクスは空気が悪いと住んでいる人が言っていたけれど、バグダードから来た私たちにとっては本当に落ちつけるひとときだった。

5月14日(水)

ママジャミーラの体調が良くないので、申し訳ないけどひとりででかけることにする。

信用のおけないアエロフロートの帰国便をまずリコンファームしに行く。

またまたスークめぐりをして、ダマスクス特産のローズダマスクの香油を買う。

クルアーンのカセットをお店で何度も聞かせてもらって、どの詠唱も捨てがたかったのだけれどいくつか選んで買った。

歩きつかれたのでカフェで一休みしてしっかり休暇の気分に入る。

食べられないママジャミーラのためにミネラルウォーターを買い、私も食べないでいようと思っていたのだけれど、おいしそうな焼きサンドイッチ屋さんの前を通ってしまったので誘惑に負けてしまう。

夕方ダマスクスに留学してイスラームの勉強をなさっている前野さんご夫妻がホテルを訪ねてきてくださった。

一日大事をとっていたママジャミーラも嬉しそうだった。

シリアではやはり人々はアメリカの脅しに戦々恐々としているらしく、海外から来ているひとの中には、次はシリアかと帰国してしまったひとたちもいるという。

シリアへも人間の盾としてたくさんの人たちがきてくださるのでしょうか？と不安を隠しきれない様子だった。

ふつうに暮らしている人々を脅して不安にさせる

権利が一体アメリカにあるのか、と腹立たしかった。

5月15日(木)

夜ホテルをチェックアウトしてダマスクス空港へ。これから東京に帰って、ひとりでもたくさんの人に私が今のイラクで見たり聞いたりしてきた状況を伝えたい。

西洋諸国の露骨な情報操作で真実はほとんど報道されていない。

「解放に喜ぶイラクの人たち」の報道の裏は日本で私がテレビで見たものとはかけはなれていた。

パレスチナ和平交渉にしても、アッバス首相とシャロン首相、ブッシュ大統領がにこやかに握手している裏にどんな恐ろしい思惑が隠されているのだろうか。

パレスチナ側の完全な非武装を声高にかかげているが、ではなぜイスラエル側には非武装を要求しないのか。

今イラクでも市民から武器をすべてとりあげようとしているけれど、なぜアメリカ側は武装した軍隊で市民を圧迫しているのか。

反フセイン勢力であるイスラム革命最高評議会のメンバー50人を連行し、何箇所かの事務所を閉鎖したという報道は何を意味するのか。

アメリカは自分たちのいいなりになる傀儡政権だけが必要なのであり、イラクの人たちが自分たちで作っていこうとする政権など始めから認めるつもりはないのではないか。

みつからない大量破壊兵器を見つけるのに、なぜアメリカは国連査察団をうけいれようとししないのか。アメリカ独自のやり方で、時間はかかるが大量破壊兵器を見つけて世論を納得させるなどといっているけれど、一体どういうことなのか。

サッダーム・フセインが国連査察を受け入れないとあれほど大騒ぎしたアメリカが、自由にどこでも探せる状態になった今、イラクを占領しているアメリカ自身が査察拒否しているのだ。

これではアメリカが今イラクで大量破壊兵器を作っていると思われてもしかたがないではないか。

あまりにも自分勝手に世界を踏みつけている大統領は、ご自分のことを「必要な時に駆けつけてほめたり叱ったりする家畜の群れを導くカウボーイ」と表現なさったときく。

一握りの特権階級にいる自分たち以外は、どうやら彼らにとっては家畜同然の存在らしい。

これはアラブの人たちだけの話ではない。

使い捨ての友人である私たち日本人にもあてはまることなのだ。

ひとりでも多くの人がよく考えてまちがったメディアに翻弄されることなく、彼らの犯した戦争犯罪

を追及していくことだけが、この果てしない暴走を食いとめることになると思う。

東京にて 6月12日(木)

イラクを出国して1か月が経とうとしています。今回ご一緒したジャミーラさんは、集まった募金を今こそイラクの人たちのために使わなくてはと、同じ思いをもつ人たちと、アンマンで医薬品を購入して11日の夜中に発つ予定で再度イラクへ向かいました。今ごろはまたあの長い長い道のりをアンマンからバグダードにむかっているはずです。

私は先週大阪の国立民族学博物館で、片倉もと子先生の講演後に、カーヌーン演奏をさせていただきました。演奏の前に、今世界中で虐げられ、苦しめられているイスラームの兄弟・姉妹の届くことのない声を届けたいという思いで、このアラビアの琴カーヌーンを演奏しますと挨拶させていただきました。私は、なんとかして理不尽に人権を剥奪されている同朋の苦しみを音で表現し伝えたいという思いでいっぱいでした。

今アメリカ議会では本当にイラクは大量破壊兵器をもっていたのか、という論争が活発になっています。大量破壊兵器などあってもなくても、戦争を必要としていた人たちにとっては戦争をしかけるための単なる口実のひとつにすぎなかったのだからどうでもよいことなのでしょう。でも、その口実のために殺されていったイラクの人たちはもどってきません。大量に使われた劣化ウラン弾の放射能のために、これからじわじわと殺されていく人たちもたくさんいます。議会でイラクの大量破壊兵器は戦争のための口実でしかなかったことをきちんと糾弾し、大統領の戦争犯罪が立証されなければならないと思います。

アフガニスタンでも同じことがいえます。今日本でアフガニスタンの話などまったく報道されていませんが、あの時使われた劣化ウランは700トン程度といわれています。アメリカに対してなにもしていないどころか、アメリカという国がどんな国なのか知らないような、毎日の生活を考えるのがやっとな人たちのうえに、テロとの戦いという正義を理由に容赦なく爆弾を落としたのです。

今回私はイラク全土で瓦礫の山をみてきました。どうして世界のほんの一握りの人たちの判断でこのようなことが起こり得るのか瓦礫の前で考えま

した。一体どれくらいのイラクの人々がこの戦争で殺されたのか政府のないイラクには調べようもありませんし、アメリカ政府にとってイラクの人々に膨大な犠牲がでていることは興味の対象ではありません。それどころか、自国民からどれだけの犠牲がでるかということすら意にも介していません。今イラクに留まっている占領軍兵士たちも、湾岸戦争のときと同じような放射線や重金属汚染の影響を蒙ることになるでしょう。彼らは、これまで被害を受けた人たち同様、将来アメリカ政府を相手に訴訟をおこすことになると思われますが、政府はまた因果関係はないと突っぱねることになるのでしょう。

一体いつまでこのようなことを続けるのでしょうか？戦争はいったん終わり、次の出番を待っています。でも、現地での戦争は終わっていません。イラクの人たちが、アメリカの傀儡政権ではない自分たちの政府をつくろうとすれば潰されます。アメリカに対して何もしていないイラクの人たちは、無条件降伏させられているのです。殺されるか言うなりになるか、ふたつにひとつの選択しかないのです。

今日本政府は、傀儡政権を是非ともはやく作りたいアメリカを援護するためにイラクに自衛隊を送ろうとしています。アメリカを友人としている日本政府は、アメリカのいいなりになっています。でも日本人である私たちはそのことを自覚しているのでしょうか？いつまでアメリカのいいなりになってほかの国の人々を殺すのに手を貸していくのでしょうか？目を覚まして、私は人を殺すのは嫌だとはっきり意思表示することはできないのでしょうか。どうぞもう一度、だれが戦争を必要としているのか考えてみてください。終わったのだからもういいじゃない、と思わないでください。

戦争は終わっていません。ひとつの戦争は次の戦争のための序曲です。今私たちが、事実をしっかりと知って声をあげていかなければこの流れを止めることはできません。今この流れをとめなければ、私たちはこの仕組まれた渦から抜け出すことはできません。平和を求める手段に戦争という選択肢は絶対にあり得ません。ひとりひとりが真剣に平和を望むならどの戦争も避けることができると信じています。了

劣化ウランに関する参考資料

劣化ウラン兵器を廃絶させましょう

Stop DU (Depleted Uranium Tipped Shells)

【参考ウェブページ】

- ・ 藤田祐幸さんの「イラク支援法案」を審議する衆議院特別委員会での参考人意見陳述(2003年7月1日)
(<http://www.jca.apc.org/DUCJ/siryo/sanko-fujita030701.html>)
- ・ 森住卓(もりずみ たかし)ホームページ
(<http://www.morizumi-pj.com/index.html>)
- ・ 劣化ウラン弾 被曝深刻 (2000.4.4～7.7) 中国新聞特集記事
(<http://www.chugoku-np.co.jp/abom/uran/index.html>)
- ・ 劣化ウラン研究会
(<http://www.jca.ax.apc.org/DUCJ/index-j.html>)
- ・ 核時代負の遺産 (2001.9.16～2002.7.7) 中国新聞特集記事
(http://www.chugoku-np.co.jp/abom/nuclear_age/index.html)

劣化ウラン弾とは何? (Depleted Uranium Tipped Shells)

- ◆ 戦車や建築物、また地中深くある構造物などを効果的に破壊するために使われている兵器です。湾岸戦争、コソボ、アフガニスタン等で大量に使用されました。
- ◆ 金属ウランは、鉛より約1.5倍も重く、また硬い金属です。これを弾頭の芯に使えば、戦車などの分厚い装甲や壁を貫通することができます。
- ◆ 着弾したこの弾頭は3000度の高温を発生し、鉄鋼版を溶かし、貫通中を焼き尽くします。また、高熱を発生したウラン粒子は粉塵となり、浮遊して広範囲に風に流され、地にまみれ、水に染み込みます。
- ◆ 核爆弾や核燃料を作るためには天然ウランに0.7%含まれる核連鎖反応を起こすウラン235を抽出(濃縮工程)します。そうすると、ここで不用となる99.3%の物質ができます。これはウラン238という物質ですが、これら不用となったウラン238を主体とするこれまで溜まった何十万トンという膨大な量の物質を劣化ウランと呼んでいます。いずれにせよ厳重に保管しなければならない手のかかる

核産業の廃棄物です。これは廃物ですから、弾頭に鉛や高価なタングステンを使うことなく、無料でこのゴミを手に入れることができ貫通力を倍増したスーパー兵器を作ることができるのです。

- ◆ 水俣病が水銀汚染で引き起こされているように、ウランは重金属特有の、人体に強い化学的毒性を持つといわれます。これが呼吸や飲食、あるいは傷口などから体内に入ると臓器を侵します。
- ◆ 劣化ウランは放射線被害も引き起こします。酸化ウランの粉塵を吸い込むと肺などの臓器に沈着されますが、そこでは、放射線としては大きいダメージを引き起こすアルファ線によって体内被曝を受けます。これによりガンや白血病を起こす可能性が高くなり、時限爆弾のように体を破壊するのです。特に細胞分裂の盛んな部位に対する影響は甚大で、生殖、子供に対する影響が大きいわけです。この影響を受けた人から生まれてくる嬰兒たちの中には死産や目や耳の無い先天的欠陥などが多く見られます。
- ◆ イラクにおいては、特に劣化ウランを多用された南部のバスラ地域を中心に、この12年間でガンの発生率が5倍～10倍と増加していることが報告されています。1998年時点でのユニセフの統計では、子供達だけで50万人死亡したと発表されています。これに輪をかけた経済制裁により、医薬品やインフラ整備不足などで、軽微な病気すら治療できずに悪化し死亡することが常態化し、すでにこの12年間で150万人が死亡したといわれています。
- ◆ 湾岸戦争で使用された劣化ウランの量が330トン以上といわれますが、この物質の半減期は実に45億年です。そして、アフガニスタンに対しても650トン使用されたと想定されています。今回のイラク攻撃には500トン以上あるいは1000トンとも言われる量が使われたと言われます。バンカーバスターにも使用されました。バンカーバスターには数トンのウランが弾頭に使われ、何層ものコンクリート壁を打ち抜き、深く到達してから効果的に爆発させることができます。アフガニスタンにおける調査では、爆撃のあったところでは例外なく人々は病気になっているということです。今回のイラク攻撃では、米軍大佐の証言によれば、都市部に対する攻撃にも、健康被害の認識はありながらも、破壊効果のみで使用の判断をしたということです。絶大な破壊力を持つこの兵器は、スーパー兵器として湾岸戦争以降兵器市場で注目の的になっています。
- ◆ イラクなどで使用された対戦車砲などの弾丸は、着弾したものは気化して酸化ウランとなって広がり、また地中に染み込みます。外れた砲弾はというと、地に落ちたり、突き刺さって、イラクではゴロゴロしているそうです。ウラン金属は水に溶けますので、

これが地下水を汚染します。半減期 45 億年ですから、これは永遠の循環を続け、この地に住む人々を殺し続けることになります。大量破壊兵器を持っていると理由付けして始めたこの侵略戦争で米英はイラクを大量破壊し大量殺戮を続けることになるのです。なんとしてでもアメリカはこれを速やかに回収撤去する責任があります。

- ◆ アメリカは湾岸戦争で、おそらくこれを初めて実戦に使用しました。この兵器を使用すればどうなるかという影響については、アメリカ国防省は当然認識はしていましたが、前線の兵士たちには殆どこの事実を知らせていませんでした。イラクに侵攻した連合軍兵士たちや埃にまみれた兵士たちは、これに汚染されました。湾岸戦争症候群として後に有名になったものです。直接戦争中に死んだ米軍兵士は同士討ちなどで 300 名弱でしたが、今回のイラク攻撃までの 12 年間に、湾岸戦争の復員兵の死傷率は 40% 近くの 26 万人に達しています。にわかには信じがたい数字ですが、すでに屈強な若者であった彼らのうち、10 万人が死亡しているということです。これが、湾岸戦争が第二の核戦争であったことの証であり、この兵器のビッグショーの結果です。そして、第2、第3、第4の核戦争を続けているのです。使用された量や場所を考慮すると、今回のイラク攻撃のこれからの惨状は想像するに余りあるものがあります。イラクやアフガニスタンの人口削減や国力を疲弊させるために、この卑怯極まりない、実に効果的な方法がとられているといえます。

【米軍大佐が認めた 事実】

「2003年9月13日(土) 午後2時56分 TUP速報172号
03年9月13日 米軍大佐の証言」より転載
(<http://www.egroups.co.jp/message/TUP-Bulletin/177>)

■500トンのDU(劣化ウラン)がイラクで使われたと米軍大佐が認める■

by ジェイ・シャフト(J.S.)「メディアにおける自由思考のための連合」

(Coalition For Free Thought In Media) 2003. 5. 5

3回にわたるインタビューで、米軍特殊作戦司令部のある一人の大佐(a U.S.Special Operations Command Colonel)が、米国と英国はイラクに500トンの劣化ウラン弾を撃ち込んだと認めました。

彼はまた、BLU-113貫通体をもつ5000ポンドの GBU-28バンカーバスター爆弾は弾頭に劣化ウランが含まれていると私に教えてくれました。

今まで、私の知る限りでは、GBU-28の弾頭をつくるために使用される素材は、秘密のベールで覆われたままでした。

彼はまた、非公式にはペンタゴンは何年も前から劣化ウランの健康への危険を認識していた、ということを確認しました。彼は、明らかに明白な安全上の理由で、また価値ある情報源を維持するためにも、名前を伏せたままにするように求めました。(私は、彼を情報源としてキープしておくために、彼の身元を用心して守るつもりであるということをお断りしておきます。)

私は、彼の身元を確認し、彼の情報が大部分正確だということを確認しました。

いくつかの事柄は、ある種の武器が極秘分類になっているために確認できませんでした。

次に示したのは、私が彼に行なった質疑の写しです。彼のことは、U.S.C.と表記します。

J.S.(ジェイ・シャフト): 私は、あなたが米軍の大佐だと理解していますが、それでよろしいのでしょうか？

U.S.C.: その通りだ。私は、中央司令部付属の米軍特殊作戦司令部に勤務している。私の仕事は、標的の座標をプロットし、その標的を破壊する最善の方法は何かを決定することだ。

私には、私の自由になる大きなアナリストのネットワークがあって、それでそれぞれの標的を分析して、どんな武器がそれを最もよく破壊するかを明らかにするんだ。

J.S.: あなたは、どれくらいの量の劣化ウラン(DU)がイラクで使用されたか、またどんなタイプの砲弾が使われたか、知っていますか？

U.S.C.: ああ、私は、少なくとも500トンのDU弾が連合軍によって使用されたのを知っている。また、多くの都市がDU弾でひどく攻撃されたことも知っている。

J.S.: 500トンだって？ 本当に確かなんですか？

U.S.C.: ああ、たいがい間違いないよ、そのことについては。私が知っているのは500トンを少し上回ったぐらいだったということだが、そうしなかったら最も近い百の位に切り上げてもいい。(くすくす笑い)

J.S.: 都市については？ あなたがたは、よく考えた上で都市にDUを使ったんですか？

J.S.C.: はっきり言おう、我々は、都市や人口密集地でDUを使うことを避けるようなことは、何ひとつしなかった。私は、わかっているから。私は、いくつかの標的に、もっぱらDU兵器を使った。それらの標的に最大限の打撃を与えるのを確かなものにするためにね。誰だって、標的を中途半端に破壊したくないだろう、

最大限の打撃を与えたいだろう。

J.S.: ちょっと待って。私は、バンカーバスターがDUだということとは知らなかった。あなたはどのようにそれを知っているんですか？ 私は、それが本当かどうか確かめなければいけない。

J.S.C.: そうだ、バンカーバスターの詳細はトップシークレットだった。まあ、がんばって確かめてもらえばいい。あなたの質問に答えるために、一つ質問をしよう。バンカーバスターが、鉄で強化されたバンカーをどうして貫通できると思うかね。弾頭の中にDUがなければ、地下にある標的を貫通することなどできないだろう。

J.S.: なるほど、要点はよくわかりました。では、どのバンカーバスターにDU弾頭があるのか教えてくれませんか？

U.S.C.: うーん... (長い休止)。一つについては教えようと思うが、そこまでだ。BLU-113貫通体をもつ5000ポンドのGBU-28(誘導爆弾ユニット)は、DU弾頭を装着して投下することができる。DU弾頭だけではなく、在来型の非DU弾頭とともに使われる。

もしテレビを見ていて爆弾が命中するのを見たとすれば、それがDUかどうかを見分ける簡単な方法がある。爆発したところの大气中で2次的な小さな白い炎が燃えているのが見えたら、それはDUが燃えているんだ。DUは白っぽいオレンジ色の炎を上げて燃える。ほとんど花火が燃えているみたいに見える。

J.S.: 他にどんなバンカーバスターがDU弾頭を使っているんですか？

U.S.C.: それに答えようとは思わないね。もうたくさんしゃべり過ぎたぐらいだ。次の質問は！

J.S.: 500トンのDUに戻りますが、国防総省／ペンタゴンは、故意に民間エリアをターゲットにしたんですか？ それから、もしそうだとしたら何故でしょうか？

U.S.C.: それはもう既に答えた。しかし、これは言っておこう、ほとんどの主要都市とその周辺にはイラクの装甲車輛がたくさんあったんだ。我々の方の戦車や車輛は、敵の車輛を破壊するためにDU貫通砲弾を使う。我々にわかっていることは、バグダードとその周辺で100トン以上のDU砲弾が使われたということだ。しかし北部の諸都市やバスラあたりでは、もっと大きな戦闘が行なわれた。我々は、イラクで20,000台以上のいろんなタイプの車輛を破壊した。

そしてバグダードの繁華街の建物を砲撃しさえした。DUでね。

J.S.: ペンタゴンは、そういうことが起こっていたということを知っていたんでしょ？ 何故それを止めようとしなかったんですか？ だって、DUの健康への危険からしても、我々がイラクを解放しているんだということからしても、そうでしょう？

U.S.C.: イラクにある軍用車輛を一つ残らず完全に破壊したかったんだ。

我々の車輛が、もうダメになっている車輛や既に砲撃を受けた車輛にまでさらに砲撃を加えているのをあなたたちが見たのは、そのためだよ。私は、20以上も穴があいた車輛の写真をたくさん見たよ。その目的は、どんな戦闘部隊がどうやったってその車輛を使うことはおおよそできないというように、確実にそうすることだ

イラクレポートー占領下のイラクに行くー

った。

我々は、イラク軍を殲滅して二度と戦うことができないように確実にしたかったんだ。その目的は十分に達成したと思うよ。我々が望んでいた以上だった、あれほど短い時間でね。

これには莫大な量の砲弾が必要だった。大部分はDUを先端に付けた 25mm、30mm、125mm (訳注; 実際には120mm) の貫通砲弾だ。

J.S. : DUに関係した健康への危険についてはどうなんですか? あるいは、あなたは健康への危険があることを否定しますか?

U.S.C.: 私に健康への危険について言明させるつもりなのか、え?

J.S. : もしあなたにそのつもりがあるのなら、ペンタゴン内でのDUについての隠された見解がどういうものか、私は確かめたい。

U.S.C.: うーん... (長い休止、それに続いてひどい罰当たりな言葉)。

よし、わかった。あんたに汚いものをあげよう、それをあんたが探し求めているというなら。ペンタゴンはDUに関係した健康への大きな危険があることを知っているよ。我々自身のテスト射爆場をモニターして、いろんな施設をつくったところから知っているよ。

イラクには高度汚染地域と指定された場所があった。我々が現地に軍部隊を配置する以前にだよ。バスラ、ジャリバー、タリルの周辺地域、南部砂漠の大部分、その他さまざまなホットスポットが、戦争前に、汚染地域と指定されていたんだ。

クウェート国境沿いの南部砂漠地域の中には、綿密な調査とテストで、特に放射性が強いエリアがあった。

サウジアラビアにある我々のテスト射爆場のひとつは、正常な自然の放射線レベルの1000倍以上を示しているんだ。我々は、米国内にも極度に汚染されている射爆場をもっている。そこは地獄だよ、80年代以来ずっとね。だが公にはいまだかつて何も言われたことがない。「尋ねるな、教えるな」は、同性愛だけじゃなくて、このことにも当てはまるんだ、とても重くね。

これまでに一度、DU砲弾にさらされる兵士はMOP (化学保護服) をフル装備すべきだという説が展開されたのを知っている。だけど、それは実際的でないということで、二度とオープンに議論されることはなかった。

J.S. : ということは、ペンタゴンはDUが有害だということを知っているという話は、真実なんですね?

U.S.C.: そうだ。80年代に現役だったハイレベルの指揮官の大部分がそれについて知っているということは疑いない。

J.S. : それじゃ、あなたは、自分の部下をDUにさらしたという事実をどう感じていますか?

U.S.C.: くっそおー!! 私の仕事について、あんたに何がわかるというんだ? 私は、与えられた標的を破壊するためにしなければならないことをしたまでだ。DUを使う必要があれば、標的分析レポートにそう書いた。私は実際に自分で砲弾を発射するわけじゃない、遠く離れたオフィスで仕事しているんだ。

J.S. : ということは、あなたはDUにさらされることを決して心配する必要がない、そうでしょう? とても勇敢なことで。

U.S.C.: (たくさんの罰当たりな言葉。) このインタビューはこれでおしまいだ。(さらに罰当たりな言葉。続いて電話をたたきつける音。)

私は、3回目のインタビューを最後までやりとげることは全くでき

ませんでしたが、この大佐から得たことはとても強烈で印象的なものでした。

彼が自分でも認めているように、DUの危険性がわかっていて、イラクの主要都市でそれが使われたのです。私たちの自国軍部隊は、高度に汚染された地域にさらされ続けています。何の警告もなしに、また兵士たちを防護する試みもなしに。

数百トンのDUが主要な人口密集地に使用されました。イラクのすべての軍事車輛と軍事施設を完全に破壊するようにという命令に軍部隊が従うことによって。

これは、高度に人口が密集した地域でDUが使用された最初です。国全体が再び汚染されました。そこで生きていく未来の世代のことを全く考慮することなしに。チグリス川は、その地域で栽培されるすべての農作物を灌漑しています。そして大部分の家畜は、この川から引かれた水とこの川で灌漑された農作物で育てられます。

さらにどれだけの数の赤ん坊が、異常出産で生まれてくるのでしょうか? さらにどれだけ多くの子どもたちが、生産的な生活を送ることができる年齢になる前に、癌になり死んでいくのでしょうか?

何千人もの人々が、最初の湾岸戦争で使用されたDUによって影響を受けています。イラクでの癌の発生率に関する数値は、湾岸戦争以来、癌とそれに関連した疾病が300~500%増加したことを示しました。今度は、主要な人口密集地域が高度に汚染されました。

イラクの人々の将来の健康に対する何の考慮もなしに。

私たちは、この行為の代償がどんなものになるかを確かめるには、ただ待つしかありません。それは、きっと非常に高いものにつくでしょう。そして、おびただしい数のさらなる苦しみと死を、結果としてもたらすでしょう。

著者について

京都市立芸術大学卒業

ザルツブルグ留学後、帰国してラウンジピアノの演奏活動始める。

京都、サンフランシスコ、ベルギー、シンガポール、東京と活動の場を移す。

アラブの民族楽器カーヌーンに惹かれ、トルコにてターヒル・アイドーデュ、

チュニジアにてジャメル・アビドに師事し、カーヌーン奏法およびマカーム理論を学ぶ。

2001 年、イスラム教徒になる。

2003 年 5 月、軍事占領下の実態を体験すべくイラクに入る。

※ ヤスミン植月千春ホームページ

※ <http://www.yasemin.info>

当冊子中にある記述や写真は上記ホームページに掲載しています。

イラクレポート ― 占領下のイラクを行く―

著作者 ヤスミン 植月 千春

2003年 6月30日 発行

2003年 8月23日 第2版

2003年 12月6日 第3版

2008年 6月15日 改訂 A4 版

印刷・発行者 ヤスミン 植月 千春

発行地 東京